
東リーネの精霊奇譚

式織 檻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東リーネの精霊奇譚

【Nコード】

N1265E

【作者名】

式織 檻

【あらすじ】

”精霊使い”の女子高生、東リーネ。今まで追い続けていた宿敵と目する人物を、彼女はついに突き止める。しかし、彼にはとある能力と事情があり、この戦いの行方は……。

プロローグ（前書き）

本作は『殺し屋殺しの藁人形』及び『スズランとマイナス』の話を完結する物語ですが、これらを読まれていなくても楽しんでいただけるよう、気をつけております。逆にネタバレを含んでしまっておりますので、ご了承ください。

ブローグ

さやかわのぞむ
鞘河望

黒髪で眼鏡の少年。超優等生、天才。アメリカの名門セントゲート高校に通う一年生。

きんひる
如月ジェック 小学校の頃の望の同級生。こげ茶の髪にベースボールキャップをかぶった少年。中学からアメリカに渡っていたのだが、数年ぶりにアメリカで望と再会し、最近は時々会うようになっていた。

カリフォルニアのとある喫茶店の奥の席で、顔をつき合わせて日本語で話しているこの二人についての説明は、現時点ではこの程度で十分だろう。ここで彼らの半生をちくちく語るのはナンセンスというものである。あるいは冗長 または、野暮と言ってもいいかもしれない。その程度の もしくはそれ程のことである。カップを口に持っていていき、ブレンドコーヒーを口に含んだジェックは、

「まあとりあえず、大学入学決定おめでとう、ノゾム。飛び級とは驚いたよ」

「ありがとう。……でもアメリカじゃあ、飛び級なんてそれほど珍しくもないだろ？ 最近日本でも増えてきたみたいだし」

「絶対数と確率の話を混同するなよ」

ジェックは含み笑い。そしてコトリツとプレートの上にカップを置き、

「いくら実例があつたとしても、それに選ばれていうのは依然として確率が限りなく低いことだ。素晴らしいことだ。……ハハッ。君の両親も鼻が高いだろう？」

「だろうね」

望は鼻で笑いながらスプーンをつまみ、紅茶に砂糖を流し込んだ。

「あの二人が喜ばないはずはないさ。逸脱した場所でさらに優秀な成績を残す。そのために僕らは、わざわざアメリカに來たんだから

ただそんなのは、僕にとってはどうでもいいことさ」

「……どうでもいい？」

「ああ。母さんが喜んで、父さんが喜んで、ばあちゃんが喜んで、じいちゃんが喜んで、僕にとってはどうでもいい」

「……へえ」

感嘆しつつ、ジェックは興味深げな顔を望に向けて、

「じゃあ、君は一体誰に喜んでもらいたいんだ？」

「兄さんだよ」

望はジェックの顔を真っ直ぐ見て、力のこもった声で答えた。

ジェックは首をかしげて、

「兄さん？ ええと……今は日本にいるっていう、君の兄さんかい？」

「ああ。亜紀雄兄さんだ」

紅茶をスプーンでかき混ぜながら、望はこくりと頷く。

「もしあの人が喜んでくれたら、あの人の喜ぶ顔を見ることができたら、その瞬間にこそ僕は達成感を感じる。喜びを感じる。幸せを感じる。それ以外は どうでもいいことだ」

「ハハッ。何だい、そりゃ？」

高笑いしてジェックは肩をすくめた。

「別にノゾムは、その人の世話になってるわけじゃないんだろ？」

その人に生活資金を貰ってるわけじゃないんだろ？ その人に住む場所を与えられてるわけじゃないんだろ？ その人に食事を作ってもらってるわけじゃないんだろ？ その人に服の洗濯をもらってるわけじゃないんだろ？ その人に部屋の掃除をもらってるわけじゃないんだろ？ しかも、その人とはこの二年間、一度も会っていないんだろ？」

「そう、そうだ」

「しかも 前話してたじゃないか。君の兄貴は君と比較され

差別されて、よくよく惨めな思いをさせられてたんだろ？ 親戚連中からも蔑むような眼で見られてたんだろ？ 君の存在のせいで肩身の狭い思いをしてたんだろ？」

「そうだ。その通りだ」

「だったら 何でだ？ そんな境遇じゃ、もはや君と君の兄貴は仲違いしてもおかしくないじゃないか。君が嫌われ疎まれて、疎遠になつてもおかしくない。なのに何でまた、アメリカで世話してくれている両親よりもその人の方が大切なんだ？」

「そう、確かに」

望は紅茶をコクリと一口飲んで、

「確かに、兄さんは僕のせいで苦しんだ。悲しんだ。夕飯のおかずが僕の方がやたら多かつたことなんて数え切れないし、僕の方がお年玉を倍くらい貰つてた。僕が花瓶を壊した時も弁明する暇もなく兄さんが怒られてたし、僕がいじめられて怪我したときは兄さんが僕を守らなかつたことを責められてた。成績でもそれ以外でも、毎日ちくちくといびられてた。僕が風邪を引くと母さんは付きっ切りで看病してくれたのに、兄さんのときは友人と買い物に出掛けてた。兄さんよりも僕の方が誕生日プレゼントもクリスマスプレゼントも大きかつた。テレビはいつも僕が好きなのを見ることができてた。祖父母に撫でられた回数も僕の方が数倍多い。名前を呼ばれた回数だつて数十倍多い。僕の方が千円くらい小遣いが多かつた」

ここで望は二口目の紅茶を飲み、

「僕が主張すれば、兄さんのことを度外視してまで、全部が全部僕の希望のままになった。そんなことはいくらでもあつたさ。数え切れないほどあつた。そして その度に、兄さんは悲しそうな目をしてた。悔しそうな目をしてた。切なそうな眼差しで僕の方を見てた。兄さんが僕に好感を持っていないのは確かだろう、真実だろう、現実だろう でも、でもだ」

望はカップをテーブルに戻した。そして前かがみになり、語気を

強めて、

「あれは、僕が小学校五年生の時。兄さんと一緒に下校してる途中に、僕らは野良犬に襲われたんだ。別にその犬をいじめたわけでもないのに、いきなり吠えわめいて僕らの方へ走ってきた。恐らく狂犬病だったんだろう。もちろん、僕と兄さんは一目散に走って逃げた。けど、当然ながら犬の方が走るのが早い。僕はあつという間に追いつかれた。野良犬が目の前に迫って、僕が噛まれるのを覚悟したその時、思わず眼をつぶって、腕で顔を庇ったその時

兄さんが僕の目の前に立って、庇ってくれたんだ。

僕の盾になってくれたんだ。僕の代わりに噛まれてくれたんだ。体を張って僕を守ってくれたんだ。僕は、その時の兄さん

の背中を忘れない。噛まれて血まみれになった右腕を忘れない。僕の方を振り返り、『大丈夫か?』と聞いてきた兄さんの微笑を忘れない。忘れやしない。忘れられない」

望は物語りを締めるように、息のような声で説明を終えた。

その説明を聞き終えたジェックは、「ふむ」と頷き、

「……いや、確かにその話は美しいけどさ、でもそれは、単に君の兄貴も『ここでノゾムを守らなきゃ後で怒られる』っていう打算で守っただけなんじゃないのか? 計算だったんじゃないか? そんな、兄弟愛とか関係なくてさ」

「まあ、その可能性もあるね」

望はふっと息を吐いて、

「でも、それは関係ないんだ。そこが問題じゃないんだ。僕が嬉しかったのは、『僕を見捨てて逃げる』っていう選択肢があったにも関わらず、それでも兄さんが僕のことを守ってくれたことだ。『僕を守る』という選択をしてくれたことだ。……大人達は、確かに僕を大事にしてくれるけど、それは僕を大事にすればそれだけの

結果が見込めるっていう確信があるからだ。失うものも特になく、僕に優しくした方が得だからそうしてるだけだ。迷うことなく、悩むことなく、選択したわけじゃなく、選んだわけじゃなく、元から見えてる道を辿ってるだけだ。そんなの、感謝はしても嬉しくはない。ありがたくても、喜ばない。幸せを感じたりしない。僕が本当に嬉しいのは

二つの選択肢の中で、僕を選んでくれたこと。

悩んで迷って、それでも僕を選んでくれたこと。

僕を守る選択をしてくれたこと。

この十六年の中で、僕にそんなことをしてくれたのは　　そういう風に僕のことを選んでくれた人は　　兄さん、ただ一人だ」
「なるほどね」

ジェックは納得したように頷き、帽子の上から頭をかいて、
「何となくしか分からないけど　　何となく分かったよ。つまり君は、兄貴がこの世で一番大切だと、そういうわけだ」

「ああ、そうだ。……正直僕にとって、兄さんは恋人よりも大切かもしれない。兄さんが『来い』と言うならすぐに兄さんの側に行くし、『行け』と言われたらどこへでも行く。兄さんと一緒ならどこでも生きていける。兄さんを守るためならこの身を投げ出すし、兄さんが死ねといえは喜んで死ぬ。　　極論を言えば、兄さんがそういう趣味なら、兄さんを愛することもいとわないさ」

「……ハア？　何だそりゃ？」

ジェックは気味悪がるように、思い切り苦い顔をする。

「おいおい。そこまでいくと異常じゃないか？　犬から守ってもらっただけなのに、命懸けなんて。……何だ？　これもブラコンの一種なのか？　男のブラコンなんて聞いたことない。お前と知り合って八年経つが、今さらお前のことが分からなくなってきたよ……」
「はは。そうか？　僕は小学生の頃からずっとこう思ってたんだけ

どな」

「……そうか、そうなのか。じゃあこれは、別れの前にお前の本質を知ることができて運がよかったってことになるのか？ それとも悪かったのか？」

「……………別れ？」

思いがけない単語に、望はきよんとした。ずり落ちた眼鏡のブリッジを中指で押し上げながら、

「何だよ、それ？ 聞いてないぞ。数ヶ月ぶりに会ったっていうのに、いきなり『別れ』なんて？」

「ああ 実は俺、日本にいくんだ」

「日本に？」

裏返る望の声。目を丸くして、

「……………いつから？」

「明日出発する。だからさ、合格祝いも兼ねてお前に一目会っておこうと思ったわけだ。しばらく会えなくなるからな」

「はー、そうなのか。……………というか、日本に何しにいくんだ？」

「ん？ ちょっとな」

口元を歪めたジェックは、怪しいほどに、妖しいほどに、不気味なほどに悪戯に笑って、帽子のツバを深くしながら、

「 仕返し」

第一話「電話」

都市部から少し離れた住宅街。その中でも頭一つ出た比較的新しめのマンションに、一人の女子高生が帰宅してきた。

服装は、紺色のブレザーにスカートという一般的な高校の制服。右手にはこげ茶色のカバン、左手にはスーパールのレジ袋をぶら下げている。女性としてはいくらか長身・細身で、いわゆるモデル体系肩まで伸びた長髪はブロンズ色。瞳の色も青。その辺りが日本人とかけ離れた部分であるが、それらを除けば、いわゆる普通の女子高生である。

時刻は夕方七時。

帰宅部の高校生としてはいくぶん遅めの帰宅時間であるが、彼女は別に今まで遊び呆けていたわけではない。毎日これくらいの時間に自宅にたどり着いている。これは別段不思議でも何でもなく、高校から彼女の家までは片道四十分かかるし、加えて帰り際に夕飯の買い物も済ませてきたのだった。

カバンを小脇に抱えながら、ポケットから鍵を取り出したこの女子高生　東^{あずま}リーネ　は、そのマンションの五階の一室の扉を開けた。

部屋の中は真っ暗。これも当然のことで、リーネはここで一人暮らしをしていた。彼女は去年までイギリスに住んでいたのだが、仕事の都合で、彼女だけ日本にやってきたのである。父親はいまだにイギリス在住である。

リーネは玄関で靴を脱ぎながら、廊下の電気を点けた。

2 L D E Kの内装が照らし出される。玄関から伸びる板張りの廊下と、その両脇にあるキッチン・バストイレ。そして奥に二つのフロアリングの部屋。一人暮らしにしては広めの部屋だが、もちろん彼女が家賃を払っているわけもない。娘を溺愛する父親が、必要以上にいい物件を選んだのである。この部屋に移り住んできた当初、

リーネは部屋が広すぎて侘しい気分になったものだが、最近はいぶ慣れてきた。そのうち、この部屋に友人　亜紀雄とスズランあたり　でも呼んで、パーティか何かを開こうと考えている。

リーネはカバンと買い物袋をリビングに置くと、首のリボンを緩めながら洗面所へ向かった。そして手洗いうがいを一通り済ませる。口をタオルで拭いながら、リビングに戻る間に、廊下にある電話機のボタンを押した。

ピーという電子音に続いて、留守番電話の伝言が再生がされる。

『今日の、午前、八時、十五分です　お早う、リーネ。よく眠れたかな？　今朝の目覚めはどうだった？　この時間じゃ、もう学校かな？　今日も一日元氣に行こう！』

機械的な女性オペレータの音声の後、四十代後半くらいの男性の声が聞こえてくる。リーネの父親である。彼は日本に十年ほど住んでいたことがあるので、その日本語はだいぶ流暢だった。

『今日の、午前、九時、五十七分です　やあ、リーネ。調子はどうだい？　パパは、今日はロンドンまで出張だ。三日間も滞在することになってるんだよ。大変だけど、リーネのため、今日もお仕事頑張るからね！』

『今日の、午前、十時、三十三分です　今、まだ移動中だよ。駅からかけてるんだ。途中、窓から牧場が見えてね。いやー、たまにはこういう旅行もいいもんだね。心が洗われるというか。今度帰ってきたら、一緒に　って、あああああ！　電車が出る！　ちよつと、待ってくれーっ！　……じゃ、じゃあ、リーネ、また後で……！』

『今日の、午前、十二時、二十分です　いやーははは、さつきは危なかったよ。何とか無事に間に合った。他のお客さんに怒られちゃったけど。これから途中下車して、昼食をとるところだ。リーネは、今日もお弁当かな？　パパも、またリーネの手料理が食べたいな』

『今日の、午後、一時、十一分です

いやあ、駅前の中華料

理店に入ってみたんだけどね、思いの外おいしかったよ。特に炒飯が絶品だった。今度、ぜひ一緒に来よう。リーネもきつと気に入るよ」

こんな独り言が、延々と再生されていく。

しかしリーネは、買い物袋からにんじん、たまねぎなどを取り出しながら、

「……まったくパパったら、相変わらずなんだから」

と苦笑いするだけだった。父親の声で留守電が埋め尽くされるのは毎日のことなので、いい加減慣れているのである。いちいち全部聞き取ることもなく、BGM代わりにして、リーネはキッチンで夕飯の支度を始めた。

『今日の、午後、二時、四十九分です

パパはまだ移動中だ

よ。そろそろつく頃なんだけどね。寝過ごしたらまずいし、寝ないように頑張ってるよ。そっちは六時間目かな？ 今日最後の授業だね。頑張ってる！』

『今日の、三時、七分です

ふう、ようやく着いたよ。パパ

も、ロンドンは久しぶりだ。何か欲しいものあるかい？ 買ってたあげるよ』

『今日の、四時、二十分です

』

相変わらず伝言の再生は続いている。

リーネはふふふんと鼻歌を歌いながら、今日の夕食のメニュー

ハンバーグ の、たまねぎのみじん切りを終えた。そしてフライパンを火にかけたところで

『……ども、レフトです』

突然、電話から聞こえてくる声が変わった。今までの声とは明らかに違う まだ若い 男の声だった。

リーネはぴくつと顔を上げ、フライパンにかけていた手を止める。そして廊下の方へと視線を向けた。

リーネが電話機を凝視する中、その声は淡々と続き、
『……えっと、折り返し電話ください。番号は、まあ、いつものところに。……では』

それだけで、そのメッセージは終わった。その後は、

『今日の、五時、二十五分です やあ、リーネ、もう家に帰ってるかな？ パパはようやくホテルに 』

と、父親の独り言が再開する。

しかしリーネはそれに耳を貸すことなく、慌てて電話機に駆け寄って一時停止ボタンを押した。そして受話器を持ち上ると、無心でピッピツと電話番号を入力する。

プルルッ、プルルッ、プルルッ

受話器を耳に当てたまま、直立するリーネ。呼び出し音が三回鳴り終えたところで

『 はい？ 』

男の声が聞こえてきた。先刻、留守番電話で『レフト』と名乗った男の声である。

リーネは自分の名前を名乗ろうとして ふと、自身の腕が少し震えているのに気付いた。これは緊張？ 興奮？ …………… いや、恐らく両方だろう。もしくは『期待』かもしれない。リーネは自分でそう納得し、そして気持ちを落ち着けるように一つふつと息を吐いて、口を開いた。

「…………… もしもし。さっき電話を頂いた、東ですが」

『ああ、はいはい。お電話待ってました。…………… っと、その前に、一応本人確認のために、合言葉、お願いします』

「…………… クイーンズ・シティ 』」

『はいはい、確認しました。じゃあじゃあ、早速本題にいきましょうか』

電話越しに聞こえてくる男の声は、どこまでも軽かった。世間話

でもするような、あるいはやる気のない保険の勧誘のような、まったく深刻さがない声音である。

しかしリーネは、汗ばんだ手で受話器を握り締めながら、

「……わかつたんですか？」

『はいはい、一応わかりましたよ。あなた様の 探し人 』

男の声は、何ともなさそうに答えた。

『どうやら、 そいつ 最近になってまた日本に来たみたいですね。正確には、え〜と……………先月の二十日からです。住んでる場所は××県です。××県の 町にいるみたいですな。そこで目撃例が二つほど見つかりました』

「…………… 町」

リーネは確認するように繰り返した。××県の 町
リーネが住んでいるところから、そこまで遠くはない。隣県である。電車で一時間もかからないだろう。

「……………そこに そいつ が？」

『ええ、そうみたいです。目撃された時間が 月曜の午後四時頃と、日曜の午前十一時です。まあ、これだけじゃ そいつ の活動時間は計りかねますが でも、とりあえず場所が分かってれば、網の張りようもあるでしょう。……………この先も私が調べてもいいですが、一応、依頼は『潜伏場所の調査』だけでしたからね。この段階で、私の業務内容は果たしたことはありませんが』

「…………… そいつ は、一人でした？」

『一人……………というと？』

「そいつは、他に誰かと連れ立っていませんでしたか？」

『ああ、ああ。仲間ですか？ えっと 目撃例では、一応一人で行動していたみたいです。……………が、それだけじゃ、そいつに仲間がいるかいないかはわかりませんね。時間さえかければ、私でも調べられるかもしれませんが。ただ 前も言った通り、私はまだ駆け出しの探偵でしてね。経験もほとんどないし、情報源もそれほど多くないんですよ。詳しく調べたいのでしたら、もっと大

きい会社とかに 』

「……それはできないんですよ」

リーネは口元をゆがめながら、首を横に振った。もちろんその動作は電話の向こうの『レフト』には見えるはずもなく、これはただの彼女の癖である。

「そいつは、ちょっと いや、かなり 一筋縄ではいかないので。大勢で調べて、もしその気配を察知されると、すべてがオジャンになってしまうんです。それは最悪の事態。私が そいつに殺されるより、もっと最悪の事態です。それは避けなければなりません。だから、身軽なあなたに頼んだわけでして」

『なるほど。そういうことでしたか……』

受話器の向こうで頷いているのが分かるくらい、得心がいったような声で男は答える。

『……ただ、まあ、それでも、私には少々荷が重い依頼でしたがね。ここまで調べるのでさえも一苦労でした。』十五年前の 船殺
人事件、十三年前の ホテル殺人事件、十二年前の 邸

殺人事件。この三つの事件すべてに関わった人物の洗い出し』なんて。……正直、ハードルが高すぎますよ。これら全部迷宮入りしてる事件なんですから。しかも場所はバラバラ。今回 彼 を見つけることができたのは、運とタイミングがよかっただけです。こういうのは、そうそううまくいくもんじゃないんですよ？』

「……わかってます。私も六年間追いかけてきて、今回ようやく尻尾をつかめたわけですから」

『……おやまあ、そんなに根気強く追ってたんですか？ 何か私怨がありそうですが いや、聞きませんよ。聞きません、聞きません。正直聞きたいですけど、聞きません。』内情に踏み込みすぎない』。これが、探偵業を長続きさせる鉄則ですからね。……じやあ、とりあえず、今回の依頼はこれで完遂ということで、よろしいですか？』

「はい、ありがとうございました。報酬は

前金と同じ口座

に振り込んでおきます」

『はいはい、よろしく』

つと、あ、そうそう。言い忘れると

ころでした。大事なこと』

「……大事なこと？」

『ええ、大事も大事、一番大事なことです。あなたの 探し人の
そいつ、十年前とは名前を変えてるんです。偽名ではないようです
し、公的に届け出たわけでもないようですが。一体どうやって変え
たのか その辺は、あなたの方が詳しいんでしょうか？ ま
あ、とにかく、そいつは現在名前が変わっていてですねえ、えっと、
今は』

『如月ジェック』と名乗ってるみたいですよ？』

第二話「決心」

小林雑音こばやしやうおんは、公園のベンチに腰掛けていた。

辺りの風景は完全なる春。子供が薄着で走り回り、ベンチの脇の花壇には白、赤、水色の花々が咲き誇っている。風も柔らかく、時折、耳の下まで伸びた雑音の黒髪を流していた。

「……はあ、やれやれ」

雑音は背もたれに体重を預けながら、肩を落として深く嘆息した。リラックスするように　　というよりは、むしろ疲労を吐き出すような仕草である。四月中旬の休日の昼下がりとしては何とも不釣合いな仕草だが、しかししょうがない。実際問題、雑音は疲れているのである。

その原因の一つは、二週間前から環境がガラリと変わったこと

四月となり、雑音は高校二年へと進級したのである。それに伴い、級友や担任教師、各教科の先生などが様変わりしたのだった。高校進学をした昨年に比べれば小さな変化だが、それでも気疲れはする。

新しい担任教師のクラス運営方針に慣れなければならない。クラスの新顔との交流にも気を使わなければならない。そして新しく始まった教科にも追いつかなければならない。真面目でもなく、社交的でもなく、勤勉でもない雑音にとって、これらは神経をすり減らすに十分な要因になっていた。

いくら雑音の所属クラブが現在活動休止状態になっているとはいえ、元々 私生活 が忙しい雑音のこと。のんびりできる時間がそれほど取れていない。おかげで、このところの雑音は一向に体力を回復できないでいた。

そして、雑音が疲れているもう一つの原因

その 本人

が、たった今、雑音の視線の先、向かいのケーキ屋から出てきた。黒いストレートヘアに少々私の強さを感じさせる大きな黒目、黒

いタートルネックのセーターと赤いロングスカートを身に纏った、
雑音と同じ年くらいの女の子
雑音の同級生、東香々美である。
あずまかがみ

香々美は右手に握った紙箱を揺らしながら、嬉しそうに雑音の方へ歩いてきた。そして雑音の目の前にたどり着くと、右手の紙箱を見せびらかすように持ち上げて、

「えっへっへ。ケーキ、たくさん買ったあ」

「……全部一人で食べるのか？ 太るぞ？」

「大丈夫よ。来週スポーツテストもあるし、そこで燃焼されるって」
香々美は一人で納得するように、うんうん頷きながら言ってくる。
雑音は昨年のスポーツテストの内容を振り返ったが、どちらかというと、待ち時間の方が長かった記憶がある。彼女の理論に雑音はまったく納得できなかったが、これ以上つかかるともバカらしくなって言うのを辞めた。無駄なエネルギーは使いたくない。
前述の通り、雑音は今、疲れているのである。

雑音はよっこらせと腰を浮かせながら、

「……まあ、いい。じゃあ、買うものも買ったし、そろそろ帰るか？」

「ちよつと待つて。少し休ませてよ」

言いながら、香々美は雑音の隣に座った。ケーキの入った箱を大事そうに膝の上に載せる。

「いやー、やっぱ、さすがに三十分立ちっぱなしは疲れたよ」

「……言っとくけど、僕は二時間立ちっぱなしだったんだぞ」

雑音は再度ベンチに座り直しながら、香々美にジト目を向けた。その視線には怨恨の念が込められている。雑音がここまで恨めしい表情になるのも無理のないことで、彼を二時間立ちっぱなしにしたのは、この東香々美その人なのである。

先刻香々美が出てきたケーキ屋では、毎週土曜日の午前十一時から十二時にかけて、タイムサービスを行っている。その内容は、その時間帯のみすべてのケーキが半額という、大多数のケーキ愛好者

にとって夢のようなもの。このサービスによって本ケーキ屋は毎週土曜日には大盛況になっていた。朝七時から列ができるくらいなのである。

それに香々美が颯爽と参戦してきたのだった。

雑音を従えて。

二人がここにたどり着いたのは朝の九時。彼らの居住地からここまで電車で一時間かかるので、二人とも平日と変わらない時間に起きることを余儀なくされた。

そして最初の二時間は、雑音が列に並んだ。

すでに十数人並んでいたが、それくらいなら余裕である。ケーキがソールドアウトする前にカウンターにたどり着く可能性は極めて高い。予定通りにことが進行し、香々美は喜び勇んで雑音に列に並ばせたのである。

その間、香々美はこのベンチに座って待っていた。

時折雑音がちゃんと並んでいるかちらちら確認しながら、携帯ゲーム機で遊んでいたのである。雑音が手持ち無沙汰のまま足をしびれさせている間、香々美はピコピコと遊びに興じていた。

そして十一時になってようやく、買い物をする本人が代わったのである。

タイムサービスが始まって、前に並んでいる十数人の買い物客を待たなければならず、それに三十分程度かかった

が、それ

でも雑音が耐えた二時間には及ぶべくもない。香々美は最低限の労力で、最大限の戦利品を手に入れたのであった。

もちろん、こんな不条理な役回りに雑音が納得しているわけもない。

しかし、人質をとられている以上、雑音に拒む自由はなかった。

その人質とは 数学の宿題。

雑音のクラスの数学の担当教師が、四月から宿題をやたら出す先生に代わったのである。ただでさえいつも赤点すれすれの雑音にとって、これは死活問題だった。ともすれば追試地獄に陥ってしまう

かもしれない。そんなことになれば 私生活 にも影響が及んでしまう。必然的に、雑音は知り合いの中で最も成績のいい香々美に（彼女は、定期テストの総合順位でトップテン入りの常連である）頼る機会が増えていったのである。

そしてそんな彼女に、

「手伝ってくれなきゃ、金輪際数学の宿題手伝ってあげない」

と言われれば、雑音は二つ返事でOKを出さざるを得ない。かようにして、本日、雑音はここまで引っ張ってこられたのである。本人の意思とは無関係に。

そんなわけで、雑音は疲れていた。

いや、こんな展開が今日だけならば、ここまでではなかったはずだ。十代の若人が休日の公園で溜め息をつくほどではない。しかし香々美は、この『数学の宿題』を人質に、最近はやりたい放題だったのである。すなわち、雑音が週末につき合わされるのはこれで三週間連続だった。

昨年度も時折つき合わされていたが、このところ余計に悪化している。雑音が無抵抗で付き従っているので、香々美が調子に乗っている。という部分も確かにあるだろうが、しかし雑音は、別の理由に薄々と感じていた。

香々美が週末、雑音を頻繁に連れ出すようになったのは、例の事件 があってから。

去年の夏休みにあった 事件

そこで、香々美は友達を

一人失くした。いや、「失くした」という表現は正しくないかもしれない。これから会える可能性はまだまだある。永遠の別離ではない。「会えなくなった」と言う方が正確だろう。

その友達の名は、ナガツキ。

香々美が呼び出した式神である。

両親と別々に暮らしている香々美にとって、この友人の存在は大

きかったはずだ。一人ぼっちで過ごしていた一軒家に、他者の声が響くようになった。温もりが加わってきた。暗かった屋内に光が差し込んできた。雑音は香々美とナガツキが連れ立っているところを何度も見たことがあったが、『家族のように』という表現がこの上なくしつくりくるほど、お互いがお互いに愛しみあっていた。お互いがお互いにとって大切な存在であることが見て取れた。

しかし去年、あの事件 が起こった。

そして、香々美とナガツキは離れ離れになった。

式神は、一度精霊界に戻されようと、また呼び出せば再び人間界に降り立てる。永遠に会えなくなるわけではない。存在が消え去らない限り、何度でも会える。だが、特定の精霊を呼び出すということは、それほど簡単ではないようである。

香々美はその 事件 以来、何度も精霊降ろしを行っているそうだが、一度も成功していないようだ。時々、香々美自身が嘆いている。何度も何度も繰り返しているが、まだナガツキは帰ってこない。うまくいかない。何が悪いのか。どうしたらいいのか。

その間、香々美はまた一人ぼっちである。

だからだろう。二人が所属するクラブ『幽霊研究会』が活動休止になっている現在、香々美は週末一人で過ごすことになる。それが寂しいから、無理矢理雑音を連れ出しているのだろう。雑音は、何となく、そんなことを感じ取っていた。

雑音にとって、香々美と一緒に時間を過ごすことは嫌なことではない。嫌いなことではない。むしろ。しかしそれは、根本的な問題解決にはなっていないだろう。香々美のためになっていない。何とかならないか……。

雑音は、香々美の横、ベンチに座りながらそんな思考を巡らせていた。

と、

トスン

不意に、雑音の左肩に重みが加わってきた。視線を左下に向けられ

ば、香々美の黒髪が視界に入る。香々美が、雑音の肩に寄り添ってきたのである。

この仕草だけを見れば、雑音と香々美はデート中の男女のように見えるだろう。公園で遊びまわっている子供達にも、そんな風に見えるに違いない。

しかし雑音には、香々美とそんな関係になつた覚えはない。それが嬉しいか嬉しくないかという話は置いておくとして、香々美に恋愛感情を打ち明けた記憶はない。雑音と香々美は、現時点では、あくまでクラスメイトである。ただの友人である。

それなのに、香々美が寄り添ってきた。

これは、香々美が雑音に気を許しているということにもなるだろうが、それ以上に　　香々美が寂しがっている、というサインに見えてならない。ただのクラスメイトでしかない自分に寄り添ってくるほど、香々美は孤独感に苛まれているということなのだろう。雑音はそう理解した。そして、

「……しょうがない」

青空を見上げながら、何かを決心したように、雑音は小さく呟いた。

第三話「メモ」

リーネは自宅で、鼻歌を歌いながら夕飯の支度をしている。

私服の上に白いエプロンといういでたち。ブロンドのロングヘアは、邪魔にならないように後ろで束ねられている。そのテイルを揺らしながら、リーネは皿を抱えてキッチンとリビングを行ったり来たりしていた。

リビングのテーブルの上には、すでに出来上がった料理がいくつか置かれている。

チキンソテーにポタージュスープに海草サラダ。それぞれ大皿に大盛りになっている。見るからに、とても一人では食べきれないような量。一人暮らしのリーネの食卓には、通常並ぶべくもない品数である。実際、リーネがこれだけの夕飯を作ったのは、日本に来てからは初めてだった。

そう　リーネは今日初めて、この家にゲストを呼んだのである。

そのメンバーは、さやかわあきお鞘河亜紀雄と鞘河スズラン。リーネの同級生であり、クラスメイトであり、そして現在は『友人』ということになっている。リーネとこの二人の間にあった数ヶ月前のアレコレは、今のところ、再燃はしていない。強いて言うなら、リーネとスズランが亜紀雄をめぐって、周囲にとって迷惑でしかない騒動を日々引き起こしているくらいである。その騒動も、亜紀雄が先生に怒られたり周囲の男子に袋叩きにされたり黒コゲになったりするくらいで、それ以上の陰悪なものではない。常識からは（そこまで）外れていない、いわゆる鞘当のようなものだ。

そしてこのディナーへの招待も、この鞘当の延長線上でしかないわけだが。

リーネが亜紀雄を無理矢理夕飯に誘い、スズランも敵情視察という形でそれを了承したのだった。亜紀雄にとってはまったくもって

気乗りのしない提案だったが、双方の板ばさみにあって、仕方なく来ることに同意した。同意しようがしまいが、結局のところは自分が何かしら迷惑を被る運命なんだ　　という、半ばヤケのような決定だったことは言うまでもない。『歩くマイナス極』というあだ名で呼ばれていた時分ですら、亜紀雄はここまで自暴自棄になった覚えはなかった。

ともかくもそんな流れで、亜紀雄とスズランが今日の七時にリーネの家に来ることになっており、その時間に合わせてリーネはせつせと夕飯を作っていたのである。

ようやくリーネが最後の品目　ペペロンチーノ　をリビングへ運んだ時には、七時を五分ほど過ぎていた。料理もすべて完成したし、部屋の掃除も完璧。リーネが部屋をぐるりと見回し、獲物と天敵を迎える準備が万全であることを確認したところで、

ピン、ポーン

インターフォンが鳴った。

「ハイハイ」

リーネは慌てて持っていた皿をテーブルに置き、廊下へとスリッパをばたばた鳴らしながら向かう。廊下の壁に備え付けられているインターフォンの液晶画面を覗くと、そこに映っていたのは小麦色の散切り頭の女の子と、その背後でおどしている男子だった。この男子がリーネのクラスメイトの鞘河亜紀雄、そして女の子の方が亜紀雄の式神スズランである。

リーネは、画面に映った亜紀雄の顔を見止めると、

「あはっ」

と破顔して、いそいそと玄関に駆け寄った。いても立ってもいられないようにチェーンを外し、錠を開け、がちゃりとドアを開く。そして満面の笑みで、

「ようこそ！　アキオ！　いらっしやいま　」

「お招きにあずかり光栄ですわ、リーネさん」

突然、リーネの視界から亜紀雄が消えた。代わりに、目の前には

高校の制服をまとった、やたら色白の女子が立ち塞がっている

スズランが、リーネと亜紀雄の間にずいっと割って入ってきたのである。その顔には冷笑が浮かんでいた。

スズランは自分の小麦色の髪をさらりと撫でながら、鼻で笑うかのようにつんと息を吐いて、

「電車で三十分もかけて、わざわざ伺わせて頂きましたよ、リーネさん。何でも、自慢のお料理をご馳走して下さるということで」

「ええ、ええ、もちろんですよ、スズランさん。腕によりをかけて作らせてもらいました。もしかしたら、アキオは今夜、家に帰らなかったらなくなっちゃうかもですよ」

「それはそれは……楽しみですよ」

真つ直ぐ向かい合い、リーネとスズランが談笑を始める

が、その目はまったく笑っていないかった。隙あらば襲い掛かろうとする獣のような、やたら鋭く輝く瞳を互いに向け合っている。

そのやり取りに、思わず肩をぞくりと震わせた亜紀雄は、

「……ちよ、せ、折角招いてくれたんだからさ、スズラン、今日は穩便に、穩便に……」

「ええ、ええ、分かっております、分かっておりますよ、亜紀雄様。今日は夕食を食べにただですからね。さつ。さつさと頂いて、さつさと帰りましょう。……できれば、帰ってから口直しが必要なければよいのですが」

「ウフフフフ。おもしろいことをおっしゃいますねえ、スズランさん。本当、おもしろいジョークです。……まあ二人とも、立ち話もなんですから、どうぞどうぞ、中へ」

リーネは腕を広げ、来客二人を屋内へ誘導する。そして下駄箱からスリッパを二人分取り出しながら、

「……そうですね、ワタシも危惧してますよ。明日以降、アキオが家の食事を食べる気にならなくなるんじゃないかって、ね」

「おほほほほ。……それはそれは、楽しみですよ」

差し出されたスリッパに履き替えながら、スズランはオホオホと

いう、この上なくわざとらしい笑い声を上げる。

その隣でスリッパを履き替えていた亜紀雄は、再度ぐるりと体を震わせた。

このままでは、想定以上に危険な空気になる。

廊下を歩きながらそう直感した亜紀雄は、何とか話題を無難なものに変えようと、やたら声を張り上げ、

「……で、でもさ、初めて来たけど、リーネさんの家って、すごく広いよネ？ 想像以上だよ。一人暮らしなんでシヨ？ こんな広いと、すぐくのびのびとできそうダよね」

「ウフフフ。ええ。パパが広い部屋を選んでくれたんです。ここは二人までなら入居可なんです。どうです？ アキオ、今夜、ここに泊まります？ ……あ、でも、ベッドが一つしかないんですよ。あと布団と枕も。だから、寝るときは、必然的にワタシと同じ」
「いけませんよ」

威嚇するような声で、スズランが二人の会話に割って入る。

「いけません、亜紀雄様。いきなり泊まるだなんて、リーネさんに迷惑です。……それに、この女は、前に亜紀雄様を屋上から落とそうとした人間ですからね。いつ寝首をかけられるか分かったものではありません。油断は禁物ですよ」

「……うふふ。そもそも、ワタシがそんなことをすることになった原因はスズランさんだったんですけどね。ワタシの敵はスズランさんだけです。スズランさんさえいなければ、ワタシとアキオはもっとフレンドリーでラヴリーな関係になっていたはずなのに。……ですから、まあ、今回のお食事は、そのお詫びと仲直りのきっかけということ」

「……ふん、罠である可能性も否認ませんがね。食事に毒が入ってなければいいのですが」

「うふふふ。毒だなんて、おもしろいと言いますね、スズランさん。……確かに、毒はあるかもしれませぬ。アキオの心をイチコロにするような毒、なんてね」

「……つまらないことを。自分ではうまいことでも言ったおつもりなのでしょうか。この調子では、料理の方もつまらない味しかなさそうな」

亜紀雄の苦勞虚しく、三人がリビングにたどり着く頃には、話題は元のところへ収束していった。

結局亜紀雄はこれ以上の軌道修正を諦め、なおも続くスズランとリーネの不穏な会話に適当に相槌を打ちながら、針のむしろの心境でテーブルについた。ここまで二人が臨戦態勢に入っては、もはや亜紀雄にはなす術はない。この場合、下手に加熱させることなくやり過ごす戦法に出た方が賢い選択である。亜紀雄は経験的にそう見極めた。そして気味が悪いほど楽しそうなリーネと、こちらも歪に楽しそうなスズランの間に挟まれたまま、リーネの食事を食べ始める。

このディナーは、四十分間続いた。

リーネの手料理は確かにおいしかったが、いかんせんさっきのよな会話が食事の間中続いていたため、亜紀雄は味を楽しむどころではなかった。ほとんど印象に残っていない。口を動かすより頭を働かせる方が大変だったというのが正直なところである。リーネに言うべき感想も思いつかない。それゆえ、食後の挨拶もただどしいものになり、

「ご、ごちそうサマ……」

と、亜紀雄は二人の機嫌を伺うように発音をした。

しかしリーネはずいっとテーブルに乗り出してきて、自信満々な笑みを亜紀雄に向け、

「うふふ、お粗末さまです、アキオ。どうでした、ワタシの料理？」

「どうって、いや、あの、その、本当、おいしかった」

「……ふん、これではまだまだ甘いです」

亜紀雄が言い終わる前に、スズランが口をナプキンで拭いながら答える。

折角の亜紀雄の感想をせき止められ、リーネは気分を害されたよ

うにキツとスズランを睨みつける
が、スズランはそれにひるむことなく、すまし顔で、

「ふん。確かに、平凡な家庭料理としては合格点かもしれませんが、まだ甘いです。この料理を毎日亜紀雄様に食べていただこうなどは、おこがましいにも程がある。まだまだ、あなたは亜紀雄様のことを理解してませぬ。例えば、このパスタ。一応程よく茹で上がってはいるようですが、亜紀雄様の好みはもう少し柔らかいものです。そうですね……あと十分ぐらい長く茹でる必要があったでしょう。それに、このサラダのドレッシングも及第点未満です。亜紀雄様はもつとサッパリしたものが好みです。これでは油分が多すぎでしょう。他にも」

「……ちょ、ちょっと待ってください、スズランさん」
リーネがスズランの口上に割って入ってきた。

「何をダメ出ししてくるのかと思えば、どれもこれも細かいことばかりではないですか。言いがかりもいいところです。毎日アキオの感想を聞けるならともかく、ほとんど学校でしか会えないワタシに、そんな微妙なところまで分かるわけがないじゃないですか」

「いーえ、それは理由になり得ません」
スズランは勝ち誇ったような顔で、首を大きく横に振る。

「そんなのは、言い訳にもなりませんよ。現時点では、私の方が亜紀雄様の給仕として優れているという、立派な証拠ですからね。あなたでは不相应です。やはり、亜紀雄様のお側にお仕えするのは私でなければ」

「……………いや、待ってください。逆に言えば、ワタシの料理は、その細かいところ以外は完璧だったということではないんですか？
些細な機微さえ直せば、ワタシの方がスズランさんよりも、もつとアキオ好みのお料理を作れるということではないですか？
最終的には、ワタシの方が適しているということではないですか？
そう、そうですよ！ ウッフッフッフ。アキオ！ やっぱりアナタはワタシと暮らすべきなのです！
ワタシと寝食を共にするべきな

のです。その方が、アナタの人生はより豊かになる！ さあ、アキオ、今日からはもう、この家から学校に通えば」

「ええ？ きよ、今日から？ い、いや、それはさすがに」

「な、何を言いますか！ そう簡単に他人が踏襲できるものではありませんよ！ この半年、私と亜紀雄様が毎日毎日、一つ屋根の下で育んできた愛というのは」

「ちよ、スズラン！ 誤解されるような表現はやめ」

「別に、ワタシは過去にこだわる女ではありません。そんな器量の小さい女ではないです。むしろ、男は経験豊かな方が」

「な、リーネさんも何を言い出すん」

「いえいえ。男女の間に一番必要なのは相性！ そして相互理解！ これです！ 私と亜紀雄様のように、時間をかけて、お互いの心と体を隅々まで理解して」

「だから、スズラン、変な表現はやめ」

「しかし、世の中にはマンネリとか倦怠とかいう言葉もあって」

「二人とも、いい加減にし」

「お互いに思いやってさえいれば、そんなものは乗り越えられるのです！ ようは工夫ですよ！ 工夫！ 例えば、場所を変えるとか、服装を」

「……………すいません、僕、トイレ行ってきます」

わめき合うリーネとスズランの脇、二人の抑止を潔く諦めた亜紀雄は、そろりと椅子から立ち上がって、廊下へコソコソと出て行った。そして逃げ込むように廊下脇のトイレに入る。

ドアを閉め、あの禍々しい空間と分断されて、亜紀雄は少しばかり安息したが、トイレで用を足している最中も、ドアの向こうからは二人の言い合いが聞こえてくる。それを否応なく耳に入れながら、

「……………まったく、何でこんなことになったのか」

と、亜紀雄は溜め息をついた。

ことの発端は、リーネの入学当初に、亜紀雄が何やら彼女に気に

入られたことである。リーネは、転校初日から亜紀雄にやけに構ってきた。そしてその二週間後には、本人から直接「気に入っている」と聞かされたのである。が、一体自分のどこをリーネが気に入ったのか、亜紀雄にはまったく見当がついていない。内面も外面もまったくパツとしないこんなネガティブな男、自分をして一緒に過ごすのは願い下げだというのに。一緒にいると人生がつまらなくなる。暗くなる。こんな人間、自分ならワーストに入れるだろう。しかも、リーネは学校でも稀有なほどの才色兼備だった（日本語の授業に難なくついてきているし、日本語の発音も一ヶ月で完璧にマスターしてしまった）。彼女に言い寄ってくる男子は数知れず。選択肢はいくらでもあるだろうに、なぜその中から自分が選ばれたのか。リーネをして評価されるポイントなど、我ながら一つも見当たらない。

実際のところ、リーネがやたら自分に構ってくるのは、天敵たるスズランを身近に置いておくための口実なのでは。と、亜紀雄は考えている。思い返してみれば、今回のディナーへの招待もやたら急なものだった。昨日の昼休みに、いきなり誘われたのである。まるで今夜来なかったら今後一生そんな機会はないとでもいうような、やけに必死な誘いだった。冷静に考えると、あの時のリーネはどこか不自然だったかもしれない。何かしらの事情があったのかもしれない。どんな事情なのかまでは分からないが、もしかしたらリーネの 仕事 の都合によるものではないだろうか？　そう考えると、府に落ちる気がする。

「……まあ、推測で考えてもしょうがない、か」
考えを切り替えるようにふるふると首を横に振り、亜紀雄は用を足し終えた。そして水を流し、手を洗い、トイレのドアを開ける。リビングからは、まだリーネとスズランの言い合いが聞こえてきている。

もう一度あの場に戻るのは気が進まないが、だからといって帰るギリギリまでトイレに籠るわけにはいかないだろう。亜紀雄は大き

く息を吐き、死刑囚もこんな心境なのだろうかと思いながら、廊下へ一步踏み出した　　ところで、

「ん？」

廊下の脇に置かれている電話機　　その横に置かれている、

殴り書きがなされたメモ書きが目に入った。そこには見覚えのない地名と、人名と思われる六文字が書かれている。

「……如月……ジェック？」

亜紀雄はそのメモ書きを手に取りながら、ぼそりと口に出して読んでみた　　が、別段誰の顔も浮かんでこない。少なくともクラスにはこんな人間はいないし、同学年でも見覚えはない。この名前からして明らかにハーフかクォーターだろう。そんな人間が同じ学校にいれば、その噂が一度くらい耳に入っただろう。……しかし、聞き覚えがあるような気がする。どこで聞いたのかはまったく思い出せないが。

「リーネさんはイギリスから来たんだし、共通の知り合いのはずもないだろうなあ。……多分、僕の昔の知り合いで、似通った名前の人がいたってところかな？」

亜紀雄はそんな風に結論付け、それ以上の詮索はしないことにした。そして

紙が破れそうなほどの筆圧で記されたそのメモ書きを元の位置に戻し、何事もなかったかのように、リビングへと戻っていった。

第四話「高架線の下」

如月ジェックは、高架線の下を歩いていた。

深夜二時を過ぎており、周囲は暗闇。終電も終わっているため通る電車もまったくない。辺りは完全な静寂である。二十分前に発情した猫の唸り声が遠くから響いてきたが、それきり、どんな音も聞こえない。線路脇の民家も静まり返ったままである。

ジェックはそんな中を一人で歩いていた。

月明かりのおかげで、かろうじて周りの風景が見えるが、フェンスで囲われた中に雑草で覆われた地面とコンクリートの柱があるという、何の趣もない風景である。おおよそ一般の人間が近づく意義のない場所。街灯すら一つも見当たらない。ジェックの普段着 赤いベースボールキャップに黒いパーカー も、影に入れば完全に闇にまぎれてしまう。そんな中を、ジェックは無表情で歩いていた。

ふと、背後から、サクサクという別の足音が聞こえてきた。

ジェックが振り返ると、彼の後方に一人の男が立っている。ボサボサの茶髪に、耳と鼻に通してあるシルバーのピアス。ダボダボの皮製上着を着ており、ズボンは太ももまでずれ下がっている。月に黄色く照らされたその顔は、眉毛がまったくなく、口はだらしなく半開き。瞳孔が開ききっているんじゃないかと思うほど、目が大きく開かれていた。

「おう、てめー……ここで何してやあんだあ？」

その男は、ジェックのことを真っ直ぐに睨みつけながら、ドスの利いた声で話しかけてきた。

あからさまな不良の外見の男。おまけに、その表情はとも思考が正常である人間のものには見えない ジェックは、この付近で覚せい剤の売買が行われているという噂が流れていることを思い出した。恐らく、この男も中毒者の一人なんだろう。自分の 縄

張り　に不審な人間が侵入してきたため、威嚇してきたのだ。

ジェックはそう理解し、何とか穏便にコトを済ませようと愛想笑いを浮かべながら、

「いや、俺はちよつと散歩してるだけで、別に何をするつもりで来たわけでも」

ボコッ

突然そんな乾いた音が聞こえてきて、それと同時に、不良男の身体が下方へ　沈んだ。

「うお！　と、な、なんだあ？」

男は上体のバランスを崩しながら、慌てた声を上げる。そして自分の足元に視線を動かし　自分の足が、くるぶしの部分まで土に埋まっていることに気がついた。

「な、なんだこりゃあああ！」

男は奇声を発した。そして足を地面から掘り出そうと、じたばたと体を揺り動かす　しかし、その動作に相反して、

ボコッ、ボコッ、ボコッ、ボコッ

男の足元の土だけが砕かれ、まるで流砂に足をとられたかのように、さらに男の体が地面に飲み込まれていく。すね、膝、太もも、腰

ボコッ、ボコッ、ボコッ、ボコッ

腹、胸、手、腕

ボコッ、ボコッ、ボコッ、ボコッ

肩、首、あご、口

「ふあ、ふあふへへへへへへへ！」

ジェックが冷めた目で見下ろす中、土の下から男の悲鳴が響いてくる。しかし

ボコッ、ボコッ、ボコッ、ボコッ

鼻、目、額、そして頭

男の体は、完全に地面に埋もれてしまった。

ジェックの視界から不良男が完全に消え去り、元の静寂に戻ったところで、

サツ、サツ

コンクリート柱の影から、人影が縫いだしてきた。月明かりに照らされ、ようやくその風体が見えてくる。紺のジャケットを着こなした、短髪で細身長身の男である。

ジェックはその男を見ると、はあと嘆息して、

「……まったく、余計なことしやがって。俺が穩便に済まそうと思つたのに」

「いや、一応、顔を見られてましたからな」

長身の男は薄く笑いながら答えた。

「呼び出していただいた主の安全を守るため、考えうる最善の策を弄する。これが式神の仕事ですからな。不安因子は可能な限りすべて取り除かせていただきます」

「……はいはい。感謝しとくよ、マークリッド」

帽子のつばをわずかに持ち上げながら、ジェックは諦めたように言う。

長身の男 ジェックの式神、マークリッドは、不良男が埋まっている地面を見下ろしながら、

「ところで、どうします、主？ この男、埋めたはいいですが、ここに置いておくのもまずいでしょう。何のきっかけでこいつと我々が結びついてしまうか分かったもんじゃありませんからな。別の場所に移動させた方がいいでしょうが どこまで動かしますか？ 土の中ならば、この『土の精霊』マークリッド、どこへでも持っていくですよ。……何なら、ブラジルまで移動させましょうか？」

「やめてくれ」

ジェックはぶんぶんと首を横に振った。

「変に事件を複雑にすると、警察の捜査が難航しちまう。外国になんて持ってつたらなおさらだろ。警察つてのは国民の血税で成り立ってんだから。そんなことに経費がかさんで、消費税が上がったり

なんかしたら元も子もないっての。移動させるのは数キロでいい。地上にできるだけ近いところにして、早く見つかるようにしておいてくれ」

「了解」

マークリッドは神妙に頷くと、不良男が埋まっている地面の上に手をかざした。

モコッ、モコッ

地表の土は動かない。しかし、その奥から何かが動いているような、くぐもった音が聞こえてくる。地中の不良男の体が土の中を移動しているのだろう。そしてその音は段々小さくなり、一分後には何も聞こえなくなった。

なおも真面目な顔で手をかざしていたマークリッドは、三分程度たった頃合で、ようやく、

「……ふう。移動終わりました」

「サンキュー」

ジェックは帽子のツバを深くしながら答える。そして何事もなかったかのように、再び先へと歩を進め始めた。

その後について歩き出したマークリッドが、周囲をキョロキョロと見回しながら、

「……しかし、主。ここが そう なのですか？」

「ああ、そうさ」

ジェックは歩調を弱めないままこくりと頷き、

「ここが、十四年前、『藁人形』が暴れた場所の一つだよ」

静かに言う。ジェックは何ともなさそうに答えたが 『藁人形』このフレーズの発音だけは、他と比べて明らかに重々しいものだった。その差異から、この如月ジェックが『藁人形』に対してどんな感情を抱いているのか、マークリッドにも容易に感じることができる。理解することができる。

すなわち、怨恨。

マークリードは数ヶ月前にジェックに呼び出されたばかりの式神であり、ジェックと『藁人形』の直接の接点は知らない。具体的なことは聞かされていない。ただ、

「『藁人形』に仕返しをしたい」

ジェックにそう言われ、その目的のために助力しているだけである。

マークリードは、今まで人間界に来たことがほとんどなかった。今回ジェックに呼び出されたのが四回目である。なので、マークリードは人間界について詳しくはない。『藁人形』という殺し屋についても最近まで知らなかった。そして現在ですら『殺し屋をターゲットにする殺し屋であること』、及び『十年ちよつとの間なりを潜めていたが、最近また動き出したこと』 彼が『藁人形』について知っている情報はこれだけである。

ただ、マークリードも、ジェックの『藁人形』に対する感情だけはよく知っている。

ジェックに詳しく聞かされている。

ジェックは、『藁人形』について語る際、まず彼を褒める。それまで何十人の人間を打ち負かしてきた自分を凌駕したこと。その手腕。その能力。それらすべてに賛辞を送る。素直に褒める。

その後 ジェックは悔しさを吐露するのである。

信じられない現実。勝てたはずの勝負で負けたこと。凌がれたこと。そして『藁人形』が 決め手 を放つ際に自分に見せた、完全なる勝ち誇った表情。

それらすべてを思い出し、記憶の表層に浮かべて ジェックは悔しがる。

実際のところマークリードは、ジェックがどのようにして『藁人形』に負けたのか、まったく想像がついていなかった。これまでに何度かジェックが他者を葬る現場を見たことがあったが、そのプロセスは洗練されていた。ジェックが他人に負ける要素などあるよう

には思えなかった。

一体、『藁人形』とはどれほどの力量の者なのだろうか。
一体、『藁人形』はどのような能力を持っているのか。

そんな疑問を抱きながら、しかしそれを口に出すことなく、マークリードは無言でジェックの後についていく。

と、

「……ここか」

呟きながら、ジェックが立ち止まった。そして右脇のコンクリート柱に歩み寄っていく。

マークリードは、そのジェックが近づいていったコンクリート柱を凝視し、暗闇で視認しにくいが、その一角に細い傷跡があるのに気付いた。その部分だけ、刃物で切り裂かれたように鋭く欠けている。

「……それは何です、主？」

「『藁人形』の戦いの痕跡さ」

マークリードの疑問に、ジェックは傷跡を撫でながら答えた。

「十四年前、『藁人形』がここで戦闘を行ったらしい。これはそのときにできた傷跡さ。……高架線が改築されてたらどうしようかと思っただが、運良く残ってたな」

薄い笑いを浮かべながら、独り言のように言うジェック。

マークリードはその柱へ寄っていき、まじまじとその傷を観察した。

が、至近距離で見ても、それは至極頼りない痕跡だった。言われてみれば確かに刃物で裂いたような真っ直ぐな傷に見えるが、その表面はボロボロである。ところどころ欠けていて、おまけにコケまで生えている。「子供が金属バットで叩いて壊した痕だ」と言われれば、それはそれで信じてしまいそうなものだった。

マークリードは首をかしげながら、

「見つかったのはいいですが……。主、これをどうするんですか？
ここから何か分かるのですか？」

「あははは。確かに、このままじゃ何も分からねえが」

ジェックは口の端を持ち上げて笑った。そしてコンクリート柱に手をかざし、

「どれ、現場を見てみるか」

第五話「形見」

東リーネが東本家の生業　すなわち、人間に害を及ぼす精霊の排除　を引き継いだのは、今から三年前のことである。

リーネには八つ程歳の離れた兄があり、その兄が当時すでに職務を引き継いでいたため、リーネは必ずしも東本家の仕事を継ぐ必要はなかった。実際に、リーネが精霊使いになると言い出した時には、彼女の兄も父親も真っ向から反対してきた。リーネ自身ですら、いくらか迷いがあつたのが本当のところである。

命の危険が伴う危険な任務。

かといって、何か得るものがあるわけでもない。

ただ　しきたり　に準じて受け継がれている生業。

義務がない以上、リーネには精霊使いとなるメリットはまったくない。東本家が精霊使いを生業としてから今までの約八百年、長兄長姉以外の者がわざわざ仕事を引き継いだ例はほとんどなかった。あつたとしても、後継者が短命であつた場合など、仕方のない理由があるケースのみだつたのである。

だがそれでも、リーネは進んで生業を引き継いだ。

周囲の反対を押し切つて、リーネは精霊使いとなつた。

この行動に際して、リーネの中には二種類の感情が働いていた

一つは、この職務に殉じた母親への尊敬の念。そしてもう一つが、母親を殺した者への復讐心　両方とも、母親に関する心情である。

リーネの母親は、十四年前に亡くなっている。

仕事の最中に、敵によつて死に到つた　　すなわち、殉職だつた。

リーネの母親の遺体は、日本の東北地方のとある海底洞窟の中で見つかった。一週間以上音信普通になり、それを不審に思った兄が探し回つて、三日後にそこで見つけたのである。母は、両手で握つた短刀を自分の喉に突き刺した状態で発見された。

この様を見ただけでは、さも自殺したような状況だが（実際、社会的名目上では自殺として処理されたが）、母親がそんな人間ではないことは、周囲の誰にも分かりきったことだった。一体どんな状況だったのか知る術はなかったが、この母の自害は敵によって仕組まれたことは間違いない。母親は、他者によって殺されたのである。母親は死の直前、服の袖をちぎり、そこに血文字でもって息子・娘への遺言を残していた。十行に及ぶ長いような短いような文面だったが、その中でリーネの心に残っているものが（当時リーネは二歳であり、文字を読めるはずもなく、後年になってその文面を読んだ際の感想であることは当然であるが）二つほどある。

私が死ぬことを悲しんではいけません。私が死ぬことで救われる命があるのですから。誇りこそすれ、悔やむべきものではありません。

東本家の者として、死を恐れてはいけません。我々は世界に無二の生業を継ぐものなのですから。誇りこそすれ、忌み嫌うべきものではありません。

特に後者は、東本家の生業を引き継ぐことになる兄への言葉であったのだろうが　　リーネは我が事として正面から受け止めた。或いは、この言葉を我が事として受け止めたがため生業を引き継いだという側面も、もしかしたらリーネの無意識の中にあつたのかもしれない。

そしてこの言葉があつたからこそ、リーネは生業を受け継ぐ際の恐怖はまったく感じる事がなかった。イギリスにおける精霊使いの仕事においても幾度か命の危険に陥ることもあつたが、リーネは怖気づくことなく、勇敢にすべてを乗り越えてきた。

母の精神を立派に受け継いだ精霊使いになる。

そして、母の仇討ちをする。

これが、精霊使いとなつたリーネの目標であり目的だった。実際のところ、リーネは生業を引き継ぐ三年前からすでに仇探しを開始していた。が、当時のそれはいわゆる情報収集であり、そこまで深

く探れるものではなかった。

正式な精霊使いとなり、身を削る搜索を始めて
そして今
回ようやく、リーネはその仇の尻尾を掴んだのだった。母を殺した
仇の名前、そして居住地。

「……必ず、絶対に」

リーネは小さく
しかし力強く呟いた。一瞬叫びたい衝動
に駆られたが、何とか思いとどまった。変に大声を上げるわけには
いかない。一応ここから見える範囲に他人はいないが、声が届く範
囲にはまだ数人生徒がいるだろう。

ここはまだ学校
放課後の教室だ。

リーネは見つめていた短刀から顔を上げ、それを静かにポケット
へとしのばせた。もしこんなものが先生に見つかったら、色々と面
倒なことになるだろう。いくら 母親の形見 とはいえ、それが言
い訳になるとも思えない。先生が納得してくれるとは考えにくい。
私生活を守るためには、こんなもの、学校に持って来るべきではな
いのだろうが。

しかし、今日は例外。

今日は、学校から直接 そこ へ行くつもりだ。

リーネは頬を膨らませ、気を入れるようにふつと息を吐いた。そ
して椅子から立ち上がり、机の上のかばんを手取る。その表情は
強張っていて、さながら戦地へ赴く兵士のようなものだが

実際、今のリーネはまさにそのような状況なのである。こんな顔つ
きになるのも当然と言えば当然だろう。

リーネは静かに歩を進め、教室から出ようとドアに手をかけた。
視界に入ったその手が少し震えている。リーネは今まで十数件、
精霊使いの仕事を行ってきたが、一度たりともこんな風にナーバス
になることはなかった。任務失敗への恐怖はない。ならば、緊張な
どするはずはないが。

やはり、今日は例外なのだ。

これから向かう先に母の仇がいる。自分が母親とほとんど時間を

共有できなかった原因。母親の記憶をまったく言っていないほど手にできなかったその元凶。今から数十分後、自分はそいつと相対することになる。そう思うだけで、心が高ぶってくる。

「……いけない、いけない」

リーネは首をふるふると振った。これから会う相手が重要だからこそ、精神を乱すわけにはいかない。平常心でいなければならぬ。いつも通り、万全の状態を迎え撃たなければ。

リーネはもう一度ふつと息を吐いた。そしてガラガラと横に開け、

「……あつ！」

リーネは驚き、一步後方へ跳んだ。ドアの向こうに人影があった。見覚えのある男子生徒。クラスメイトの小林雑音だった。

「……小林……さん」

「あ、ごめん。驚かすつもりはなかったんだけど」

雑音はリーネに苦笑を向けてくる。

他者が見れば、ただのタイミングの悪い鉢合わせに見えるこの状況。しかしリーネが驚いたのは、ドアの向こうに人が立っていたことではない。リーネはそんなことでは驚かない。精霊使いになる際、兄から少なからず手ほどきを受けているのである。少なくとも一般人の存在を（ドア越しとはいえ）数十センチの範囲で見落とすはずはない。

リーネが驚いたのは、気配がまったく感じられなかったことだ。ドアの向こうに立っていたのが小林雑音だと確認し、むしろリーネは納得した。小林雑音ならば、それくらいのことをやってのけても不思議ではない。数ヶ月前、リーネは雑音の立ち回りを間接的に見ている。その力量もある程度分かっている。危険視するべきだと理解している。気配を殺す術を身につけていても不思議ではない存在だ。

ここは学校であり、こんなところで騒ぎを起こせば、いくら雑音でもリカバリーはきかないだろう。今この瞬間、雑音がリーネに刃を向けてくる可能性は低い。しかしそれでも、彼のリーチに

は極力入りたくないというのが、リーネにとって正直なところだ。スズランと同等、あるいはそれ以上に畏怖すべき存在。数ヶ月前の敗因も、突き詰めれば彼が関わってきたことだったのだ。

リーネはポケットの短刀に意識を向けながら、しかし何とかにこやかな表情を取り繕って、

「……ご、ごめんなさい。驚かせてしまつて。……あの、ワタシ帰るんで、ちよつとどいてもらつていいですか？」

「ああ、邪魔しちゃつてごめん　ただ、リーネさん、ちよつと話があるんだけど」

「……話？」

「ああ。話　というか、頼みごとなんだけど。今、時間大丈夫かな？」

雑音はあくまで笑顔のまま、リーネに尋ねてくる。

その思いがけない展開に、リーネは戸惑いを隠せなかった

小林さんからの頼みごと？　ワタシに？　普通の男子なら、こんな展開の場合、告白か何かの可能性が多いけれど……。さすがにこの人ではそれは考えにくいような。……まさか、数ヶ月前のことに関係すること？　もしかしたら、彼の本性に関すること？　あるいは、東本家に関すること？　精霊に関すること？

リーネの中にいくつもの疑問が駆け巡る。そしてどう答えるべきか迷つてしまう　が、すぐに結論が出て、

「……あの、すいません。ワタシちよつと急いでるんで、また今度でもいいですか？」

「あ、うん。こっちはそんな急ぎじゃないから。じゃあ、また時間あるときに」

雑音はあっさり答えて、ドアから一步後ろへ退いた。

リーネは軽く会釈して雑音の前を通り、そそくさとドアをくぐる。そして急ぎ足で廊下を歩いていった。

小林さんからワタシへの頼みごととは、一体何でしょう？　気になる疑問ができてしまったが、しかし今のリーネには他の事

に悩んでいる余裕はない。そんな場合ではない。これから戦なのだ。リーネは廊下の角を曲がり、雑音の姿が見えなくなったところで一旦立ち止まった。そして雑念を振り払うように首を振る。視界と脳が揺れて、少しばかり気持ち悪くなる。しかしその浮遊感が今はちょうどいい。リーネは何か気分をニュートラルに戻し、もう一度足を踏み出した

が、

「やあ、こんにちは」

出鼻を挫くように、また別な声がかかってきた。

声の方へ首を向けると、廊下の窓辺に寄りかかっている男子がいた。色白で茶髪のセミロングの髪。日本と欧米系が混じったような小顔で鼻が高い、いわゆる男前のルックスの生徒だった。

「……いや。こんばんは、と言った方がよかったかな？　もう西の空は赤らんでるしね」

高級デパートの店員のような、この上ない微笑で話しかてくる男子生徒　　リーネは、彼に少しばかり見覚えがあった。入学当初、同級生の女子に「近づかないように」と釘を刺された生徒だ。やたらと女の子に手を出してくる女だったらし。なんでも、同時に違う場所で十人以上の女性とデートを行った、という噂まであるらしい。

名前は、えっと……ふじさわりょうすけ藤沢亮介先輩。

確か、今年度の三年生のはずだ。『ESP部』とかいう、変わった部活の部長を務めていると聞いたことがある。その部活の活動内容はまったく分からないが。同じクラスの花塚さんもそこに入っていたはず。彼女の方はそこまで変わった人ではないので、彼女が属しているということは、名前はともかくとして、活動はそこまで常軌を逸脱しているということでもないのだろうか？　まあ、入る気はまったく起きないけれど。

リーネは、なおもスマイルを継続している藤沢の方をまじまじと眺めながら、

「……あの、ワタシに何かご用でしょうか？」

「いや、用というほどではないんだけれどね」

言いながら、藤沢は耳の上をポリポリとかく。

「ただ、君、最近悩んでることはないかな、と思ってね」

「……は？」

反射的に、リーネの口からトーンの強い声が漏れる　　また

しても……いや、先刻の雑音のものよりもさらに輪をかけて突拍子のない質問だ。初対面でいきなり悩みを打ち明けるよう言うてるなんて、そんな声のかけ方は一般常識からだいぶん外れているだろう。リーネは、もしかしたらこれが藤沢のナンパの常套手段なのかと思いつながら、

「……いえ、特にありませんけど」

「そうかい？　じゃあ、鳥になりたいと思ったことは？」

「ありません」

「飛行機は？」

「まったくありません」

「君は不注意なところがあるかい？」

「いえ……そんなにないと、思いますけど」

矢継ぎ早に質問してくる藤沢に、リーネは呆気にとられながら答える　　質問の意図がまったくもって見えてこない。ナンパで

もなさそうだし、部活の勧誘でもないようだ。そもそも、質問に一貫性が見えない。何の目的があって自分に声をかけてきたのか、リーネには見当もつかなかった。

「君の家って、学校から遠いのかい？」

「えと……まあ、そこそこ」

「心霊スポットを巡る趣味とかあったりするかい？」

「いえ……したことありません」

「付き合ってる人はいるかい？」

「いえ、いませんけど……一応、心に決めた人がいます」

「じゃあ、友達はちゃんと選んでる？」

「友達？　えと、あの……」

いよいよ理解が追いつかなくなるリーネ。はあ、と嘆息しながら、
「……すいません、ワタシ急いでるんで、後にしていただいていい
ですか？」

「……そうか。わかったよ。じゃあ、どうぞ行ってくれ」

残念そうな表情をしながら、藤沢はエスコートするように腕を水平に持ち上げた。

「引き止めて悪かったね。帰り道には気をつけるんだよ？」

そんなことを言いながら再度笑いかけてくる藤沢に、リーネは作り笑いを返しながらその場を離れた。

藤沢先輩は、何がしたかったんでしょう？

さらに不可解な疑問がリーネの中に浮かんでくる。

今日は重要な日だというのに、またも不測の事態が起こってしまった。教室から昇降口へ向かうのも一苦勞である。

しかしリーネはようやく下駄箱に到着した。そして白いシューズから外履きに履き替える。

建物から出ると、空の色は少しかり暗くなってきていた。西の空にはすでに星が見えている。あと三十分もすれば夕闇になってしまっただろう。

まだ野球部が練習をしているグラウンドの横、玄関口から校門へと続くコンクリート道をリーネは歩いているが、他に歩いている生徒は見当たらない。六時間目の授業が終わった後、物思いにふけている内にだいぶ時間が経ってしまった。ほとんどの生徒はすでに帰ったのだろう。

リーネは自然に早足になってしまふのを感じながら、しかし周囲にそれを気取られないよう無表情で歩いていく。そして校門を出てくるりと右に曲がったところで
目の前に白髪、白装束、長身の男。

リーネの式神、ユネアである。

「主、意思伝達でもお伝えしましたが…… 奴の居場所が分かりました」

「ええ」

低い声で静かに言ってくるユネアに、リーネはこくりと一つ頷いた。そしてそのまま前へと歩を進め、

「さあ、今宵、向かいましょう」

戦場^{いくさば}へ」

第六話「能力」

如月ジェックとマークリードは、廃ビルの屋上に佇んでいた。

このビルはここ数年掃除も修繕もなされていなかったようで、コンクリートの上には砂がだいぶ溜まっており、壁は灰色から褐色に変色していた。地震が起きればいの一番に倒れてしまいそうな、完全に老朽化した建造物。もはや解体工事を待つばかりという状態の物件なのだろう。

そんなビルの上に立ち、マークリードはフェンス際を下を見下ろしている。

時刻は完全に夜。前通りをライトを点けた車がごうごうと行き交っている。周囲のビルもすでにネオンを点灯させていて、いくらか眩しい。しかしこのビルには光源が皆無のため、そのネオンの明かりが視界を確保する頼みの綱になっていた。

マークリードはしばし夜景を眺めていた が、結局三十秒足らずで飽きて、くるりと後方を振り返った。そして出入り口の壁と睨めっこをしているジェックに、

「……主。ここもそうなのですか？」

「そ。『藁人形』が暴れた場所、パート2だ」

アゴに手をやったままジェックは答える その視線の先には、やはり傷跡。高架線の下のコンクリート柱にもあったような、いくらか真っ直ぐで、十年以上の時を経ているだろう欠如部分だった。

「……どれ、ここも見てみるかな」

そう言っジェックは、壁の傷跡に右手をかざした

その瞬間だった。

微かに聞こえる風を切る音。

マークリードはぴくりと反応し、高く跳び上がった。

次の瞬間、マークリードが立っていた位置に影が降り注ぐ。

ガッ、ガッ、ガッ、ガッ

破片を散らしながらコンクリートの床に突き刺さる五本の刀

否、氷の刃。

「……何奴！」

屋上出入り口の上にすたと着地しながら、マークリードが叫んだ。

それと同時に、さっきまでマークリードが相対していたフェンスの向こうから　つまり、階下から　飛び上がってくる人影。空中で一回転し、そのままマークリードの頭上に落ちてくる。落ちながら、その影は身をよじる。

がつんっ

その人影が振り下ろした氷の刃と、マークリードが脇から抜いたサーベルがぶつかり合った。

人影の動きが刹那止まり、ネオンの光に照らされて、その外見がマークリードの瞳に映る　それは白髪に白装束の男。肌の色すら凍死した人間のように白い。闇に浮かび上がって見えるほどの純白。その青白い瞳孔をまっすぐマークリードに向けている。

刃の向こうにその姿を視認したマークリードは、

「……貴様、何者だ？」

「氷の精霊、名はユネア。今より、貴様のお命頂戴……………致す」
ふんっという唸り声と共に、ユネアは氷の刃を大きく払った。

マークリードはその勢いを利用して後方に跳び、フェンスの上に着地。ユネアと五、六メートルほど距離をとって、再びサーベルを下段に構えなおす。

ユネアはマークリードを睨みつけたまま左手を天にかざした。その手の上方数メートルに薄い霧が現れたかと思うと、無音で、野球バット程度の大きさの氷の刃が九つ、精製される。

「……いざ」

ユネアの声に呼応し、氷の刃が急発進する。残像のせいで刃が伸びたようにすら見える初速。マークリードがぎりぎり目で追えるか追えないかのスピード。マークリードがその軌道を認識した頃には、九つの刃はすでにその眼前に達していた。

しかしマークリードはその場から動かず、

「なんの！」

手の平を前に突き出す。それに合わせて屋上の床に積もっていた砂が動き出し、舞い上がり、密集する。そしてマークリードの周囲をマントのように覆った。

ガツン、ガツン、ガツン、ガツン、ガツン、ガツン、ガツン、ガツン

灰色の壁にぶつかると同時に氷の刃が碎ける。砂の防御壁が完全に氷刃の攻撃を遮った。しかし、刃がぶつかったところからはマークリードの姿が垣間見える。

貫通こそしないが、壁を破壊する。

すなわち、強度は同等。

ならば、数の勝負。

九つ目の刃が、三つ目の刃の軌道をなぞる。

壁は無し。

碎けない。

すなわち、防御壁を通過。

「……ぐっ」

マークリードは反射的に体を右に傾けた。ザシュッ……。マークリードのジャケットの右腕が破かれ、赤い飛沫が上がる。

体勢を崩しかけたマークリードは飛び上がり、隣のビルのフェンスに飛び移った。一瞬ぐらりとバランスを失い、右手でフェンス上部を握り支える。眼下を走る車のライトでマークリードの姿が煌く。刹那の間、ジャケットの赤い汚れといくらか焦燥したその表情が光を浴びた。

「決め……る」

そう唇を動かすと同時に、ユネアは再び両手を上にかざす。

頭上、氷刀、十八本。

「……ちっ」

舌打ちしながら、マークリードは半身になった。そしてユネアから視線を外さないまま、後方へと跳び上がる。

ひゅん、ひゅん、ひゅん

氷刀が空中を飛翔し、マークリードを追う。

マークリードは首、腕をひねりながらかわし、さらに奥へとフェンスを飛び移っていく。

「逃が……さん」

ユネアはさらに氷刀を飛ばしながら、自身もマークリードの後を追って跳んでいく。

フェンスを蹴る音と刃が風を切る音は遠ざかっていき、ほどなくしてビルを飛び移っていく二人の姿も闇に消えた。

「……やれやれ、敵か」

二人の背中を無表情で見送っていたジェックは、独りで小さく呟いた。そしてふと 両目の眼球だけを右に動かした。

その先から、またも影が飛び上がってくる。さながらライオンのたてがみのような、風で乱れるブロンドの長髪。ネオンに照らされたその服装は高校の制服だった。

「覚悟！」

その影 東リーネは、叫びと同時に短刀を突き刺す。

垂直に立てられたまま、右脇腹へと真っ直ぐ向かってくる刃。ジェックはその刃の柄を横から拳で叩いた。その衝撃で刃の軌道は変わり、右脇腹の横を素通りする。

リーネの体はジェックのリーチの中。おまけに刃が外れて無防備しかし前への勢いは殺されておらず、リーネの体はさらに前へと進む。

それにタイミングを合わせ、ジェックは左ひざを持ち上げた。相手の突進を利用した、鳩尾への膝蹴り。

リーネは反射的に短刀から左手を離し、肘でその攻撃をガードする。しかし、

「くっ……」

急所へのダメージを軽減させるだけで精一杯。勢いは殺しきれず、後方へと飛ばされる。

それでもリーネはなんとかバランスを保つのに成功し、数メートル飛ばされた位置に片膝をついた状態で着地。そしてネオンに照らされたジャックの姿を初めて瞳に映し、その仇の成立ちを網膜に焼き付けようとした、ところで

「え？」

リーネは驚きの声を上げた。

別段、ジェックは奇抜な外見はしていない。顔の筋肉をほとんど使っていないような平坦な顔立ち。緑のキャップとそこからはみだした茶髪。そしてフード付きの赤いパーカーと膝が擦れた青いジーンズ。街を歩けば十分で二、三人すれ違いそうな、いたって普通の外見である。

リーネが驚いたのは　その若さ。

身長はリーネよりも五センチくらい低い。そして顔にもまだ幼さが残っている。リーネと同じ年かそれよりも下。中学生くらいに見えた目だった。

どういうこと？

リーネは混乱する。母親が殺されたのは十四年前。当時リーネは二歳で、目の前のこの少年は一歳かゼロ歳くらいだろう。そんな赤ん坊が人を殺せるのか？　人を死に追いやることができるのか？　そもそも、そんな意思を持つことができるのか？　そんなわけ……もしかしたら、彼は自分が追っていた仇ではないのでは？

情報が間違っていたのでは？　あの探偵見習いが嘘の情報を掴まされたのでは？

いやしかし、彼が式神使いであることは確実。東家の者以外で式神を操る者など　まあ、彼や彼は例外として　滅多に

いない。だから、彼が無関係とはどうしても考えられないが。

……まあ、いい。

どちらにしろ、この少年を食い止めなければならないことには変わらない。それが東本家の者としての責務。それに、式神の力で外見を変える事だって不可能ではないだろう。彼がそういう手段でもって敵から逃れてきたという可能性もある。

リーネは迷いを振り切り、再度ジェックを見据えて、

「東本家が長姉、東リーネ。神の理の名の下に、あなたの能力を排除します」

啖呵を切り、そして前へと駆け出す。

『東本家』 この単語を聞いた瞬間、ジェックの顔が歪んだ。瞳には軽視のような侮蔑のような色が浮かび、頬にシワが寄る。

だがリーネはその表情を注視することなくコンクリートを蹴り続け、ジェックの五歩面前に達した時に、大きく前へと跳んだ。そして右手に握った短刀を、左肩の上から振り下ろそうとする。

それに対しジェックは、棒立ちのまま、ただ手の平を前へ突き出した。

白羽取り。

ジェックは素手でこの剣撃を止めようとしている リーネはそう見てとった。

それはすなわちリーネの攻撃をすでに見切っているということに他ならないだろうが、しかしリーネは短刀の軌跡を止めようとも変えようともしない。それはそれで好都合だから。

この短刀には術が施されている。

この刃に触れた者は、たとえその傷がどんなに浅くても、その行動の自由をすべて奪われる。手を動かすことも足を動かすことも首を動かすことも式神を呼び出すことすら封じられる。この刃に触れれば、その瞬間に勝負は決まる。こちらの勝ちが決定する。

だから、ジェックが白羽取りという戦法に出てきたことを見止めたリーネは、勝利を確信した。

動きを封じた上で捕まえる。

本家へ連れて行く。

そして、そこで母親について問いただす。

そんな段取りを練りながら、リーネは刃がジェックの手に触れる瞬間を凝視していた。スローモーションのように近接していく二者、近づく勝利の瞬間。しかし

ぴたり

実際にはそんな音は聞こえなかったが、聞こえてきたと錯覚しそうなほど、リーネの意思とは無関係に 短刀の動きが止まる。

え？ 何これ？ 何で？

リーネは内心でそう叫んだように思った。が、実際には叫んでいない。叫べない。その行動すら止められている。

と、

短刀及びリーネの体が再び動き出した。しかし、それは 逆方向。ジェックから遠ざかるように、ゆっくりと後方へ進んで行く。

宙に浮いたまま、落下しないまままで進み続ける。

まるで 逆再生

これは……

リーネが思考を始めようとした瞬間、

ドンッ

腹部に衝撃。そして鈍い痛み。

リーネの体は宙を舞い、後方へ跳ばされた。跳ばされながら、それがジェックによる膝蹴り攻撃だったことにリーネは思い至ったが、空中でどうすることもできずに ザシャンッ 背中からフェンスに直撃。

「……うう」

背中をさすり、そこでようやく自身で行動ができるようになって
いることに気付いた。そしてもう一度思考する。

今の現象 停止、逆再生。これはもしか

しかしこの思考はまたも遮られる。

じやりっ、じやりっ

砂とコンクリートを靴底で擦りながら、ゆっくりとこちらに近づ
いてくるジェック。まるで散歩でもするかのような足取りで、リー
ネの前方一メートルまで進み到った。

「……このっ！」

リーネは両膝左手を地面についた体勢のまま、短刀でジェックに
斬りかかる。しかし

びたり

またも、刃がジェックの膝に触れるすんでのところでそのモーシ
ョンは止められた。あと数ミリ。しかしまるでチタンの壁に遮られ
ているかのように、それ以上動かない。動けない。

ジェックはその様を鼻で笑いながら見下ろした後、リーネの首元
を掴み、ぐいっとなぐり上げてた。

「……はは。感謝しておいて欲しいもんだ。わざわざ痕が残りにく
い腹への攻撃だけにやってたんだからな。いくらなんでも、死に
化粧くらいは綺麗にしてほしいもんだろ？ 俺って、そういうところ
で気が利く男なわけさ」

首を持ち上げられることでリーネの視界に入ったジェックの表情
は、歪んだ微笑だった。どこかが、何かが不自然。染みのできたキ
ヤンバスに白いペンキを塗りたくって背景を作ったような、無理矢
理で強硬な笑い。リーネをして気持ち悪い、と思わしめる顔。

「……しかし、やれやれ。 またしても 東本家の者とは。 まった
く、しつこいもんだ。 諦めが悪いと、社会じゃ損することの方が多
いよ？ ……って、こんな なり で説教しても説得力薄いかな？

「はは」

ジェックの軽口を耳にしながらリーネは体を動かそうと四肢に力を入れる。しかし、動かない。完全な停止。思考と視界が途切れていないだけで、完全な停止。この能力は、やはり

『時間制御』

リーネは思い至る。彼はリーネの周囲の時間を止めた。そして逆回転させた。だからリーネの体は停止し、さらにジェックから遠ざかるように動いた。なんて、なんて厄介な能力。やりづらい能力。対応しがたい能力。

いや、違う。

違う、違う。

驚くべきはそこではなくて

「……はは。まあ、いい。あんたのことはしっかりと俺が送ってやるよ。十何年前にも送ってった奴がいるから、きっと寂しくはないさ。血族同士、あの世でも仲良くやるこった
んじゃ、あばよ」

そう言っただけジェックはボールを放るように、ふわりと、リーネの体をフェンスの向こうに放り投げた。

ビル風に煽られながら、しかし真下へと動き出すリーネの体。

ようやく体が自由になるが、しかしもうどうしようもない。

体の自由があっても、もはや思考と視認以外に、現在のリーネが行って意義のある行動はない。

段々遠ざかっていくビルの屋上とジェックの姿を見つめながら、リーネは

「あ、あなたも、式神……？」

しかしそんな呟きは風に吞まれ、

リーネの体は闇に飲まれていった。

第七話「キャッチ」

「えっほ、えっほ、えっほ、えっほ……」

藤沢亮介は自転車を走らせていた。立ちこぎで、大通り脇の歩道を全速力で駆け抜けていく。会社員の帰宅時間であるため人通りは多く、進行方向を確保するのに少しばかり難儀しながら、それでも何とかスピードを落とさずに車輪を回していた。

コンビニの角を曲がり、裏路地に入る。

ビルとビルの間に入り、急にネオンの光が届かなくなった。街灯もないため、自転車のライトに照らされている場所以外は真っ暗である。しかし人通りはなくなり、進路をとりやすくなった。藤沢はさらに自転車を加速させながら、

「しかし やれやれ、まったく」

愚痴るように呟いた。

「まさか、こんなことでデートをフイにすることになるとは、ついてないっいたらありはしないな。折角とりつけた米橋さんとの約束だったのに。……まあ、この行動自体は、運命を捻じ曲げてでも女性を不幸にしたいという俺の信条に沿ったものではあるけれど、ね。だから後悔はないさ。……それに正直なところ、最近女の子とのデートというものに少しばかり飽きてきているのも事実だ。喫茶店、カラオケ、ボーリング、ビリヤード、ダーツ、シヨッピング、遊園地、映画。高校生の娯楽っていうのは選択の幅が小さすぎる。定番っていうのが出来上がっていて、それ以上のものがない。一緒に行く相手を変えたところで、限界って言うものがあるしなあ。そろそろ新しい何かが欲しいところだ。うーん………そうだ！ 今度は女の子以外のひととのデートっていうのはどうだろうか？ 例えば坂巻君とのデートとか？ 二人で遊園地とかね。それはそれで新たな楽しみがあるのかもしれない。新たな喜びがあるのかもしれない。問題は、彼が俺の愛を受け取ってくれるかどうかだけれど」

そんなことをぶつぶつ言いながら、藤沢は自転車をこぎ続ける。タイヤが比較的大きい石を挟み、車体が揺れて前のかごに入っている毛布が落ちそうになった。藤沢は

「……おっと」

慌ててそれをもう一度かごに押し込んで、再び自転車の速度を上げる。

そしてさらに五分ほど自転車を走らせたところでようやく、

「……ふう、やっと着いた」

藤沢は自転車を止めた。

そこは車が行き交う大通り脇の歩道。その向かいには、ボロボロの廃ビルがひっそりと佇んでいる。

「えっと、時間は……」

藤沢は左上の袖をまくり、時計を見た。時刻は七時二十五分四十二秒。さらにちつつと秒針が動いていく。

「そろそろか……」

そう呟いて、藤沢は上を見上げた。垂直にそびえる黒ずんだコンクリートの壁。その最上段には緑色のフェンスらしきものが見える。しかし角度がきつく、さらに真っ暗なので、それ以外には何も見えなかった。ネオンの光のせいで星すら見えない。

藤沢はそのまま二分ほど見上げていた。

その間、時折何かが砕けるような音が響いたような気がしたが、しかし通りを行き交う車の音でかき消される。屋上で何が起こっているのか藤沢は少し気になったが、それ以上考えることはしなかった。どちらにしろ、これから藤沢が起こす行動に変更はない。

ふと、見上げている屋上のフェンス付近に点が見えた。

「……来たか！」

藤沢は慌てて自転車のかごから毛布を取り出した。そして胸元に広げる。

藤沢が見上げている中、その点はどんどん大きくなってきた。加速度的に増大していく。そしてコンマ数秒後には、その点が人間で

あることを確認できるほどになっていた。

藤沢は見上げたまま立ち位置をそろりそろりと補正し、

「……オーライ、オーライ」

その落下物の真下に入る。そしてついに 彼女 は毛布の位置に達し、

ドスンッ

「うおっ……！」

腰が砕けそうになりながら、藤沢は何とかキャッチした。勢いを殺しきれず彼女の体は少しばかり地面に衝突したが、そこまでの大激突ではない。悪くて打ち身程度だろう。藤沢がいなかった場合に比べれば、数十分の一に被害は縮小されているはずだ。

毛布の上で気を失っているブロード髪的女子を見下ろしながら、藤沢はふうつとため息をつき、

「……やれやれ、何とかうまくいったな。女の子の死体を見るのは二度とゴメンだ」

第八話「選択」

リーネは目を開けた。

視界は闇だった。

しかし、小さな黄色い点がぼつぼつと見える。ぼやけた意識をはつきりとさせるのに数秒を要した後、リーネはようやく自分が寝そべった状態で夜空を見上げていることに思い至った。

リーネは上半身を起こした。

周囲にはちらほらと電灯が見え、その明かりに木や芝生やベンチが照らされている。遠くから車の走る音が聞こえてくるが、それだけで、他には何も聞こえない。動くものは何も見当たらなかった。

「……ここは、公園？」

リーネは首を傾けながら呟いた　と、

「おや、気付いたかい？」

聞き覚えのある声が聞こえてきた。

リーネが首を曲げると、そこに立っていたのは藤沢。先刻と同じような笑顔で、手には缶コーヒーが握られていた。

「ふふ。思ったより早くカムバックしたねえ。ダメージが少なかったってことかな？　とりあえずよかった、よかった」

「……藤沢先輩？　どうしてここに……。というか、ワタシはここで何を……」

「うん？　混乱してるのかな？　頭は打ってないはずだけど。……」

……思い出せないかい？　まあ、思い出せないなら出せないで、むしろその方が　

「……いえ、思い出しました」

藤沢が語りかけている最中に　夜空　オフィス街の真ん中の公園　膝の上にかかっている毛布　これらを見たリーネは、すぐに記憶を取り戻した。ついさっきの　敗北　の瞬間、その情景。それらを一つ一つ思い出し、リーネの頭が俯いていく。

藤沢は、そのリーネの頭を見下ろしながら、

「あ、一応言っておくけど、君が寝てる間、俺は君に何もしてないから安心してくれ。そもそもそんな暇がなかったしね。君が気を失ったのは三分ちよつとだ。その間に君をこのベンチに連れてきて寝かせて、自販機との間を往復して、戻ってきたら君は起き上がった。時計を確認してくれればいい。それに、そもそも、想い人のいる女性に手を出すのは俺の趣味じゃないし、無防備な状態ならなおさらだ。だから」

「……何で、藤沢先輩が？」

リーネは藤沢の弁論を聞き流し、再度藤沢を見上げながら尋ねた。
「どうして先輩がここにいます？ この少し汚れた毛布……多分、ワタシをキャッチするために用意したんですよね？ これじゃ、まるで そうなることを知っていた みたいに、何で、どうして」

上体を乗り出して尋ねてくるリーネに、藤沢は 口元に入差し指を立てる仕草で答えた。シークレットのジェスチャー。そしてもう一度にこりと笑い、

「……もし俺がいなかったら、君は確実に死んだ。俺は君の命の恩人だ。それは事実。そして君は、どうやら一命を取り留めたことにいくらか安堵している。安心していい。ということは、君は、俺の行動に対して少なからず感謝していると見て、いいかい？」

「え？ それは、まあ……」

「ふふ。よし、だったら交換条件にしよう。君は、俺に対して謝辞を一言も言わなくていい。感謝する必要はない。『ありがとう』と心の奥で思うことすら不要だ。俺のこの行動を忘れてしまったって一向に構わない。俺はそんなことで君を責めたりはしない

その代わり、俺の素性についてこれ以上俺に疑問を呈してこないこと、そしてこのことを他人に言わないこと。これを約束してくれないか？ 別に破ったからと言って俺に君を罰する能力はないけれど……要は、これはお願いみたいなものだ。この条件、飲んでく

れるかい？」

「え、いや……………」

リーネは戸惑う。

今日あのビルへ赴いたことを、リーネは誰にも話していなかった。東本家の人間にすら言っていない。事後報告でいいと思っていた。だから、リーネがあの場合にいることを知っていたのは、リーネ本人と式神ユネアのみ。情報を漏らすような隙を見せた覚えはないし、予測すら不可能なはずである。

なのに、藤沢はあの場合にいた。

それにそれだけではなく、藤沢は毛布まで用意していたのである。これはもはや、リーネがあの場合から落ちてくることを予測していたとしか考えられない。一体どんな方法で予見を立てたのか明確には分からないが、しかし式神の力を使えば、あるいは可能かもしれない。

この藤沢も式神に関係しているのでは？

そんな疑惑がリーネの中に浮上する。だが、こうして面と向かっている藤沢からは、そういう雰囲気は感じられない。小林雑音やスズランが発するような張り詰めた気配はない。気配をコントロールしているような様子もない。

つまり、この藤沢亮介は ただの素人。

……ならば、問題は無いだろう。奴に敗北した以上、今は性急に次の手を打たなければならぬ状況。この用件は横に置いておいても何も問題はないはず

リーネはそう考え、

「……わ、分かりました」

「ありがとう」

ふふ、と薄く笑う藤沢。

「じゃあ、もう帰ろうか。駅まで送るよ」

そう言っ、藤沢は脇に止めてあつた自転車のストッパーを外し、手で押しながら歩き出した。

正直なところ、リーネは早く一人になりたかった。一人になり、

奴を捕らえる次の手を考えることに集中したかった。が、ここで付き添いを断るのも変かもしれない。それについさつき命を救ってもらった手前、好意を無下にするのも気が引ける。

リーネは仕方ないという結論に達し、

「……ありがとうございます」

と言いながら、藤沢の後を歩き出した。

大通り脇の歩道、藤沢が一步前を歩きながら、

「……ところで、東さん。話は変わるけどさ」

「はい」

「君は、量子力学について詳しいかい？」

「はいい？」

話題の変わりように、リーネの口から甲高い声が飛び出した。

「え？ りよ、量子力学、ですか？ いえ、まったく。その『量子力学』っていう言葉を聞いたことがあるくらいで……」

「そうか、よかった」

藤沢はくすりと笑う。

「いや、もし君がそれに通じてた場合、今俺がしようとしてる話をしても釈迦に説法というか、俺が恥をかくだけだと思ってるね。確認だよ。よかった。知らないなら、俺も喜んで恥を晒せるな。じゃあ、早速本題に入るけど 実は、その量子力学ってのにおいて、量子の状態っていうのは、観測するまで決まらないものなんだそうだ」

「決まらない？」

「そう いや、煮え切らない話し方で申し訳ない。これは又聞きの知識だね。うちの部の部長、いや先代の部長がよくしてた話なんだ。彼は理学部に進学したんだけど まあ、とにかく、

現代の量子力学っていうのは確率によって記述されていて、現象そのものっていうのは、観測されて初めて決定するらしいんだ。そのせいで、アインシュタインの猫 いや、ハイゼンベルグの猫だったかな？ とにかくそんな議論までされるようになっていた、

あるいはされているそうだと。これは学者さんにとっては難題かもしれないけど、しかし俺が初めてこの話を聞いたときは　　少し嬉しかった」

「嬉しかった？」

「ああ、嬉しかった。喜ばしかった。だって、つまりこれは現象を全部が全部百パーセント予測できることじゃないってことだろ？」

『なってみるまで分からない』そういう事象が存在するってことだろう？　俺達が未来に期待する意味があるってことだろう？　世の中には地球シミュレータなんてものがあって、そのうち未来の出来事まですべて計算で導き出されるんじゃないかと思っていたけど、どうやらそれは困難らしい。……まあ、この学問がさらに発展してこの問題が解決されてしまふ可能性も無きにしも非ずだけど」

「いえ、あの、それはまあ、分かりましたけど……」

リーネは藤沢の後をとぼとぼ歩きながら、戸惑った声で、

「……それで、その話が、ワタシと何か？」

「つまりね、未来を勝手に決め付けて悲観するのはよくないってことさ。猫が生きていると信じて箱を開けることに意義があるんだよね。箱を開けてみれば、ふたを開けてみれば、そういう輝かしい未来かもしれない。そう信じることは無駄じゃない。未来は決まりきってなんかいないんだから　　まあ、俺が言うのは変な気もするけどね」

ここにきて、リーネはようやく分かった。藤沢が、自分を元氣付けるためにこの話をしていること。つまり彼は、リーネが自殺しようとしてビルから落ちてきたと思っているのだろう。学校の廊下で会ったときのやりとりも、今思えば、そのことの確認だったのかもしれない。見当違いも甚だしいが。

「箱を開けるか開けないか。その『選択』。これこそが生きていうことだと、俺は思うね。不安定な未来。不確定な未来。『選択』することだけが、希望を叶えるために俺達ができる唯一の術なんだから。その『選択』によって未来は変わるはずなんだから。だから

そんな悲観しないでさ、信じようよ、自分の未来を。勝手に絶望して死に急いじゃダメだよ？」

「え？ いや、あの、それは、その……………は、はい、わかりました」

迷った挙句、リーネは愛想笑いと共に頷いた。まったくもって的外れな励ましだったが、ここで否定して「じゃあ何でビルの屋上から落ちてきたのか？」と再び聞かれるのは困る。このまま誤解してもらった方が話はスムーズにいくだろう。

話がひと段落ついたところで、

「おっと、着いたね」

藤沢が立ち止まった。

それにつられてリーネも立ち止まり前方に目をやると、駅が見える。スーツ姿のサラリーマンが行き来していて少々混雑していた。

「じゃあ、ここでお別れだ。気をつけて帰るんだよ？」

「あ、はい。あ、ありがとうございました」

さっきから続けている愛想笑いのせいで頬の筋肉がつりそうになりながら、リーネは自転車にまたがって帰っていく藤沢を見送った。

第九話「来客その一」

最寄り駅から家へと向かう道すがら、リーネは延々と考えを巡らせていた。

如月ジエックの能力について

あれは明らかに、人間が扱える術の範疇を超えている。人間の限界を超えている。『時間を制御する』なんて、そんなことは人間には無理だ、不可能だ。どう考えても、あれは式神が扱う能力のレベルだ。精霊の域だ。間違いない。如月ジエックは精霊だ

そう考えれば、色々なことに合点がいく。

まず、奴 が公的な届出なしに名前を変えたこと。取り付く傀儡さえ変えてしまえば、いくらでも変更は可能だろう。中身はそのまま、人間界での呼び名だけを変えることができる。

それに、あの年齢。

この二十年、自分の母親以外で、東本家の人間が式神に殺されたなんて話は聞いていない。そんな報告は一つもなかった。奴 が言っていた『東家の人間』というのは、間違はなく母だろう。奴こそが母の仇なのだ。今まで六年間追いつけていた宿敵なのだ。外見は思いの外幼かったが、考えるまでもない、奴 が子供に取り付いたというだけだ。中身はやはり、母の仇なのだ。

しかし、しかし、一つだけ分からない。

一つだけ解せない。

奴 と一緒にいた土の精霊。彼は如月ジエックのことを「主」と呼んでいた。そしてジエックの保身のために動いていた。奴 を守るために戦っていた。

つまり、彼は如月ジエックの式神である、ということ？

精霊が精霊を降ろすことだって、まじないさえ唱えれば、特に不可能ということもないだろうが……。しかし、実際にそんなことを実行した例なんて聞いたことがない。

それに、如月ジェックが式神だというなら、奴の『主』は一体どこへ行った？ 式神は呼び出した主に仕えるのが通例。奴は主の側にいないくていいのか？ 主のために働かなくていいのか？ そんな疑問がリーネの中に浮かんできてくる。

せめて土の精霊だけでも確保できていれば、問いただすこともできたかもしれないが。しかし、彼とやりあつたはずのユネアの行方が分からない。意思伝達で問いかけてみても反応がない。どころか、気配すらまったく感じられない。

恐らく、ユネアは精霊界に返されてしまったのだろう。

土の精霊との勝負の末敗れたのか、もしくは如月ジェックが介入してきて二対一で負けたのか。どちらなのかは分からないが

どちらかなのだろう。これは至極痛い状況だ。

ユネアだつて戦闘に手馴れた精霊だつたはずだ。決して弱いわけではない。むしろ強者の精霊の中でも上位に入るはずだ。イギリスでも五、六件の仕事に連れ出したことがあつたが、彼はすべてにおいて期待以上の成果をあげてくれた。その生真面目な性格も相まつて、完璧に仕事をこなしてくれた。

彼ほど仕事に有用な式神はいないだろう。

だからこそ 困る。

如月ジェックが生きていて、自分もまた生き延びた以上、奴に再戦を挑むのは必定だが。奴に勝つためには、ユネア以上の能力を持つ式神が必要だ。彼以上の精霊を降ろさなければならぬ。ユネアを降ろすためにも、リーネは三週間かけた。ユネア以上の者を降ろすのにどれだけかかるか分からない。見当もつかない。降ろせるかも分からない。それどころか、彼以上の精霊が存在するのかも分からない。

この精霊降ろしが成功するまで、如月ジェックは日本に留まつているだろうか？

間に合うとはあまり考えられないが、可能性があるならばやらなわけにはいかない。これは六年間待ち望んだ千歳一隅のチャンス

だ。次の機会などないかもしれない。黙って待っているわけにはいかない。

そう考えているうちに、リーネはマンションにたどり着いた。

エレベーターで五階に達し、扉が横にずらりと並ぶ廊下を歩いていくと　　リーネの部屋の前にぽつんと、人が一人立っていた。その人物はインターフォンを押そうと右手を持ち上げ、その動作の途中でぴくりと、リーネに気付いて顔を向けてきた。

「……アナタ、は？」

振り向いた顔が見え、リーネは呟いた。

無造作な黒髪で、高校のブレザーを着たその男は

クラスメイトの、小林雑音だった。

第十話「来客その二」

「……こ、小林、さん？ ど、どうしてここへ？」

「ああ、鞘河君にこの家の場所聞いたんだ」

リーネの質問に、雑音は目尻を下げながらエクスキューズするように答えた

が、これはリーネが求めた答えではない。この住所は学校にも届けているし、調べる方法はいくらでもあるだろう。わざわざ裏の情報網を使うまでもない項目だ。雑音にここを知られたことは、リーネにとって何ら問題ではない。問題は雑音が、何の用でここに来たのか？

リーネは数秒の間雑音の外見を観察した後、探るような声音で、
「……何の御用ですか？」

「ああ。実は、さっき言った頼みごとについてなんだけど」

「……それは、後でもいいという話では？」

「そのつもりだったんだけどねえ。その……少々、のっぴきならない状況になっちゃって」

「のっぴきならない？」

「そ。深刻というか、残酷というか、急を要するというか。……主に、僕の小遣いについての問題なんだけどね」

「小林さんのお小遣い、ですか……？」

首を傾げながらリーネは聞き返した。

……話を聞いてもまったく要領を得ない。小林雑音の小遣いがピンチで、何で自分に頼みごとが発生するのか？ どんな頼みごとをするつもりなのか？ その関係性も因果関係もまったく見えてこない。

結局リーネは、考えているだけではラチが明かないという結論に達し、

「……分かりました。話を聞きましょう。取り合えず、中へどうぞ」
「あ、お構いなく。用件だけここで」

「近所迷惑ですから」

リーネは無言を言わせないように言い放ち、雑音を押しつけるようにドアの前に立って鍵穴に鍵を差し込んだ。そしてガチャリと扉を開く。

ドアを開けたまま視線を向けてくるリーネを見て、雑音は肩を落としながら

「はあ」

と呟いた。そして導かれるままドアをくぐり、

バタンツ

乾いた音が響き、

光が途切れ、

決して広くはない玄関の内側、

二人きりが詰め込まれ、

リーネは空気抵抗と音を殺すため、

左手でスカートをおさえながら、

右かかとを一步引き、

滑らかに体を回転させ、

同時に右手をポケットから抜き、

ぴたりと、

雑音の首元に短刀を構えた。

そして闇に際立つ鋭い視線で雑音を睨みつけ、溜息のような声で、
「……アナタ、一体どういう魂胆ですか？」

「魂胆？」

「しらばつくれないうください。アナタ、何を狙ってこんなところまで来たんですか？ お金ですか？ ワタシの命ですか？ それとも精霊に関するんですか？」

「『狙つて』って、まるで強盗みたいだな。別に僕は、君から何かを奪い取るつもりはないよ。この通り、無抵抗だ」

「『無抵抗』？ ……ふん。ワタシには 当たらないことが分かっていたからよけなかった ようにしか見えませんが、ね。まったく憎たらしい」

吐き捨てるように言いながら、リーネは短刀をポケットにしまった。そして再度ついと雑音を睨みつけ、

「どちらにしろ、アナタに目をつけられた時点でゲームオーバーですからね。ワタシに生き延びる術はありません。……いいでしょう。ワタシも命を賭してアナタとのネゴシエーションに挑みます。さあ、中へどうぞ」

「あ、ども。 …… …… というか、本当に僕は君に危害を加えるつもりはないんだけどなあ」

困ったように呟きながら、雑音は渋々差し出されたスリッパに履き替えた。そしてリーネの後について廊下を進み、リビングにたどり着く。

リーネは、雑音にイスに座るよう勧めると、

「では、ここで少々待っていてください。お茶とお菓子を用意いたしますので。 …… 何だったらテレビでも見ててください」

「へ？ いや、別に、構わな」

パチンッ

雑音の意見を見無視するように、リーネはテーブル上のリモコンのボタンを押した。次いで、画面に野球中継が映し出される。

あからさまに強引な勧めだったが これは、リーネの保険の一つ。

今廊下を渡る際に、リーネは気付いたのである。 電話のモニターに示されていた伝言の件数が十四件だったことに。

リーネの父親は朝の七時から夜十一時の間、一時間に一件ずつ留守番電話を入れてくる。平日も休日も毎日欠かさない。これは特にそう決めたわけではないが、いつの間にかそうなっていた。少なく

ともこの数ヶ月の間は一度も乱したことはない。

昨日の分の伝言はすべて聞き終わっている。そして現在時刻は八時一分。すなわち、電話には伝言が十三件残っているはずである。

一つ、多い。

父親が今日に限って余計に電話してきたという可能性もなくもないが、それ以上に可能性の高い予見がある。即ち 他の人間が留守番電話に伝言を残したこと。

リーネの家に電話してきて、さらに伝言まで残す人物。そして今日 というタイミング。リーネの中には確信に極めて近い予感があつた。

早く内容を聞きたい。

リーネは内心焦りながらも、一方では至極冷静だった。今現在、家の中には来客がいる。しかもそれは あの 小林雑音。電話の内容を彼に聞かれるのは、リーネにとつて望むところではない。どんな不利な状況になつてしまふか、どんな危険な状況になつてしまふか、分らない。彼に声を聞かれないよう、何かしらで音の通りを防がなければならない。

そのためのテレビだったのである。

リーネは我ながら強引だったと感じたが、見たところ、雑音はそこまで深く考えていないようである。何も疑うことなく、椅子に座つたまま野球観戦を始めてしまつた。

その様を見てリーネは安堵し、「では」と言いながらリビングを出ようとした、その時

『 臨時ニュースをお伝えします 』

リーネは思わず振り返つた。

つい一秒前までは野球場が移つていた画面がいつの間にか切り替わり、机に座つたキャスターが真剣な顔をこちらに向けていた。その強張つた表情が、さながらこれから伝えるニュースの深刻さを物

語っているようだった。

リーネと雑音が見つめる中、キャスターの音声が続いてきて、

『本日、午後七時三十分頃、××県 町の ビルで、二十三人の遺体が発見されました』

淡々と伝えるキャスターの声が一旦途切れると、画面が再度切り替わって、夜のオフィス街が映し出される。

『事件があったのは ビルの二階から五階で、合計で二十三人の遺体が発見されました。死因はすべて絞殺で、発見時にはすでに死後一時間以上経っていたということです。現場には所々砂や土が落ちており、これは犯人が犯行の際に落としたものと見て警察は捜査を行って 』

「……うわー、ひどい事件があったもんだ」

テーブルに片肘をつけながら、雑音は顔をしかめて呟いた。

その背後、廊下からテレビを見ていたリーネは 膝が砕けそうになるのを、寸での所で耐え凌いだ。しかし、バランスを保つだけで精一杯。地面がぐらぐらと揺れている。頭が痛い。胸が苦しい。腹に鉛が押し掛かってくるような感覚に苛まれる。

今テレビに映っているのは、さっきのビルの隣にあった建物。これが偶然……なんてわけがない。無関係であるはずがない。間違はなく、この二十三人は 如月ジェックに殺されたのだ。

なぜ、などと考えるまでもない。目的は証拠隠滅。先刻如月ジェックがあの場合にいたことを目撃される恐れがあったから、奴が全員の口を封じたのだ。全員の魂を削いだのだ。

そうだ、そうだった。

これが、これこそが 最悪の事態

考えうる限りの最悪の事態。自分が死ぬのよりも最悪の事態。無関係の人々が何人も、何十人も死ぬ。奴に殺される。奴を追う上で、これが最も避けなければならなかった状況なのだ。今、そういう状況に陥ってしまったのだ。

これは、ワタシのせい？

ワタシが負けたのが原因？

ワタシの不手際のせいで人が死んだ？

ぐらりと、足元がふらつく。景色が歪む。視界が眩む。内臓が溶け出したような腹部の痛み。体の内側のすべてを吐きそうになる。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。キモチ……ワルイ。悪い、悪い、悪い。ワタシが、悪い？　ワタシが負けたのが悪い？　ワタシの存在が悪い？

……いや、

いやいや、いやいやいやいや

今のニュースでは、死体群が発見されたのが七時半で、その時にはすでに死後一時間以上経っていたと言っていた。つまり、二十三人が殺されたのは六時半前。ワタシが奴に攻撃を仕掛けたのは七時六分。即ち、あの時にはすでに彼ら彼女らは殺されていた、ということ。奴はワタシとの戦闘とは関係なく、最初から周辺の人間を殺すつもりであの場にいたのだ。この殺戮は、ワタシが直接の原因ではないのだ。

ここまで考えがいたり、リーネはようやく平衡感覚を取り戻した。

しかし、安心してゐる暇はない。

ワタシが止めない限り、奴の殺戮は続く。

すでに臨時ニュースが終わり、野球中継に戻っているテレビ画面を横目で見ながら、リーネはリビングを離れた。そして廊下の電話機に駆け寄り、伝言の履歴を見る。

十四件の伝言。その中に　　あった。一つだけ『非通知』が。

リーネが受話器を持ち上げ再生してみると、

『どうも、私立探偵兼情報屋の　レフト　です。ちょっと、急な連絡があつてお電話しました。折り返し　』

プッ

最後まで聞かないうちにリーネは受話器を置いた。そして再度持ち上げ、無心で番号を入力する。

プルルルッ、プルルルッ、プルルルッ

呼び出し音が三回鳴り、

『はい。レフトです』

「も、もしもし。電話頂いた東ですが」

『ああ、はいはい。東様。お待ちしてました。案外リターンが早くてよかった。もし明日になっちゃったらどうしようと思ってたところで。これで一安心ですよ。では、例によって例のごとく、合言葉
を』

「『クイーンズ・シティ』」

『あ、はい。承りました。……というか、東様、焦ってますね？

かなり焦ってますね？ まあ、そちらの事情も何となく見当はついているので、気持ちも分らないではないですがね。しかし情報をやり取りする場では、もう少し落ち着いた方がいいですよ？ でないと冷静な判断ができなくなつて、虚実を見抜けなくな
』

「用件は何ですか？」

『え？ あ、はい。ええと、これは補足事項というか、アフターサービスというか、つまるところ特別対応です。お客様が気持ちよく情報を扱えるようにするための、ね。ですから、この件に関しては追加料金は
』

「早く！」

『わ、分かりましたよ、分かりました。そんな、怒鳴らないでくださいよ。怖いなあ、もう……ふう、じゃあ、単刀直入にお伝えしますよ？ えーと、ですねえ』

如月ジェックが逃げました』

「……………へ？」

くらりと、またもリーネの世界が揺れる。頭が真っ白になり、言語の理解が追いつかない。理解しかねる。理解しがたい。日本語が分からなくなる。『レフト』は今、何と言った？ ええと
キサラギジェックが、ニゲタ？

『……いや、逃げようとしている、と言う方が正確でしょう。今までマークしていたアジトを離れて、空港の方へ向かったみたいです。奴が買った航空券の詳細も一応抑えてまして。その出発時間はまだまだ先なので、今すぐ逃げるというわけではないようですが。恐らく、空港近くの別のアジトへ向かったのでしょう』

「……………いつの便ですか？」

『えーと、デパーチャーは明日の朝、六時ですね。アメリカ行きのもです。予約時間はつい二十分前。運良く空席があつたみたいで』

ガツンッ

リーネの手からこぼれた受話器が、棚の上に衝突した。ごろりごろりと左右に揺れ、五回目でようやく止まった。スピーカーからはレフトの『もしもし？ もしもし？ 東様？ もしもーし！』という声が漏れている。が、リーネの耳には入らない。届かない。リーネはただただ虚空を見つめている。見つめたまま逡巡している。如月ジェックが逃げる？ 今？ このタイミングで？ 日本から出て行く？ アメリカへ向かう？ そんな、なぜ？ どうして？

……………。
……………。
……………。
……そうか。それはそうだ。当たり前だ。当然のことだ。そう

ワタシが無事だったから

ワタシの死体があの場合になかったからだ。

恐らく 奴 は地上階までワタシの死体を確認しに来たに違い無い。そこで、ワタシの死体がないことに驚いたに違いない。そして、ワタシが無事生き延びて逃げたことに気づいたに違いない。

それは、 奴 としては少しばかり厄介なこと。

能力を見せた相手に逃げられてしまった。能力に関する情報を他

人に伝える機会を与えてしまった。自分の能力が他人に漏れてしまう可能性がある。広がってしまう懸念がある。その第三者に何かしら策をこうじられてしまう恐れがある。厄介な刺客が現れる危険性がある。

おまけに、相手は東本家の人間。

十四年前にも挑んできた敵だ。恐れはせずとも、鬱陶しいとは思わず。あまり関わりたくないと感じるはず。奴が日本に来た目的は 奴が今日も廃ビルに視察に来ていたことから考えても まだ達成していないのだろう。しかし、それを後回しにしても避けたいと思うはず。

だから如月ジェックは、早速逃げようとしているのだ。

奴の行き先は、アメリカ。アメリカは広い。日本とは比べものにならない。一度見失ったら、もう二度と捕まらないかもしれない。対面は叶わないかもしれない。勝負を挑むチャンスは金輪際ないかもしれない。

…… 奴に逃げられる。逃げられてしまう。六年かけてやっと掴んだ居場所だったのに。またも、ふりだしに戻ってしまう。

今から向かえば、あるいはまだ間に合うかもしれない。奴の居場所の見当をつけることは不可能ではない。急げば、もう一度くらいアタックできるかもしれない。

が、

いかんせん、戦力がない。攻撃力が足りない。奴を追い詰める攻撃方法がない。

今から精霊を降ろして、果たして間に合う？ ユネア以上の精霊が降りてくれる？ あと九時間で成功する？ そんなの、無理、無理だ。一日でも一週間でも一ヶ月でも分らないのに。たった九時間なんて。運任せですらない。確率の問題でもない。奇跡にすぎるにも程がある。

他に、他に手は？ 奴を止めることができる策は？ 早く、早くしないと逃げられる。 奴を取り逃がしてしまう。どうしょ

第十一話「来客その三」

「……あ、あなたが、やる……ですって？ やる……殺る？ あなたが？
というか、アナタ、こちらの事情を知っているんですか？」

「詳しくは知らないさ。ただ、君の話し振りと、電話から漏れ聞こえてきたそのふざけた情報屋の声から、何となく想像がついたってだけだ。……ようは、殺りたい奴がいるけど、時間がないってことだろ？」

「……ええ、正解です」

リーネはゆつくりと頷きながらも、雑音に推し量るような険しい表情を向ける。

「……しかし、なぜです？」

「何が？」

「何でアナタが、ワタシに協力しようとするんです？ アナタに何のメリットがあるというんです？」

「言っただでしょ？ 君に頼みごとがあるって」

雑音はすました笑顔で肩をすくめた。

「つまりは報酬みたいなものさ。僕が君のために働くから、僕の頼みを聞いてくれてこと」

「……その頼みというのは？」

「相変わらず、探るような感じだねえ。僕ってそんなに信用ないかい？ ……いや、そりゃそうか。この前君の邪魔をしたのは、他でもない僕だったね。疑われるのも無理はないか。……でもあれは、ただ単に鞘河君に借りがあつたっただけで、君に対して敵意があつたわけじゃなかったんだけど。……まあいいや。用件を言うよ。ええとね、君に精霊の降ろし方を教えて欲しいんだ」

「……は？」

リーネは片眉を吊り上げながら聞き返す。

「精霊の降ろし方……ですか？」

「そう　　とは言っても、僕に対してじゃない。うちのクラスに東香々美ってのがいるだろ？　彼女に手ほどきしてやって欲しいんだ」

「香々美さん、ですか？　あの人とは出席番号が隣なので、たまにお話することありますが……でも、なぜです？」

「あいつも東って苗字だし、多分君と遠い親戚だと思っただけ。実は数ヶ月前まで、あいつにも式神がいたんだ」

「……香々美さんが降ろしたんですか？」

「ああ。　　ただ、それは、まぐれでできたらしい。その式神が去年、　運悪く　精霊界に帰されちゃってね。あいつは今、もう一度その精霊を降ろそうとしてるらしいんだ。だけど、それがなくなかうまいかないそう。だから君にあいつをコーチングしてやって欲しいんだ」

「……アナタが直接教えてあげればいいじゃないですか」

「僕が？　あいつに？　……ああ、そっか。そう言えば、あの時のことは君も間接的に見てるんだっけ？　ってことは　あいつのことも知ってるってことか。……実は　あいつ　は、僕が直接降ろしたんじゃないんだ。引き継いだだけだね。しかも、僕も一応まじないは知ってるけど、僕自身は一度も精霊降ろしをしたことがないんだ。だから、残念ながら人に教えることはできない」

「…………ふん」

リーネは依然難しい表情のまま、小さく呟く。そして雑音の頭から足まで視線を滑らせ、まじまじと観察した後、

「……なるほど。確かに、話の筋は通ってますね」

「……奥歯にモノが挟まったような言い方だなあ。本当に他意はないんだって。ちゃんと君のために働くよ。こちらら、毎週末数千円の散財を食らって困り果ててるんだから」

「……分かりました。取りあえずのところ、信じましょう。こちらもちちらで非常事態ですからね。贅沢は言ってられません」

表情を崩さないままそう言つて、リーネは再び受話器を持ち上げた。

『もしもし！ 東様？ 聞こえないんですかあ？ じゃあ、切りますよ？ いいですか？ いいですね？ いいですよ？』

「……もしもし」

『あ、やつと繋がった。もー、いきなり黙らないでくださいよ。びつくりするじゃないですか』

「すいません ところで、もう一つ情報が欲しいんですが」

『もう一仕事ですか？ はいはい、了解しました。ではまた口座に前金を入れてもらつて、その後こちらからまた電話を 』

「いえ、すぐ調べて欲しいんです」

『今すぐですか？ ……えーと、どんな情報を？』

「如月ジエックの、日本にある他のアジトの場所、すべてです」

リーネは電話口に、力のこもった声で言い掛けた。

それに対し、しばらくの間があつた後、

『如月ジエックの拠点全部、ですか……。今すぐとなると難しいですね。現時点では、そこまで正確な情報は手に入れてないので。

ですから、今ある情報からの推測結果ということになりますが。それでも一、二時間はかかつてしまえますよ』

「構いません」

リーネは首をふるふると振りながら即答。

「今からではお金の用意が間に合わないので、全額後払いでお願いします。代わりにチップは弾みますし、何だつたらワタシが晩酌のお相手くらいしますよ。それでもワタシ、男性にはそれなりに支持される外見してますんで」

『ほう、あなたがお酌？ それはそれありがたい提案ですが。しかし私としては、むしろクールなおと……………うおっほん。

いえ、何でもありません。丁重にお断りさせていただきます。商売柄、あまりほいほいと姿を見せるわけにもいきませんし、ね。見返りなら、この私立探偵レフトを知人に紹介していただければそれで結構

です じゃあ、分かりました。如月ジェックの日本の根城すべて、調べておきます』

「よろしく願います」

『じゃあ、また二時間後に電話しますんで。では』

ガチャリ

リーネは受話器を置いた。そしてくるりと振り返り、後方に立っていた雑音に視線を向ける。

「……というわけで、二時間後にターゲットのアジトへ移動します。ターゲットは人間でもあるので、アナタが本人に攻撃することは許しません。 奴 を仕留めるのはあくまでワタシです。アナタには 奴 の取り巻きの相手と、ワタシのサポートをお願いします」

「オーケー、分かったよ」

雑音はしがらない雑用を任されたかのように、何ともなさそうに一つ頷いた。

その顔を、眉間にしわを寄せながら見ていたリーネは、

「……一つだけ聞かせてください」

「……何？」

「どうしてアナタは、わざわざワタシを手伝うんです？」

まだ内心にひっかかりがあるままの難しい表情のリーネ。さらに言葉を続けて、

「アナタほどの腕があれば、ワタシを脅して命令するという手段もあったはず。むしろそちらの方が手っ取り早かつたはず。容易なはず。なのにアナタは、今回ワタシに協力するという手段をとった。

……これはなぜです？ どうしてこんな面倒くさい方法をとったんです？ もっと簡単な手段があるのに。それを選ぶ資格があるのに。そこが、そこだけが理に適っていない。それだけがワタシには分からない。納得できない……」

リーネは無意識に雑音の方に一歩踏み出しながら、真に迫るよう問いかける。

雑音は目線を床に落とし、両肩を持ち上げて、

「……やれやれ。君の中の僕は、相当な危険人物に仕上がってるらしいな。……あのね、別に僕は異常者の類じゃない。内面は普通だ。現に、今だって何の問題もなく高校生活を送ってるだろ？ 目的のために刃をちらつかせるっていうのは、僕の中でも最後から二、三番目の選択肢だ。滅多に選ばない。そこら辺は一般人と変わらないよ」

ここで雑音はふふつと自嘲気味に笑い、

「それに、君は大切なクラスメイトだ。そんなぞんざいに扱ったりはしないよ。前は君の敵として現れたけど、僕は君とだって友人関係を構築したいと思ってる。同級生として君の人となりは尊重してるし、学年での君の人気振りは尊敬してる。僕も君と仲良くしたい、仲良くなりたいと思ったんだ。だから、君に協力するという選択をした。君にはそれだけの魅力があるってことさ。………まだ説明不足かい？」

「……………い、いえ」

小さく呟きながら、リーネは雑音から視線をそらした。

畏怖すべき人間からの思いがけない真っ直ぐな賛辞がむずがゆく、あるいは今までやたらに疑ってしまっていたことが急に恥ずかしくなり、リーネは視線をそらさずにはいられなかった。

第十二話「タクシー」

如月ジェックとマークリドは、タクシーの後部座席に並んで座っていた。

窓を移り変わっていく景色は、暗闇の中に畑や民家が点々と見えるような場所。数秒の間隔ごとに、黄色いライトを照らした対向車がすれちがっていく。車内ではラジオもオーディオもかけておらず、さらに会話もないため、エンジン音だけがえんえんと響いていた。

運転手の後ろ、並んで座っている二人は、一つの視界に入れるにはすべからず対照的な外見をしていた。片や、パーカーにキャップにジーンズという、ダボダボとした格好。片や、ジャケットに黒髪長髪、細めのパンツという、スリムな服装。ビジネス街をながしている最中にこの二人の前で車を止めた運転手も、心うちでいぶかしみながら眺めてしまった。

この二人はどういう関係なのか？

そして何の用でビル街にいたのか？

だが、二人とも表情や仕草に不自然なところは見られなかった。なので、この運転手は何ということもなくこの二人を乗せてしまったのである。この後、口封じのため、自分が殺される予定であるとも知らずに。

この運転手のすぐ後ろに座っているマークリドは、ぼんやりと夜景を眺めながら、目の前の彼をどのように殺すか考えていた。降車直後にコトを起こすのは少々危険かもしれない。自分たちとの関係を疑われないために、せめて一時間は時間を置いておく必要があるだろう。この車のタイヤにトラップをしかけておけばいい。能力を用いれば、証拠が残らない方法もいくつか思いつく。具体的には

結局三十分後、道程の三分の二を過ぎた頃には、マークリドの中でもすべての結論が出た。

その後はマークリードも手持ち無沙汰になり、考えることもなく窓の外を眺めるだけになる。それも数分後には飽きて、すぐ隣、逆の窓を眺めている如月ジェックに話しかけた。

「……しかし、主、先程は申し訳ありませんでした」

「ん？ 何が？」

「あの氷の精霊の相手で、主の手を煩わせてしまいました」

「……ああ、そのことか」

ジェックは窓枠に肘をかけながら、景色から目を離さず、何ともなさそうに答えた。

「別に問題はないよ。……それに、あいつ、やたらと強かったしな。明らかに戦い慣れてた。まさか東家の人間が、あれほどの式神を降ろしてくるとは思ってなかったが……。俺の見立てじゃあ、恐らくあいつは『藁人形』にも引けをとらないくらいの力量だっただろう。だから、奴とのサシの勝負でてこずったとしても、仕方ない話さ」

「……そう言っていただけとありがたい」

マークリードはうつむき加減で、申し訳なさそうに呟く。そして、ふっと、何かを思い立ったように顔を上げて、

「……ところで、話は変わりますが、一つ、主にお聞きしてもいいですか？」

「なに？」

「……今、比較対象として名の挙がった『藁人形』ですが……。つまり、主の仇たるその『藁人形』とは

具体的に、どの程度の力量なのでしょう？」

ジェックは、マークリードの質問にぴくりと眉をひそめた。そしてちらりと、窓の外からマークリードの顔へと視線を移す。

マークリードはジェックの表情に目を据えたまま、

「……奴の痕跡巡りの際に見せてもらった 回想 から、そいつが妖気のこもった短刀を扱っていることは見られました

しかし、あの 回想 には、『藁人形』の人となりも、戦闘の全体像も映ってはおりませんでした。そのため、私には奴の強さというのがまだよく理解できていないというのが、正直なところなのです」

マークリードの心情の吐露を、ジェックは黙って聞いている。

「主は……………『時の精霊』たる我が主は、強い。私が今まで見てきたいかなる精霊よりも強い。幾度となく主の戦闘を垣間見てまいりましたが、そのスタイルは洗練されております。時間の停止、そして逆再生。この能力があれば、どのような者にも負けることはないでしょう。主は、主の能力は強い 　　　　　いえ、最強と言っても過言ではないのかもしれませんが」

なおもジェックは黙り、マークリードの口の動きを見つめている。

「それなのに、主はおっしゃいました。自分は『藁人形』に負けたのだと。……………正直、それが信じられないのです。最強たる我が主が、どうして一人の人間に不覚をとったのか？ そのプロセスが、私には想像もつかない。……………主、一体『藁人形』とはどのような能力者なのです？ なぜ主が人間におくれをとったのです？ そこを、ぜひとも聞かせいたいただきたい」

マークリードは高ぶる感情を抑えながら、ゆっくりと言い終える。

ここまで聞くと、ジェックはくすりと笑い、

「……………ああ、まあ、いいだろう。自分の恥を晒すのには少しばかり抵抗があるが、まあ、必死に隠したいというほどのものでもないし

それに、今度こそ奴を殺せばいいだけの話だからな。オーケー、ちゃんと話してやる」

ジェックは息を吐きながら、記憶を掘り起こすように話し始めた。

「俺が奴と初めて合間見えたのは十三年前、この国でのことだ。そのときの因縁はどうだったかは忘れちゃったが、確か、場所はここかの建物の中だったのを覚えている。……………とにかく、そこで俺達は戦闘に及んだんだ。お互い、命をかけてな」

ジェックは背もたれに背中を預け、帽子のつばをついと持ち上げた。

「奴は短刀、俺は素手というスタイルだったわけだが、最初、俺と奴はほぼ互角だった。俺が奴に傷を作れば、俺も傷を受ける。その繰り返しで、ただ体力を削るだけの攻撃合戦が続いた。……そして戦闘開始から十数分が経った頃、俺はようやく機が巡ってきたと感じた。すなわち、奴の集中力が時折途切れるようになったんだ」

ジェックはもはや自分に言い聞かせるかのように、ぼつりぼつりと一人語りを続ける。

「お前も知ってる通り、俺の能力は稼働時間が限られていて、しかも思考までは巻き戻せない。つまり、能力を見られれば、対策を練られてしまう危険がある。だから俺の戦い方として、能力を見せた時点で敵の息の根を止めることが必要になるわけだが　　奴がたまに俺の攻撃をかわしきれなくなるようになった場合で、俺の機が巡ってきたと思ったわけだ。この隙を突き、時間停止をかけて、奴を一気に殺す。それで勝負は決まると、俺はそう思った
だが」

ここでジェックは語尾を強め、表情を険しくし、

「俺が奴との距離を十二分にとり、能力を発動させようと集中した際、そのコンマ数秒の隙について、奴はいきなり俺の目前に移動してきたんだ」

「目前に移動？　……………まさか、瞬間移動ですか？」

「最初は俺もそう思った。……だが、それだと辻褄が合わないだろう？　自由に空間を移動できるのだとしたら、それにはどんなデメリットもない。わかっていても対処のしようがない。最初からその能力を使って勝負を決めちまえばいいだけのことだからな。だから、奴が使ったのはテレポートなんかじゃない。奴はただ　　高速移動を行ったただけだと考えられる」

「こ、高速、移動？」

「ああ。ただ単に自身のスピードを飛躍的に上げたという、それだけのことだ　　まあ、早すぎて、俺には瞬間移動にしか見えなかったわけだが、な」

くくつと、ジェックは自嘲気味に笑った。

「つまり、奴も奴で戦闘開始からずっと俺の隙を狙ってたわけだ。俺の隙をつき、自分の能力を発動させるチャンスを待ってたのさ。そして、少しばかり奴の方がタイミングが早かったせいで、俺は敗北したんだ。俺が史上唯一の敗北を喫したのさ。……………くそ！『藁人形』め！まったくもって優秀で、狡猾で、そしてむかつく奴だぜ」

ジェックは窓枠にかけた手をぎりつと握り締める。

その様を静かに見ていたマークリードは、

「……………なるほど」

と呟きながら、視線を前に戻した。そして静かに思考を巡らす

高速移動。それが『藁人形』の能力。主の話からしても『藁人形』はただの人間にすぎないということだ。つまり、この『藁人形』の高速移動は、誰か他の者の能力である可能性の方が高い。他の者　すなわち、式神か。ようは『藁人形』も式神使いであるということだろう。そして、その式神を封じてしまえば、その『藁人形』も決して

「　お客さん、着きましたよ」

ふいに、前の運転手が、振り返りながら言ってきた。

マークリードは慌てて思考を中断し、

「あ、ああ」

と言いながら、運転手の顔を見返した。……………ここまで、やたらに物騒な会話をしてしまった。しかも『藁人形』というワードまで出してしまった。もしこの運転手がそれを不審がり、何かしら疑わしい反応を示しているなら、今すぐここで息の根を止める必要も出てくるが……………。

しかし、首だけ振り返ってくる運転手は、相変わらずの呑気な顔で営業スマイルを浮かべている。……………恐らく運転に集中していて、

二人の会話はほとんど聞いていなかったのだろう。もしくは、聞いていても意味がわからなかっただけなのかもしれないが。

結局マークリッドはタイヤにトラップを仕掛けるだけにとどめ、そして運転手に運賃を払い終えらると、のそりとタクシーから降りた。如月ジェックも続いて地面に降り立つ。

来た道に戻っていくタクシー。そのライトが遠ざかると、もはや付近には数百メートル先の街灯以外に明かりがなくなる。

そして、その街灯にうつすらと照らされるのは、コケの生えた仰々しい門。加えて

『如月ジェック』の資産の一つである、古い邸宅だった。

第十三話「到着」

「とりあえず、香々美には僕の名前を出さないで欲しいんだ」

もはや真夜中を回り、雑音とリーネ以外に誰も居ない農道を歩きながら、雑音はリーネに言い聞かせるように説明している。

「逆に言うと、僕の名前さえ出さなければ、どんな方法をとってくれてもいいってことだけだ。………まあ、苗字繋がりで、東本家の話から入っていくのが無難だとは思っただけだ」

「……まあ、そうなるでしょうね」

リーネはどうでもよさそうに頷いた 正直なところ、リー

ネは今雑音が話しているような これから より 先の事象について、深く考える気にはならなかった。そもそも、その ことから、深く考える気にはならなかった。その先などありはしないのだ。

最低限、 奴 との勝負で生き延びなければならないのだ。

しかしこの小林雑音は、もはや自分たちの勝利が当然であるかのように、何の気負いもなく、そんな 先の話 をしている。

これは、今までの自身の戦績からくる確信なのか、あるいは如月ジェット及び土の精霊の実力を知らないからこそその油断なのか、リーネは判断しかねている。この緊張の欠片もないような雑音の様子からでは、どうにも読みきれない。計算しきれない。推測が立たない。…… 無論、前者であることにこしたことはないが。

リーネはこの疑問を何とか解決しようと、半ば探りを入れるように、

「……ところで、小林さん。如月ジェット及び土の精霊の能力については、先ほど説明した通りですが、奴らについて理解はできましたか？ 何か質問は？」

「質問？ いや、特にないけど……。ただ、その土の精霊についてというのは、君のあの氷の精霊を倒したっていうんだろ？ それだけでも驚愕の事実だ。僕だって、あんだけ手こずったってのに」

「あなたが手こずった、ですって？ ふん……」

リーネはくだらない洒落を聞かされたかのように、嘲るように息を吐いた。

「冗談にしては冗談が過ぎる表現ですね、小林さん。それともワタシを謀ろうとでもしてるのですか？ 残念ながら、あのときの一部始終はワタシも間接的に見てますからね。あなたのその表現が真実かどうかは、ワタシもちゃんとわかっています。……あの勝負がたかだか五秒でついたことも、ね」

「……おいおい、待ってくれ、それが誤解なんだよ。あれはあれで僕も大変だったんだ。君の氷の精霊も相当な強敵だったことは事実だ」

「……あの戦果で『強敵』？ ふん。つまりは、あなたと対等に渡り合える者などこの世にも精霊界にも誰一人存在しないという、回りくどい自慢か何かですか？ ……まったく、冗談にしては冗談が過ぎます」

結局、さっきからずっと抱き続けている 奴 との勝負に対する不安を完全には解決できずに、リーネは「……はあ」と小さくうなだれた

「おっと」

隣の雑音が高い声音で呟いた。

つられてリーネが視線を前に向けると、そこに 古びた門 が見えた。

太い鋼鉄で作られた城門

実際、それが囲っている建造物

は『城』ではないのだが、もはや『城門』と言った方がしっくりくるほど、豪華な佇まいだった。車でぶつかったとしても通り抜けることは叶わないだろうと思わしめる、頑強な造り。しかしそれとは相反して、取っ手などに造られた装飾は、それだけで数百万の価値があると思われるほどの高級感を出している。

そして、そこから横に連なる城壁は、もはやその角が見えないほど長かった。個人の所有物としては信じられないほどの面積を囲っ

ている。その所有者が一般人ではないことは二人にも一目瞭然だった。

「……うわ、なんだこれ、すごいな」

雑音は苦笑いしながら、門の中を覗きこんだ。

時折前の道を通り過ぎる車のライトに照らされて、広大な緑の庭園が垣間見える。そしてその中央には、闇に浮かび上がるほどの白い邸宅が一つ。さらに、その奥には小高い山が見えた。

「……これが、その『如月ジェック』っていう奴の資産の一つなのか？ まったく、どんな金持ちなんだ、そいつ。こんなだったらアメリカ行くのに飛行機でも買い取れそうなものだけだな。……つか、そいつとは戦うより、むしろ仲良くしといった方が色々と楽しいんじゃない」

「ふざけないでください」

リーネが雑音の軽口をぴしゃりと遮り、ぎらりと睨みつけた。

雑音は慌てて、

「いや、冗談だよ、じょーだん」

と肩をすくめる。そして再びこの邸宅を覗きながら、

「……しかし、『如月ジェック』は本当にここにいるのか？」

「ええ、あの情報屋からの話では間違いないそうです」

「……つつたつて、あいつ、なんだか頼りなさそうだったじゃないか」

「確信はありますよ。つい一時間前に、ここから二キロ離れたところで、タクシーが一台、原因不明の事故を起こしたそうです。運転手は即死。何でも、その事故は見晴らしのいい直線の道路で起こったらしいです」

「……なるほど。つまりこの『如月ジェック』はそのタクシーでここまで移動し、そして口封じのために事故を装ってその運転手を殺した、と。そういうことか」

腕を組み、納得するように顎を縦に振る雑音。

リーネはこくりと頷き、

「とにかく、奴がここに居る可能性が一番高いですし、いるかどうかは入ればわかります　　さあ、行きますよ」

「オーケー」

答えながら、雑音は腰元から短刀を取り出した。そして

スパツ、スパツ

車の突進すら拒絶しそうなほどの太い鋼鉄の扉を、何の気概もなく三つに分断し、さも学校の廊下を歩くような足取りで、すたすたと中へと入っていった。

第十四話「分離」

暗闇の中、庭園のような庭を縦断し、リーネと雑音は敷地の中央に陣取っている白い邸宅の玄関にたどり着いた。

玄関の上部には、古くなっているためか、ちかちかと頼りなく瞬いている電球が一つ。その明かりに照らされて、茶色のドアに施されている鳥や熊の細かい彫刻が浮かび上がる。掃除がなされていないからだろう、所々にほこりが溜まっているが、その造詣自体は崩れていない。これもまた相当な金額がかかっていることが見て取れる装飾だった。

そんなドアの前に立ち、雑音はきよろきよろと周囲を見回して、
「……あれ？ この玄関、インターホンが見当たらないけど？」
「……ワタシ達は遊びに来たんじゃないんです」

リーネは呆れたように答え、そしてそのまま右足を振り上げて、

ドゴンッ

木製のドアを蹴り開けた。

板がちぎれ、中心に通り道ができる。

リーネは何の迷いもなく腰をかがめながらその穴をくぐり、中へと入っていった。

その様を後ろで見ていた雑音は、

「……なんだよ。人のことを狂人呼ばわりしてたくせに。こんな堂々と不法侵入及び器物破損するなんて。僕よりよっぽど肝が据わってるじゃないか」

不満げに呟きながら、同じように扉をくぐった。

中は、外観と同じく白を基調とした造りだった。壁も床も天井も純白のエントランス。広いホールに数え切れないほどの扉が臨んでおり、床には赤い絨毯がしかれている。さらに、入口の目の前には

大階段が構えていて、その上にも扉が一つ。さも、舞踏会でも開かれそうな空間である。

「……あれ」

リーネが何かに気付いたように、二階の扉を見上げながら呟いた。

「……ああ。あれは ぽい ね」

雑音も間を置かずに同意する。

目の前上方に見える白いドア その扉だけが半開きになっていた。まるで招いているかのようにひらひらと、扉が左右に揺れている。

リーネと雑音は一步一步踏みしめるように大階段を登り、そしてその扉の中へ入っていった。

そこは薄暗い部屋だった。

四方は陶器の人形が飾られた棚に囲われていて、あとは白い壁に白い天井、そして紫色の絨毯。白いカーテンが揺れている窓辺から、月光が注いでいる。

そしてその部屋の中心に

一人の男が、無表情で立っている。

黒い短髪で、ほっそりとした長身。その体型もあってか、ぴつしりとした外形の黒いジャケットを着こなしている。細めのパンツをはいているため、よけいに線が細く見える。

「……来たな、東家の女」

男は二人を睨みつけながら言ってきた。

しかしリーネはそれにひるむことなく、

「……アナタは土の精霊、マークリード。……アナタが先鋒というわけですか？ まあ、いいでしょう。先刻は、ユネアをやってくれたようです。借りは返させていただきます」

「ふん、振り返ちにしてくれる　　と言いたいところだが、残念ながら、私にはお前の相手をしている暇はない」

「……どういことですか？」

マークリドを見据えながら、リーネは聞き返す。

しかしマークリドは、それを無視するかのように視線を横に滑らせ、

「……そっちの男。一応初対面ではあるが、先ほど門を切り裂いたところをカメラで見させてもらった。その手際から、貴様の実力の程も確認はできているが　　しかし、その際にお前が取り出した短刀。そこから、貴様の正体もわかつている」

「僕の、正体？」

雑音はおどけるように肩をすくめた。

しかしマークリドはそれに構わず、依然睨みつけるような眼光のまま、

「　　ようこそ、『殺し屋殺しの藁人形』」

断言。あるいは、断罪。

その言葉尻には一切のぶれもなかった。

雑音はぴくりと眉をひそめて、

「……へえ、なんと、まあ」

口をゆがめながら呟く。

「その口ぶり、よほど確信があるようだね」

「当たり前だ。……ふん、どうも、我々の予想よりも貴様は少々若いようだ、まあ、主と似たような能力を用いれば不可能ではないだろう。考慮に値しない問題だ。私は確信している。貴様こそが『

藁人形』　　そして、我が主の宿敵であると」

「……へ？　何だい、その言い方は？　『宿敵』って………つまり、僕は『如月ジエック』って奴に恨まれてるってこと？」

「そつだ。……おい、何だ、貴様、その呆けた面は？　我が主につ

いて、貴様もその東家の女から聞いているのではないか？　なのに、何も思い出さないと？　……………貴様、まさか主のことを覚えていないとでも言うのか？　記憶にないとでも言うのか？　……………おのね、なんと屈辱的な」

マークリードは苦々しげに雑音を睨みつけ、齒軋りをする。しかし、すぐに表情を平静に戻し、

「……………いや、まあ、いい。それもまた、考慮に値しない問題だ。主と対面すれば、外見は変わっていても、貴様も思い出すはず。そして殺されれば、否がおうにも後悔するはず。何も問題はない。

私は式神として、私の責務を果たそう。私の責務　　貴様を半殺しで主の元に連れて行かねば。……………さあ、来い、『藁人形』！」

「　　ちょ、ちょっと待ってください！」

二人のやり取りを傍観していたリーネが、慌てて話に割って入った。

「あ、あなたが小林さんの相手をするですって？　な、なんですか、その、ワタシをのけ者にするような振る舞いは。言っておきますが、如月ジェックに用があるのは、彼ではなく　　」

「ふん。『のけ者にするような』も何も、『のけ者』にしているのだ、東家の女。先刻の勝負で、我々と貴様の實力差は歴然だっただろう。貴様は所詮、敗者だ。『藁人形』を目の前にして、貴様などに構っている暇も隙もない。私の後ろに、主がお休みになってる本宅へ続く道がある。勝手に行き、勝手に殺されるがよい。誰も止めはしない」

「……………！」

瞬間、リーネの中に激情がほとばしる。色白の顔面がさらに蒼白になる。

六年追いかけてきた仇に、母親の仇に、ここまで軽んじられるとは。ここまで甘く見られるとは。ここまでなめられるとは。ここまですでに許されるとは。ここまで無関心を貫かれるとは。

体が震えるほどに、体内が熱くなる。

全身がわななく。

今にも飛び出しそうになる。

しかし、

ワタシの目的はあくまで如月ジェック。奴を人間界から排除すること。こちらとしても、この土の精霊にかまけている場合ではない。間を置けば、肝心の如月ジェックに逃げられてしまう可能性もある。ならば、ここは我慢するが最善

リーネはぎりつと唇を噛み、

「……そ、そうですか。で、では、小林さん。そういうことなら、ワタシは先に行ってます。ここは、よろしく、お願いします」

「わかった、まあ、僕もすぐ行くよ」

何ともなさそうに答える雑音。

リーネはなおも唇を噛みしめ　そして唇から一筋の血を垂らしながら　無言でマークリードの横を通り過ぎると、その奥の扉から部屋を出て行った。

第十五話「藁人形VS土の精霊」

リーネが部屋を出ていき、刹那の間、部屋に静寂が訪れる。互いが互いに睨み合い、膠着し、相手の出方を覗くような空気が流れる。レースのカーテンがサラサラと揺れる音だけが室内に響いている。

と、ふいに雑音は表情を崩して、ふっと笑みをこぼし、

「……しかし、あんた、ユネアを倒したんだって？ ふふふ。なかなかやるもんじゃないか」

あくまで揶揄などではなく、称えるような口調で言った。

それに対し、マークリードはいぶかしむように口元を曲げながら、
「……何だ、その口ぶりは？ まるで、貴様もユネアの実力を知っているようなものの言い方ではないか」

「ああ、知ってるさ。戦ったこともある。……強かったなあ、あいつ。僕も辛勝だったもんだ」

「……ふん」

マークリードはまるで興味がなさそうに、鼻で笑うように答えた
しかし、内心、マークリードは至極納得していた。今の、

「『藁人形』はユネアに辛勝だった」という言及　つまり、ユネアとこの『藁人形』の実力はほぼ互角ということだろう。それだけ、こいつも強敵だということに他ならないが。………ただ一つ言えるのは、主の読みが正しかったということだ。

やはり、こいつは強者。

気を引き締めてかからんと。

マークリードは気を入れ直すように、体勢をさらに深くして構え直した。

雑音はじりじりと間合いを測るように足を前に滑らせながら、
「……しかし、リーネさんを先に行かせてくれて感謝してるよ。あんたみたいのとは、やっぱり一対一^{さし}でやるに限るからね」

「さし？　貴様、今、一対一^{さし}と言ったのか？」

「……………？ ああ、言ったけど。……………そりやそうだろう？ だって、この部屋にやあ、僕とお前しかいないじゃないか。誰が見たって、一対一さし以外の何ものでもない」

「
𐎶𐎵
𐎶𐎵、

𐎶𐎵
𐎶𐎵
𐎶𐎵
𐎶𐎵、

𐎶𐎵
𐎶𐎵
𐎶𐎵
𐎶𐎵
𐎶𐎵
𐎶𐎵
𐎶𐎵」

雑音の返答を聞くや否や、頬をぐにやりと歪め、こらえきれないように笑い出すマークリッド。

[illegible]

静穏の中、ひとしきり続く、マークリードの高笑い。

雑音は呆気にとられるように、意味がわからないかのように、大口を開けて笑うマークリッドを立ちすくんで眺めている。

しかし、その背後

וְהָיָה כִּי יִשְׁמַע ה' אֶת הַקּוֹל וְהָיָה

不気味な低音が、微かに聞こえてくる。

הַעֲלֵנוּ, הַעֲלֵנוּ, הַעֲלֵנוּ

まるで石を滑らすかのような、鈍く重い響き。少しずつ、少しずつ、次第に、次第に、その音は大きくなってくる。雑音の方へと近づいてくる。そして音量がようやくマークリードの笑い声を越したところで、

┌
⋮
└

雑音はぴくりと、背後を振り返った。

そこには木製の戸棚に飾られている、人の形を抽象的に模った、数十個あまりの土偶の人形。それらの造詣は繊細であり、この邸宅の一室に飾られていても何の違和感もないほどの高級感を出してい

る。しかし　薄暗い部屋の中、浮かび上がる茶色や黒の色合いは、不気味に異彩を放っていた。そしてさらに

ごとり、ごとり

揺れるように、引きずるように、それら数十個の人形が動いている。さも自分の意思を持っているかのように、雑音の方を直視し、雑音の方に向かって、這いずるように移動している。

「はははははははは……。ふふ、貴様もやつと気付いたか。この部屋にいるのは、残念ながら、貴様と私の二人だけではないということに！」

唇で弧を描く勝ち誇った笑みで、マークリドは雑音を見据えた。「私は土の精霊。ならば、土でできたものを操ることは出来て当然。それがたとえ、人形であろうとな」

必死に笑いを堪えようとしながら、マークリドは言を続ける。「私がこの部屋で待機していたのは、別にここが中継位置として最適だったからではない。こここそが、私の能力を存分に発揮できる環境だったからだ。私にとって好都合だったからだ。……しかし、見損なったぞ。『藁人形』。よもや、この程度のトラップに引つかろうとは、な。ふん主も貴様を過大評価しすぎていたものだ。……それとも、貴様は十四年前の『藁人形』とは別人だとかいうオチではあるまいな？」

言いながら、マークリドは半ば興ざめたかのような表情になった。

「……まあ、いい。とにかく主の指令を実行すればそれで。貴様に期待していたのは事実だがな。しかし、私にとっては考慮に値しない問題だ。……さあ、とつとと貴様を半殺しにして、主の元に引きずる」

パライイイイインッ

突如、甲高い音が部屋中に響く。

マークリードは直ちに緊張を張り巡らせ、雑音を見据えた

しかし、雑音はただその場に立っているのみ。何の変化もない。

何の動きも見られない。

……では、今の音の源は？

マークリードは心内いくらか混乱しながら、視線を横に動かし、自身が動かした人形群を見やる

すると、一つ、上半身が碎

けたものが。

マークリードは目を見開き、頬に一筋の冷や汗を垂らす。

……な、何だ、これは？ なぜ一つ壊れている？ 操作を誤った覚えなどない。そんなはずはない。な、なぜ、人形が勝手に壊れ

パライイイン、パライイイイン

パリッ、パリッ、パリッ、パリッ、パリッ、パリッ、パリッ、
パライイイイン

堰を切ったように、連発していく高音。同時に、マークリードが凝視する中、雑音の後方の人形が一つずつ、一つずつ、破裂するかのようには壊れていく。

パリッ、パリッ、パリッ、パリッ、パリッ、パリッ、パリッ、
パリッ、パリッ、パリッ、パリッ、パリッ、パリッ、パ
ライイイン

そして、二十五個目の音が響いた後、それ以上音は続かなくなり、
そして 棚の上の人形が、すべて、粉末へと還る。

想像だにしない事象に、驚愕に苛まれるマークリード。

その表情に相対していた雑音は、やれやれと言うように肩を竦めながら、

「……あんだ、一体何を言ってるんだい？ 言っただろう？ これは僕とあんだの、一対一さしの勝負だって。見てみなよ。この部屋には

僕とあんだ以外、誰もいないじゃないか？」

傍聴者を見下すかのような雑音の声音。

この発言で、マークリードはようやく思い至る この土偶の破壊が、『藁人形』の仕業であると。『藁人形』によって壊されたのだと。

次いで、考える。

今、『藁人形』は動いた様は見られなかった。動いたようには見えなかった。つまりは、この土偶の破壊は、奴の特殊能力によるものであるとしか考えられない。『藁人形』の特殊能力。……いや、『藁人形』はあくまで人間だ。東家の者のような人間に毛が生えた程度の能力ならともかく、自分を驚愕させるほどの特殊能力を有しているはずなどない。確実に、この現象は他者の介入 すなわち、式神の能力だ。

式神、式神、式神、『藁人形』の式神

どこだ？ どこだ？ どこにいる？

マークリードは集中力を高め、周囲の気配を探り始める。

と、雑音の背後、彼の影になっているところの一つ、大きな黒い塊を察知。

「そこだあ！」

マークリードは反射的にその方向へ手をかざし、能力を発動させた。

部屋の隅々の砂埃が舞い上がり、流れ、動き、密集し、その大きな黒い塊を瞬時に半球型に覆い包む。その黒い塊は驚いたようにその覆いに体をぶつけるが、壁に拒絶される。

マークリードは眼を凝らし、その黒い塊を瞳に映す。

それは幅が一メートル以上ある、黒い羽毛に包まれ、暗黒色のくちばしを有した

一匹の、カラス。

「おおおい！ な、なんじゃこりやあああ！」

そのカラスはくちばしを大きく開きながら、日本語を発音した。

「ちょ、おい、何だこれ！ 出られねえぞ！ な、もう、まったく！ 俺は子飼いの鳥じゃねえってのに！ カラスを鳥かごに入れるなんて聞いたことねえよ！」

羽根をばたつかせ、わめきちらすカラス。じろりと、その鳥目を雑音の方に向け、

「おい！ 小僧！ どうしてくれんだ！ 深夜の遠足だつて言うからついてきたら、とんだとばつちりだあ！ こんな窮屈なところに押し込まれて！ このままじゃ、下手すりゃ焼鳥にされちまうじゃねえか！ どう責任とるつもりだあ！」

「まー、まー、落ち着いてよ、ストロウ」

雑音は首を傾け、はにかむようになだめるように言い聞かせる。

「それは、ただの囲いだろ？ 囲われただけじゃないか。特に危害もなさそうだし、少しの間待っててくれれば」

「ふん、甘いな、『藁人形』」

雑音のストロウへの釈明を、マークリッドが遮った。

「それはただの物理的な囲いではない。式神の能力も封じるシールドだ。その式神がどんな能力を有しているのかは知らないが、どうであれ、すべからく私と貴様の勝負への介入は不可能になった。これで、『殺し屋殺しの藁人形』、貴様はもはや丸裸だ。ただの生身の人間に過ぎない。短刀を扱う以外に何の能力もない。これで勝負は決まりだ。貴様に勝ち目はない。……ふん、結局のところ、やはり勝負は簡単についたな。まあ、いい。つまらないなどという不満も言つまいよ。考慮に値しない問題だ。さあ、『藁人形』、これか

らゆっくり半殺しに」

しかし、マークリードはその次の句を告げることはできなかった。

再度、マークリードの顔は驚きの表情に固まる。それもまた至極当然。いつの間にか

眼前で、小林雑音が微笑を浮かべ立っていた。

「うえ？」

マークリードは間の抜けた声を上げる。

こ、これは………しゅ、瞬間移動？ 高速移動？ え？
そ、そんな、なぜ？ え？ だ、だって、式神は封じて………え
？ 何で？ どうし

マークリードがそんな思考を巡らせる中、目の前の雑音は、左手を上着のポケットに突っ込んだまま、右手に握った短刀を頭上に振り上げる。

そしてそのまま、ぶれもなく、淀みもなく、その刃を斜めに振り下ろす。

マークリードの胴を横薙ぎに貫通する刃渡り。

切っ先が通り過ぎた瞬間、マークリードの体は砂のようにぼろぼろと崩れていき、その欠片が床の上のジャケットの上にこぼれていく。程なく、すべからず、何の意味も持たない無機物へと成り代わる。

「一体、藁人形の能力とはいかなるものか？」

マークリードが人間界で最後に残した疑問 そして、これ
に対する解答。

「そうか、特殊能力など関係なく、ただ単に、比較しようもな

く、『藁人形』が強すぎたという、それだけのことなのか」
マークリッドがようやくこの 真実 に思い至ったのは、
自身が精霊界に返された後のことだった。

第十六話「吊り橋」

リーネは、いつの間にか洞窟の中を走っていた。

マークリードがいた部屋を出て、三つほど扉をくぐり、一直線の道を駆け続ける最中、気がつく足元は固い土になっていた。さらに、天井と左右の壁も頑強そうな岩へと成り変わっていたのである。

ここまでずっと一直線。

道を間違えたはずもない。

数メートルおきに天井からぶらさがっている電球が道の先を照らしているが、その到達点はまだまだ見えない。ただただ真っ直ぐ、この洞窟が続いている。

そういえば、あの白い邸宅の裏には小高い山があった。

つまり、自分は今その山の中を突っ切っているということなのだ。あの土の精霊は心底自分に興味がなさそうな顔と声音をしていた。完全に『藁人形』へと興味が移っていた。あの状況から、わざわざ自分に嘘の情報を与え、罠にはめてきたとも考えにくい。

だから、進行方向はこれで間違いないはずだが……………。

ぎりりと、リーネは再び唇を噛んだ。

あの土の精霊、マークリード。至極どうでもよさそうに、ぞんざいに自分にこの道を示してきた。最終的には、視線すら合わせなくなっていた。もはや自分は意識の外側に置かれていた。

ワタシの生涯をかけた宿敵の一人。

本当は、ワタシ自身が粛清したかったのに。

だが、やはり、しょうがない。奴が言ったことはすべて真実なのだ。ワタシは所詮敗者。ワタシは所詮負け犬。ワタシには、奴を打ち負かす腕などありはしない。

そして、今目指している如月ジェックについても、同じなのだ。先刻の勝負で、ワタシでは奴の相手にならないことは自明だった。いくら奴の能力が分かったとは言え、何度やっても勝てるはずもな

いだろう。それは明らかだ。

結局、奴に勝つためには

他力本願。

如月ジエックが逃げないようワタシが足止めしておいて、小林雑音が追いついてきた後に、奴を戦闘不能に陥れてもらう。そして、最後にワタシが止めをさす。

それしか、勝つ手段がない。

なんて、他力本願。

ワタシ自身の仇であるはずなのに。

表情を一層険しくし、血の味を噛みしめながら、リーネは走り続ける。

……しかし、そういう状況にするには、一つ前提条件がある。すなわち、小林雑音が土の精霊に勝つ、という条件が。

小林雑音は、あのユネアに圧勝した人物。実力は折り紙つき

しかし、マークリードもまたユネアに勝利した精霊なのだ。もしかしたら、二人の実力は拮抗しているのかもしれない。

ユネアを瞬殺したにもかかわらず、雑音が漏らした「辛勝だった」という発言。相変わらず冗談にしか聞こえないが、しかし、ある意味真実ではないかとも思われる。

戦闘開始わずか五秒で勝負がついた。

逆に言えば、僅か五秒で雑音は勝負に出た、ということでもある。小林雑音は、『藁人形』は、ユネアに能力を発揮する機会を与えなかった。相手の能力を見て、それに対応するという方針をとらなかった。最初から全力でぶつかったということ。

もしかしたら、雑音はそれだけユネアを危険視していたのかもしれない。

もしあの土の精霊がユネアと同等の実力だとしたら、やはり小林雑音は、奴の能力を発揮させるチャンスなど与えはしないだろう。藁人形と土の精霊。最初から全力の勝負が行われているだろう。そんな勝負の中、果たして小林雑音は勝てるのだろうか？ 生きてあの部屋を通り抜けることができるのだろうか？

リーネはそんな疑問と不安を抱えながら、それでも前だけを向いて必死に走り続けている。もつとも、この不安がこの時すでに意味のないものになっていることなど、リーネは知る由もないが。

そして、このリーネの現状把握と今後の指針決定が終わった頃、

ようやく一本道の先が開けてきた。

そこから、ごうごうという低い轟音が聞こえてくる。

その音をいぶかしみながらリーネがその出口にたどり着くと

眼下には、険しい崖。光度の弱い電球に照らされたその底では、激しい潮流が渦を巻き、白い水しぶきが上がっている。

これは激流の川。

そうか、ここは二つの洞窟の交差点なのだ。

ワタシが進んできた道程と垂直に、水が流れる別の洞窟があったのだ。そして、ここで直行しているのだ。

目を凝らせば、前方に対岸が見える。そこには、さらに先へと進む道がある。しかし、それは数十メートルも先。とても跳んでは渡れない。

ふと、視線を横にずらすと、一つの吊り橋が目に入った。

なるほど、一応道は繋がっているんですね。

しかし、その橋は幅が一メートルもない至極小さいもの。おまけに、ただの縄で吊られていて、その作りは至極頼りない。谷底から吹き上がっている気流で、ぎしぎしと横に揺れている。

まあ、今さらこの程度のことでは怖がることもないでしょう。

リーネは躊躇なくこの橋に足をかけた。そして、大きく揺さぶられる足元に時折バランスを崩しながらも、黙々と川の上を進んでいく。

と、

リーネは、対岸に一つの影を見とめた。

頼りない光源の下にいるその人影は、のっぺりした顔の上に薄ら笑いを浮かべている。赤いベースボールキャップに、黒いパーカーを着た、茶髪の少年。

如月ジエック。

「……………！」

リーネは目を見開き、その少年を凝視。次瞬、もはや考える間もなく、反射的に、前方へと駆け出していた。揺れる足場をもともせず、ポケットから形見の短刀を取り出し、構え、如月ジエックとの距離を詰めていく。

しかし、吊り橋のちょうど半分に差し掛かったところで、

ぐらり

「へ……………？」

急に、踏みしめていた足元の反発がなくなり、リーネは体勢を崩す。驚き、困惑し、リーネは左右の吊り橋を見た。見ると橋を釣っている左右のロープが、そこでぷつりと切れている。

張力を失い、垂れていく吊り橋。

またもリーネを襲う、数時間前に味わったばかりの浮遊感。ごうごうと鳴り響く反響音の中、

リーネの体は、真下へと落下を始める。

第十七話「再落下」

リーネは、どうにかロープの端を握り締めた。

しかし、落下は止められない。振り子が返るように、リーネは弧を描きながら、崖の向こう岸に到った。

目の前に見えるロープの切れ端。そこは刃物で切ったかのような、綺麗な切り口だった。しかし、吊り橋が分断を始めた瞬間、刃物がロープを貫通した様子は見られなかったはず。これは、一体なぜ

そうか！

リーネは刹那で考え到る。これもまた、如月ジェックの能力によるものであることに。つまり、ロープをナイフか何かで切っておいて、そこに『時間停止』をかけておく。そして標的がその部分を通りかかった瞬間、その能力を解く。すると、タイミングよく吊り橋の崩壊が始まるのだ。

ようは、ワタシが如月ジェックの罠にまんまとはめられたということ。

無念を噛みしめ、ぎりぎりど歯軋りをするリーネ。握り締めたロープで全体重を支えながら視線を上へと向けると、数十メートル先、如月ジェックが崖の端から身を乗り出して、こちらをのぞきこんでいた。

「くくつ、やはり生きていたか。東の者」

如月ジェックは薄ら笑いのまま、水の音よりわずかに大きい程度の声で言ってくる。

「やっぱりしつこいなあ、お前らは。ほんとと呆れるよ、まったく……。あの状況で、あんたが一体どんな手段でもって生きながらえたのか、少しばかり興味はあるけどね。……それに、どうやってこの場所を突き止めたのかも、ね。この根城は、結構気を使って隠蔽してたはずんだけど。相当キレる情報屋でもバックにいるのか？」

「……き、如月、ジェック」

如月ジェツクの声を目に通しながら、しかしリーネはそう呟くだけで精一杯だった。右手の握力だけで体全体を支えている現在の状況。手の平が摩擦で熱く、痛くなってきている。おまけに腕も痺れ、ふるふると震えている。

「まあいいや。とにかく結果は変わらない。それに、今の俺はお前なんかには構ってて場合じゃないしね。結構ヤバいんだ」

「……ヤバい？ って、それは、どういう……」

「とにかく、話はお終いだ。さあ、さっさと召されてくれ、哀れな小娘」

吐き散らすように言うと、如月ジェツクは腰元からナイフを取り出し、足元の吊り橋の縄の端を一刀両断にする。

がくりっ

急に手ごたえがなくなる、縄を握っているリーネの右手。リーネが真上を見上げる中、如月ジェツクの顔がどんどん、どんどん遠ざかっていく。

ここは、完全なる敵の本拠地。
味方などいるはずもない。

あの部屋からここまで、それなりの距離があった。

小林雑音が間に合って助けてくれる可能性なんてありえない。

これは、完全に敗北の確定。

そして、死の確定。

下の水は冷たいだろうか？

川の中で溺れ死ぬというのは、苦しいだろうか？

それとも、水に到る前に気を失えば、あるいは楽に……。

……ああ、ああ。

何がいけなかったんだろう？

何が悪かったんだろう？

ワタシは何を間違えたんだろう？

何でこんな惨めな結末なんだろう？

ワタシが弱かっただけなんだろうか？

恐らく、そうなんだろう。
それだけのことなんだろう。
後悔する気にもならない。
そんな資格すらない。
惨め過ぎて。
弱すぎて。

と、突然、

ガクンッ

リーネの右肩に激痛が走る。骨が外れたのかとさえ思った。
そして、周囲を見、気付き、驚く。なぜか、自身の落下が
止まっていることに。

リーネは茫然自失しながら、自分の右腕が何かに握られている感
覚に気付いた。

見上げると、自分の手首をしっかりと握り締めている、色白の手。
その手は、眼前の岩肌にぽっかりと開いた空洞から、するりと伸
びていた。

リーネはその手をたどり、その腕の所有者たる人物を目の当たり
にする。

リーネの高校の男子制服。耳が隠れる茶髪に、色白のハーフ顔。
雑誌の表紙を彩っても何ら違和感のない、爽やかな微笑を浮かべた
先輩。

「やれやれ、君は落ちるのが趣味なのかい、お嬢さん？」
シニョリーナ

ESP部現部長

藤沢亮介。

第十八話「時間」

リーネはほどなく引き上げられた。

ようやく地に足が付き安心する間もなく、リーネは地面にへたりこみながら、傍らに立っている藤沢を見上げ、

「……ふ、藤沢、先輩？ な、なんで」

息も絶え絶えに問いかける。

「何で、ここに……こんなところに、いるんですか？ こ、ここは、如月ジェックの私有地………な、なのに、何で、わ、わけがわからな………ど、どう、どうしてここに、来たの、ですか？ 来ることが、できた、んですか？」

混乱したまま、口についたままの疑問を並べるリーネ。

それに対して、藤沢は 再度、人差し指を唇に当て、シークレットのジェスチャーをする。

「ふふ。約束しただろう？ 俺について何も聞かないって。その代わりに、このことについての感謝はしなくていいから、さ。……いや、一応、俺には何も言わなくていいから、坂巻君には一言『ありがとうございます』って言うておいて欲しいかな。……坂巻君つて、わかるかい？ うちの部の副部長なんだけど。今日俺をここにけしかけたのは、他でもない、彼なんだ」

「……え？ そ、そうなんですか？」

「そうさ。夜だつてのにいきなりうちを訪ねてきて、すごい剣幕でここに行けつて言ってきたね。そりゃあ、俺も驚いたよ。……ただ、俺としても彼と週末遊びに行く約束を取り付けられたから、正直気分としてはイーブンつてところかな。その時の坂巻君つてば、やたら俺をいぶかしんできたけど、まあ、約束さえ取り付ければこつちのものさ。あとは楽しむだけだ」

「……は、はあ」

リーネは気の抜けた相槌を打つ。

今さら、別な疑問ができてしまった　　その坂巻先輩とは、
一体どういう人物なのか？　そしてまた、その人はなぜここに藤沢
先輩をよこしてきたのか？

推測だけでは解答を出せない疑問であるが………しかし、やは
りそれも聞いてはならない質問なのだろう。聞いても答えてくれな
いのは明らかだ。ここは敵地。今はまだ、そんな疑問より優先する
項目がある。リーネは口を開きそうになりながらも、質問を思いと
どまった。

そんなリーネの目の前、藤沢は一步を前に踏み出しながら、

「さ、行こうか」

「……へ？　行く？　って、どこへ……」

「君の行くべき場所さ」

言いながら、微笑んでウイंकをしてくる藤沢。

リーネはぽかんと口を開けながら、

「……はあ」

と、答えた。

「ところでさ、リーネさん」

懐中電灯しか光源がない、先刻よりいくらか狭い洞穴の中。数時
間前と同じようにリーネの数歩前を歩く藤沢は、しがない話題を振
るようにリーネに話しかけてきた。

「君は、ゲームとかするかい？」

「ゲームって、ビデオゲームの類ですか？　……いえ、しません」

リーネは少々戸惑いながら答えた　　と言っても、リーネが
戸惑ったのは、藤沢の質問に対してではなかった。目の前をずんず
ん進む藤沢の足取りがやけに勝手知ったる物だったので、少しばか
り気後れしていたのである。

先ほどからいくつか分かれ道があったが、藤沢は何の迷いもなく
道を選んでいた。なぜこの道を難なく進めるのか、リーネにとって

不可解以外の何ものでもなかったが、命の恩人がその直後にわざわざ巽にかける理由も見当たらなかったのも、無為に突っかかりはしなかった。

とりあえずのところは信用しておきましょう という結論

と共に、リーネは話題を続けて、

「……そうですね。ゲームといえば、日本は最先端の国ですからね。折角日本に来たのですし、機会があればとは思ってるのですが」

「じゃあ、マンガは読む？」

「それも日本のカルチャーですね。……いえ、それも、あんまりです。一応、マイラバーの好きな格闘マンガは一通り読んだのですが、それだけです」

「そっか。残念だな」

藤沢は微笑に苦笑いを混ぜながら答える。

「……まあ、しょうがない。それはそれとして、話題を続けさせてもらうけど そういうゲームとかマンガに出てくるラスボス

つまり最後の黒幕ってのは、よく あるものをコントロールする能力をもってるものなんだ」

「……あるもの、ですか？」

「ああ、コントロールされると他にないくらい厄介なもの」

「厄介な？ えーと………すいません、予測も立たないのですが」

「ふふ。それはね 『時間』だよ」

その一言に、リーネはびっくりと反応する。

時間。時間のコントロール。今まさに、リーネが相対している敵の能力だ。今現在頭を悩ませているものだ。このタイミングでその単語が出てくるなんて、一体……。

しかし、藤沢はそんなリーネの表情の変化に気付くことなく、
「時間制御。……まあ、確かに、この世に存在する森羅万象の概念の中で、これほど絶対的な制御対象はないよね。過去を改ざんして自らの失敗をすべてなかったことにする。あるいは、未来のすべてを知ってすべての解答を知ってしまう。そんなことができれば、す

べての事象を思いのままにすることができからね。敵の黒幕の能力としてはこれ以上ないものだろう」

「そ、それはそうですが、しかし、藤沢先輩。何でいきなりそんな『時間』なんて話を？」

このタイミングでそんな話題を振ってくるなんて、この先輩はもしかしてこちらの事情を知っているのではないか？ あるいは、何かしら如月ジエックと繋がりがあるんじゃないか？ そんな疑いを隠し切れずに、リーネは疑問をぶつける。

しかし藤沢は、相変わらずのスマイルのまま、

「いや、毎度毎度突拍子のない話題運びで申し訳ない。この『時間』っていうのは、何というか……俺が一番興味のある概念なんだ。時の流れとは何なのか、その原理はどんなものなのか、空間と時間には次元軸としてどれだけの違いがあるのか。これらの難題っていうのは、何ていうのかな……これから俺が一生をかけて調べていかなくちゃならない宿敵みたいなものなのさ」

「……宿敵、ですか」

呟きながら、リーネは分かったような理解しきれてないような気分に分けられる。つまり、彼は時間の原理について人一倍興味があり、今後もその研究をしていこうと考えているということ？ 確かに、ESP部なんてSFチックな部活に入っていることから考えて、なくもない話だが……。

「で、リーネさん、ここで一つ問題を出したいんだけどさ。そういうゲームやマンガの敵は、そんな便利な『時間制御』なんて能力を使ってくるにも関わらず、結局最後には主人公に負けちゃうんだ。

これは何でだと思う？」

「え？ そ、それは……そうしないとストーリーが成り立たないからじゃないですか？ どんな物語でも、基本的には、やっぱり主人公が勝たなくちゃ」

「いや、それはそうなんだけど……そうじゃなくて、『時間制御』できるキャラが、そうではないキャラに負ける要因は何なのか

つてこと。彼らには一体どういう落ち度があるんだと思う？」

「そ、それは……」

リーネは考える。ゲームもマンガもあまり嗜まないのだから、推測で考えるしかないが。しかし以前観たSF映画でも同じようなものがあつた気がする。それらの作品で、敵の敗北の原因になつていたものは、大抵

「コントロールの限界」

「そうっ」

指をぱちんとならし、嬉しそうな顔で振り返ってくる藤沢。

「そうなんだ。敵の黒幕の『時間制御』も、大抵は完璧じゃないんだ。コントロールレンジや使用可能頻度が限定されていて、万能じゃない。どんなに強くても、限界があるのさ。そういう限界がなきゃストーリーが成り立たないっていう、逆説でもあるとは思っけど」

「……はあ」

「身も蓋もない理屈として、『この世で時間逆行は未来永劫不可能である。なぜなら、我々は未来から時間を遡ってきた人間に遭っていないから』っていうのがあるけどね。でも、こういう突拍子もない考え方も、時によっては捨てたもんじゃないとも思うよ。この場合も当てはまる。言ってしまうえば、『時間制御は限界がある。なぜなら、敵対勢力が存在するから』ってね」

藤沢はただの世間話のように、つらつらと言葉を重ねている。

しかし後方を歩くリーネは、それを聞きながら、段々、段々と悩みが解かれていくのを感じていた。

「つまり『時間制御』が完璧ならば、その敵対勢力はすべてなかったことにされてるはず。悪に立ち向かう主人公なんて生まれるはずがない。主人公が存在する時点で、『時間制御』は完璧じゃないってことさ」

敵が存在する時点で、『時間制御』は完璧ではない。

「ゲームやマンガの主人公も、ようはそこに付け込んで勝利するわけさ。そこに敵の弱点があるってこと」

能力の限界。そこに弱点が……

「……ふふふ。果たして、俺の時間制御の限界はどこにあるのか、そこからどんな物理的理論が導かれるのか、そこにこそ今の俺の興味はあるんだけど
 って、おっと、ようやく着いたね」
 急に立ち止まる藤沢。

リーネははつと熟考から我に歸つて、前を向いた。目の中には、大きな木造の扉が一つ。さらに、今来た道とは直角に別の空洞が繋がっていた。その洞窟の大きさは、橋を渡る前のものと同程度。つまり、あの吊り橋を無事渡りきつていればここに繋がつていたということだろうか？　ここで二つのルートがぶつかっているということだろう。

「さあ、俺の付き添いはここまでだ。これからは、君一人のステージになる。じゃあ、気をつけてね」

「……はい、ありがとうございます」

この扉の向こうに如月ジェックがいることを確信しながら、リーネは扉を開く。そしてその中へと足を踏み出していった。

その後ろ姿を見送った藤沢は、冗談めかした微笑で、胸に手を当て、深く腰を落として、

「……いつてらっしゃい、お嬢様」
シニヨリーナ

第十九話「策」

藤沢と別れ、二つ目の扉を開いた後、リーネがたどり着いたのは洋風のリビングだった。

マークリードと合間見えた部屋と同様、白い壁に絨毯の敷かれた床という造りだったが、そこよりもさらに広い。壁際には彩りの豊かな皿が飾られた棚があり、部屋の隅には豪華なテーブルが置かれている。天井の中心からはシャンデリアがぶら下がっている。リーネをしても、映画などでしか見たことがないような内装である。

如月ジェックは、戸棚を漁っていた。

肩越しに彼が取り出しているものが見えるが、それはハンカチであつたり、財布であつたり、常備薬であつたり。そのような小物を肩に掛けたジェックのカバンに入れている。これから外出をする身支度をしているようにしか見えなかった。

ふと、如月ジェックはリーネに気付いたように、首だけ振り返つてきた。そして世間話でもするような語調で、

「やあ、来たのか。東の者」

そう言いながら、カバンを棚の上に置く。

「やれやれ……。ここまでしつこいと、呆れるというか、吐き気が出てくるね。……大体、なんだい、君をここまで連れてきたあの男は？ やけにタイミングよく登場するし、あの地下道の迷路をすいすい進んでいくし。まったくわけがわからない。カメラ越しに見る分には、ただの素人にしか見えなかったけど。……あいつあ、一体何者なんだ？」

「さあ？」

リーネは肩をすくめた。

「高校の先輩ですが、それ以外は何も。……むしろこっちが聞いたいくらいです」

「なんじゃそりゃ」

ジェックは頬を引きつらせ、苦笑を造る。

「……まあ、いいや。そっちの用件はわかってるし、さつさと初めで、さつさと終わらせよう。結局、俺ともう一度殺し合いをしたいってだけなんだろう？」

「ええ、もちろんです。しかし……ふん、やけに切り替えが早いですね。自分のトラップが失敗に終わったばかりだというのに」

「……………失敗？」

ジェックはきょとんとした表情になり、首をかしげる。そして眉間にしわを寄せ考えるような顔になった後、「……………ああっ」と表情を和らげて、

「あの吊り橋のトラップのことを言ってるのかい？ そりゃまあ、確かにお前が生きながらえたのは誤算だったし、それはそれで失敗ではあったけれど。でもな、思い上がるな」

ジェックの瞳にぎらりと侮蔑の光が宿る。

「お前を殺すのはついでさ、つ・い・で。俺がわざわざ洞窟くんだりをあそこまで行ったメインの目的はそれじゃない。あれの目的は別にある」

「……………別？」

「そうだ。あれはな、『藁人形』をここに来させないためのものさ」

ジェックの苦々しげな発言。

それを聞き、リーネは引っかかりを覚える。来させないた

め？ いや、それはおかしい。さっきの土の精霊の言い方からして、『藁人形』を待ち望んでいたのはこの如月ジェックのはず。彼との対面はこの男の望みだったはずなのに。……………そう言えば、今の如月ジェックは、出掛ける準備をしていたし。これは、まるで

「まるで、『藁人形』から逃げるような物言いですね」

ジェックの額にぴくりとシワが寄る。

「なぜですか？ あの土の精霊の話では、あなたは『藁人形』を宿敵と目していたのではないですか？ 彼を恨んでいるのではないで

すか？ 彼を殺すことを目的としていたのではないですか？ 恐らく、あなたが今回日本に来たのも、彼を殺すためだったのでしょうか？ それを、なんで、今さら、逃げるって……」

「……事情が変わったんだよ」

如月ジェックは吐き捨てるように言う。

「俺の見込み違い。それだけだ。それだけの話だ。……つたく、あそこまでは。思いもなかった。あんなのに勝てるわけがねえ。ヤバいつて。ヤバすぎる。ヤバいにもほどがある……」

愚痴をこぼすような如月ジェック。

これを聞き、リーネは何となく事情が読めてきた。つまり、小林雑音が土の精霊の勝ったということだ。それも、圧倒的な力量差で。それをカメラか何かで見たこの如月ジェックは、『藁人形』の評価を改めたのだ。そして焦っているのだ。

「だから、俺はさっさとお前を殺して逃げなきゃなんねえ。時間がないんだよ。ほれ、さっさとかかってこいよ。秒殺してやるから」人差し指を動かして挑発してくるジェック。もはや構えることもせず、片手間で終わらせるような雰囲気である。

それを見て、リーネは思う。確かに、ワタシはここまで軽んじられても仕方がない。先刻の勝負はその程度のもだった。この男にかすり傷すらつけられなかった。ついさっきまでは、小林雑音の到着までの時間稼ぎしか考えられなかったくらいなのだ。

しかし

しかし、今は違う。きちんと自分の手で終わらせるつもりだ。私自身でこの男に勝つつもりだ。小林雑音がここにたどり着けないなら、なおさらだ。

「……いざ」

低い声で呟きながら、リーネはスカートのポケットから短刀を取り出す。

その短刀を目にしたジェックは、
「おや？」

意外そうな表情になる。

「……なんだ？ そりゃあ、さっきビルの屋上で見たのと同じ短刀だけど、でも、さっきはそれに何か術がかかってなかったっけ？ 『能力封印』みたいな。そんな気配がしてたはずだけど。今のそれには何もかかってないみたいじゃないか。それじゃ単なる妖刀だ。威力半減もいいところだ。……もしかして、かけ忘れたのか？ だったら、少し待ってやろうか？」

「……結構です」

頭が一瞬白くなったが、冷静に冷静にと自分に言い聞かせながら、リーネは言い返す。

「これに術がかかってない理由は、まあ、そのうちわかりますよ」「そうかい」

どうでもよさそうに相槌を打つジェック。

リーネはそのジェックを睨みつけ、上体を屈め、そして思い切り地面を蹴る。

初速からトップスピードで駆け出し、五歩でジェックの眼前に到る。そしてそのまま右足を振り上げ、ジェックの脇腹へ向かって蹴り出す。

短刀を注視していたジェックは一瞬存外そうな表情になり、リーネの右足へと視線を移す。

それを見て取ったリーネは脚の動きをぴたりと止め、そのままの体勢で、右手に握った短刀をジェックの首元に向かって投げつけた。その二つのフェイントに、ジェックは驚いた表情になる、が

ぴたり

リーネの体が『停止』、そしてジェックの首わずか三ミリのところまで近接した短刀も、空中で『停止』した。

ジェックはふっと息を吐き、

「……なるほど、確かに、短刀に『能力封印』の術が施されてなければ、俺の勝負における緊張感は半減する。その隙をつけば、俺の『時間停止』の能力が発動するまでにさらに俺に近づけるという

のは事実だけれど　　ただ、やっぱり甘いね」

ジェックは宙に浮いたままの短刀を掴んだ。そして、右足を振り上げたままのリーネに近づき、短刀の先端をリーネの右脇腹にあてがい、

「俺とお前の実力差は、そんなもので覆るわけではない」

ふふんと嘲るジェック。

動けぬまま、その表情を視界の端に捉え、胸が熱くなるのを感じるリーネ。感情に任せぐぐと四肢に力を入れようとするが、動かない。どこか、力すら入らない。視認と思考以外、リーネの体は時間を停止しているのだ　　と、いきなり、
体が自由になる。

そしてその突然の事象に驚いた刹那、

ザクリッ

脇腹に熱い感覚が走る。次いで痛覚が悲鳴を上げ、地面に伏し、自身の腹部を見て、リーネは認識する　　自分の脇腹に、短刀が深々と突き刺さっていることに。

脇腹に付随している短刀。その木製の柄に赤い雫が伝い、ぽたりぽたりと床に紅の模様を作り出している。同時に、白いシャツにできた丸い染みも、刻々と広がっていく。

「ははは、今度こそ決まりだ」

ジェックはリーネを見下ろし、ポケットに手を入れ、肩を揺らしながら笑った。

「こんなところまで来てもらって、結局こんな結末とは。わかりきってたことだけど、ご苦労なことだ。さあ、これでお前の苦労も終わり。安心して召され　　ん？」

ジェックは急にかくりとバランスを崩す。驚いて足元を見下ろすと、リーネが床に突っ伏したまま、ジェックの足首を握っている。

ジェックはやれやれと首を横に振りながら、

「まったく、見苦しいな」

嘲笑を浮かべながら、振り払おうと足を蹴り上げようとした、が

「え？」

ジェックの表情が驚愕に固まる。そしてそのまま
微動だにしない。微動だにできない

「……うっふふ」

俯いているリーネが笑い声を上げた。次いでブロンドの髪を揺らし、ついと顔を上げ、

「……かかりましたね」

笑みと共に言った。

第二十話「真意」

リーネはジエックの足首を掴んだまま、ゆっくりと片膝を立てた。痛みに耐えるように、抗うように、ふくらはぎが少しばかり震えている。その顔も、失血のために青白い。しかし　　口元には笑みが浮かんでいた。

「これで、おわかりいただけましたか？　この部屋に入る前に、ワタシがこの短刀の術を解いておいた、その理由、その目的」

視線を上げ、リーネは緩やかに言葉を紡ぐ。

「アナタの能力は『時間制御』。発動した対象たる個体の時間を完全に停止させてしまう。本人の意思を無視し、排除し、そのすべての変化を禁止してしまう　　ゆえに、対象を停止させている最

中は、個体の構造を変化させることもできない。対象にかすり傷を負わせることすら叶わない。……フフフフ、そうなのでしょう？　だからあの時、ビルの上で、アナタはワタシを屋上から落とした。停止させたままの絞殺、刺殺を行わなかった。できなかった。そちらの方が安全で確実だったのに。わざわざ、ビルから落とすなどという回りくどい方法をとった。つまり、アナタの能力の発動中はワタシの命は安全。そういうことなのでしょう？」

ここでリーネは一息つき、紫色に成り変わっている唇を湿らせて、
「……逆に、こんな何の変哲もない室内では、アナタはワタシを殺すため、ワタシに直接攻撃を加えなければならない。『時間制御』

解除直後の絞殺、撲殺、刺殺。これらのどれかを選ばなければなら
ない　　そして、もし手の届く場所に刃物があれば、アナタがそれでワタシを攻撃してくることを期待するのは、決定的外れではないはず。アナタは十中八九、その短刀でワタシを突き刺してくるはず。アナタの行動を絞り込むことができる　　だから、ワ

タシはこの短刀の術を解いておかなければならなかった」

リーネはふうと大きく息を吐いた。ため息というより、意思を奮

い立たせるような吐息。押さえている脇腹からはまだ血が滴っているが、リーネは表情を和らげたまま、

「あとは、そのアタナの攻撃ポイントを急所から外せばいい。胸元にはこの短刀の鞘を忍ばせておいたので、運がよければ防げる。頭部を狙われれば致命傷になることは確実ですが、まあ、一種の賭けでした。そしてその結果、賭けは成功。これで、アナタは――
ぐ、ぐ、ぐ

ふいに、リーネの手が動き出した。さも、自身の意に反するような、反発するような緩慢な動作。

「……え？」

リーネは上ずった声を上げる。

目を見開き、リーネが凝視する中、まるで 録画 した 映像 を 逆再生 するかのように、リーネの手の平が開き、腕が強制的にジェックの足首から離されていく。

ある瞬間を境に、腕だけでなく、リーネの体全体が後方へと動き出した。

その様を見下ろしながら、如月ジェックは頬の筋肉をびくりと動かし、

「……つたく、とんだ茶番だな」

呟きながら睥睨した。そして腰をかがめ、足から完全に離れたリーネの手の平を覗き込む。そこには、赤い線で草書の漢字を幾つも重ね合わせたような紋様が描かれていた。それを見止めたジェックは、くくつと嘲笑を浮かべ、

「なるほど。手の平に切り傷で描いた紋様。動作封印の術式か。確かに、パンピーならこの封印術で勝負は決まるだろうけど
式神相手に、そんなのが通じるわけないだろうが」

呆れたようなジェックの口上。その最中も、リーネの体は後方へと動き続けている。

「動作を封印したところで、俺の能力は封じられていない。『時間制御』は健在だ。四肢が動かせなくとも、お前を引き剥がすことは

造作もない。……おまけに、俺の能力は、対象が空間を移動していない限りはその開始時間を自由に選べる。もしかしてお前はくだらない口上を並べて時間稼ぎでもしたかったのかもしれないが、それすらも無意味だ。……やれやれ、お前にしたら一世一代の大作戦だったのかもしれないが、まったくくだらない。時間の無駄だ」

このジェックの不平が言い終わるか終わらないかのタイミングで、リーネの体がどさりと床に崩れ落ちた。リーネのジェックは完全に乖離され、その距離五メートル　　リーネが命を賭して縮めたはずその差は、今や完全にふりだしへと戻った。

今の落下で傷口が余計に開いたのだろう、腹部をおさえ、床にうずくまるリーネ。

ジェックはその様を半目で見下ろし、

「お前が無知だったのか、それともアホだったのか。……確かに、俺がたかが人間一匹殺すのにこれだけ時間をかけたのも初めてだが、その結果がこれとはね。興醒めだ。せめて最後くらいは綺麗な華を咲かせてくれ」

そう言つて、ジェックはくるりとリーネに背中を向ける。そして後方の戸棚へと近づき、その二段目の引き出しから銀色の裸のナイフを取り出した。

その瞬間、

リーネはぐいと上体を持ち上げ、ジェックに向かって手の平をかざした。

それに呼応し、ジェックの右の足首　　リーネの手形がついたその赤い部分から、一枚の紙切れがばさりとひるがえる。

リーネに背を向けていたジェックは、反応が遅れ、足元に視線を送るだけに留まる。

その一枚の紙切れは、己の意志を持っているかのように、あるいはリーネの意志をなぞるかのように、ひらりとジェックの足首に巻きついた。

その刹那から、ぴたりと、まるで鎖に捕らわれたかのようにジェ

ツクの動きが止まる。

足元を見下ろし、驚きの表情のまま、体勢が完全に固まる。

「……はあ、はあ、はあ、はあ」

ジェックに手の平をかざしたまま、リーネは乱れた呼吸を幾度か繰り返した。そして、ジェックがそれ以上の動作を見せないことを確認すると、ごくりと一つ息を飲み、

「……こ、今度こそ、捕まえた」

かすれた声で呟く。

「……まったく、人が動けないのをいいことに、しゃべれないのいいことに、色々と言ってくれましたが。アナタを捕まえるのに命がけなワタシが、そんな甘い作戦のみで終結するわけがないでしょう。甘いのはあなたの方です、如月ジェック。今までの一連の作戦は、今のこの結果を得るものだったのですよ」

リーネはのっそりと立ち上がり、一步、二歩とジェックの方へと歩を進める。

「……屋上から落とされた後、ワタシが生き残ったこと。あれがヒントでした。あなたの『時間制御』の能力が完璧なら、そもそもワタシが生き残っているという結果はあり得ない。ましてや、アナタがアメリカへ逃げようとするなど……。なぜなら、アナタに『時間制御』の能力があるのなら、ワタシを屋上から突き落とす直前まで時間を『逆再生』して、もう一度やり直せばいいだけなのだから。それができないということは、アナタの能力には限界があるということ。『逆再生』できる時間が限られているということです」

時折ふらつきながら、リーネはジャックに少しずつ歩み寄る。

「そして、それだけではない。もし『逆再生』を連続で使えるならば、そんな制約もないはず。『逆再生』を連続でかけていけば、それすなわち、永遠に時間を巻き戻せるということですからね。……しかし、アナタはそれもしなかった。できなかった。つまり、一度『逆再生』を使った後は、しばらくその能力が使えない時間がある

こと。『逆再生』で遡れる時間よりも永いインターバルが存在する、ということですよ」

ジェックの二歩手前まで至ったリーネはそこで立ち止まった。

「そこが、そこそが狙い目だったのです。手の平に描いた術式の傷に、丸めた札を潜ませておく。そして、あなたが『逆再生』を使い終わった瞬間、これを発動させ、もう一度あなたを行動不能にする。これによって、アナタの『時間制御』を封じることができるようです。あなたは連続で『逆再生』を使えない。そして、遡れる時間より永いインターバルが存在する。つまり、行動不能にした後しばらくはアナタは能力を使えないし、インターバルが終わってから『逆再生』を行ったところで、行動不能に至る前までは時間を遡れない。いくら『逆再生』を使ったところで、アナタはこの行動不能からは決して逃れられないのです。そして、今あなたが言った

特例　とやらも　」

リーネはさらに一歩前へ踏み出しながら、右脚を後方に振り上げ、ドスンッ

ジェックの横顔を蹴り飛ばす。

ジェックの体は無抵抗のまま、人形のように飛ばされ、壁に激突。そしてそのまま、やはり動かない。

リーネは無表情でその様を見下ろし、

「これで、無効化ですよ」

しがない計算問題の解答を答えるかのような、淡々とした声で呟いた。そしてすたすたと、再びジェックとの距離を詰めていく。

と、

「……く、く、く」

ジェックの口元がわなわなと僅かに動き、声とも呼吸ともとれるような小さな音声を発した。

リーネは少しばかり目を見開き、

「……ほう、しゃべれますか？……まあ、札に込められる術などたかが知れてますからね。ましてアナタは式神。それくらいは抗え

ても当然でしょう」

「……く、く、あ、東の、者……そ、そうか、わかった、ぞ」

ジェックは、もはや二言以上の言葉を連続で発することすら苦しそだった。しかし、途切れ途切れになりながらも、文を繋いでいく。

「十数年、前、俺を、追い詰め、た、東の女……あ、れは、お前の母親、だな？　うる覚え、だが、何となく、見覚えが、ある。面影がある。く、く、く、そう、いう繋がり、か。因果なもの、だ。この、状況」

「……何が言いたいんです？」

聞き方こそ疑問の形式だが、鼓舞するように、弾圧するように、鋭い声音でリーネは言い放った。

ジェックは「くっ」と息のように笑うと、次いで

ばちっ、ばちっ

ジェックの顔面の前に電光が走る。そして、ジェックの体の周囲に、薄い光の壁が形成された。

リーネはそれを見、一瞬虚を突かれたような顔になったが、しかしすぐに平静に戻り、

「……シールド、ですか」

嘆息するように言った。

「まあ、今のあなたにできることと言ったら、それくらいでしょうが。……しかし、所詮、それは時間稼ぎでしかありません。数分もあれば、ワタシでも容易に破れます」

そう言って、リーネは短刀を握りなおす。

ジェックは口元を歪め、そしてさらに、

ばちちちちちっ、ばちちちちちっ

今度は、部屋の壁沿いに電光が走る。二人を取り巻くように三百六十度が光り、そして光の壁が二人を完全に包んだ。

リーネは呆気にとられた顔になる。

「……何のつもりですか？　部屋全体にまでシールドを張るなんて、

わけがわからない。打つ手がなくなって、やけになったのですか？」

「やけ、など、ではない」

動作が制限されている中、少しずつジエックはその顔を嘲笑へと変化させながら、途絶え途絶えの言葉を続ける。

「お前は、一つ、失念している。動作が、制限、されようとも、もう一つ、俺に、残された、能力、が、あるこ、と」

「……それが、シールドでしょう？」

「違う、それ、だけじゃない、なくて」

ジエックはふつと笑い、

「
精霊降ろし、さ」

第二十一話「さようなら」

リーネは最初、ジエックの言う意味がまったくわからなかった。確かに、口さえ動かせれば精霊降ろしは可能。まじないさえ覚えていれば、唱えることができるならば、どんな状況であろうとも使用できる手ではある。

しかし、今この状況で唱える意味が分からない。

どれだけ鍛錬を積んだ者であっても、精霊降ろしは百発百中とはいかない。おまけに、希望通りの精霊を降ろそうとすればなおさらだ。三十回唱えて一度でも成功すればかなり運がいい方だ。こんな切羽詰まった状況で、そんなものに賭けるなど、勝負を捨てているに等しい。如月ジエックがここまで自信ありげな表情になる意味がまったくわからなかった。

ここで、ようやくリーネは気付いた。

如月ジエックと初めて相対してからのこの数時間、疑問に思いながらも、脇に寄せていた疑問があったこと。考察を途中で放棄していた謎があったこと。つまり、

この如月ジエックを呼び出した主は、一体どこにいるのか？
そして、さらにもう一つ、先刻のジエックのセリフ。

「因果なものだ、この状況」

……つまり、こいつが母と相まみえた際、これと同じような状況になった？ それなのに、こいつは事無きを得ていた？ 生き長らえた？ そしてさらに、母はその直後に自らの手で命を絶った？

ぐるぐると、リーネの中で思考が回る。

そして次第に、その渦が収束していく。

集束していく。

終息していく。

ようやく一つの結論にたどり着き、リーネはよろりとたじろぎながら、

「ま、まさか、アナタがやろうとしているのは」

「そうさ 俺自身を精霊降ろしする のさ」

ジェックは動きが制限されているその顔に、したり顔を浮かべる。
リーネは唇をわななかせながら、

「し、しかし、そんなこと、可能なわけ……………だ、だって、精霊を降ろすには、まじないを唱えた瞬間、その精霊が精霊界に存在することが必要。そしてさらに、まじないはこの人間界でしか唱えることができない。その二つの条件を満たさなければならぬ……………
…そんな、そんなことできるわけが」

「く、く、く。確か、に、普通の、精霊、には、そんなこと、無理、だ。不可能、だ。もは、や、そんなこと、を、考えること、もしない、だろう、ね。し、しかし、俺な、ら、可能、可能、なの、さ。そう 『時間停止』を、使えば、ね」

『時間停止』……………そ、そうか！ それはそうだ。確かにそうだ。

「俺が、まじない、を、唱えた、瞬間、俺は、そのまじないの、時間を、停止、させる。そして、俺は、自らの、意思、で、精霊界、へと、帰る。そう、すれば、俺は、精霊界、で、精霊、降ろし、の導き、を受ける、こと、が、でき、る お前の、体へと、な」

わ、ワタシの、体？

「お前、の、体、パンピー、よりか、は、鍛えて、ある、し、術も、使い、慣れて、る。おまけ、に、あの、藁人形、も、お前の、仲間、だ。油断、させ、近づ、いて、隙、を、ついで、あいつ、も、殺してやる、さ。……………ついで、に、東家、の、奴ら、も、な。……………く、く。皆、殺し、だ。これ、以上、俺に、歯向か、う、奴、が、生まれ、ない、よう、に、な」

ジェックは完全に勝ち誇った表情になり、そして、
「森羅、万象、司る、天の、導き、よ、我の、意の、元、望む、者、

を、呼び、給、え。我は、義と、聖と、意と、真を、有する、者、也。精、即ち、世の、源、靈、即ち、見えざる、意思、それら、共に、有する、者、こそ、我の、意を、叶うべき、也。義を、以って、偽と、せず、聖を、以って、生とし、意を、以って、畏と、する、ならば、真を、以って、神と、成るに　」

精霊降ろしのまじないを唱え始めた。

リーネはどさりと、膝から崩れ落ちた。そして真つ白な頭の中、ようやく組み合わさったピースを改めて確認する。

……そうか。そうだ。これが、お母さんが死んだ理由。自分で自分の命を絶った理由。目的。真意。そうだ。自分の体を悪用されないため、自分の命を止めたのだ。こいつの思い通りにさせないため、こいつの思惑を挫くため、東家の人間を守るため、自分で自分の喉に短刀を突き刺したのだ。

目の前では、ジェックがまじないを唱え続けている。

恐らく、このまじないはあと一分程度で終わる。あと一分で、こいつはワタシの体に乗っ取ることができる。他でもない、自分を降ろすのだから、何もかもを知り尽くした自分を精霊降ろしするのだから、失敗などするはずもない。一度のまじない詠唱で十分。……あと一分で、このシールドを壊すのは、無理。曲がりなりにも、時の精霊が作り出した防御壁だ。そんなのは、悪手。こいつを止めるには、それよりも、やはり、自分の命を絶つ他ない。他に考え付かない。あるはずがない。ありえない……。

リーネは握りしめた短刀を、喉の位置に持ってきた。

そ、そうだ。これは母がたどった道。尊敬するお母さんと同じ道だ。間違っているわけでもないじゃないか。ここで私が命を絶てば、こいつは人間界に留まれない。それにワタシの家にはこいつの手がかりが少なからず置いてある。今度こそ、兄さんや、他の東家の人たちが仇をとってくれる。それを信じて、こいつの悪行を止めること。それが重要なのだ。

リーネは短刀の切っ先を首にあてがった。

こいつの最期を見れないまま死ぬのは口惜しい。が、しょうがない。自分の詰め甘かっただけのことだ。精霊使いとして生きていくと決めた日から、この命はこの生業に預けている。ずっと命がけだった。今さら、躊躇するわけにはいかない。躊躇する意味がわからない。これが、人を守るということ。お母さんから引き継いだ仕事だ。

リーネは諦めたように、諦めがついたように嘆息し、短刀を握る手に力を込めた

が、

「……あ、あれ？」

リーネは小さく呟いた。

そんなことはないと思っていたのに、ありえないはずなのに、今まで一度もなかったのに、自分の意思と関係なく、自分の意思に反して、なぜか

短刀の先端が、一点に留まらない。わなわなと、振れている。

ど、どうして、何で、腕が震える？　だ、だって、これは正しいこと。尊敬するお母さんも辿った道。それに、ここで首を切らなければ、また多くの人が死ぬというのに、殺されるというのに、どうして、腕が震える？　手首が震える？　刃が震える？　これは正しい、のに、正しい、のに、のに、のに……。

リーネは一層力を込め、短刀の先端を皮膚に強く押し付けた。金属の冷たい感触。無機質な感触。さらにもう一度柄を強く握り、数ミリだけ肉に食い込ませる。痛覚がちくりと反応する。びくりと肩が震えるが、我慢。もっともつと、手を首へと近づけてみる。その切っ先が、肌をわずかに引きちぎる。ぷっ、という小さな音が聞こえた。刹那

ぶしゅるるるる、と鮮血が自分の首から噴出目の前に、赤い噴水が湧き上がるのが見えた。眼前が真っ赤だった。気持ち悪かった。気持ち悪いほど綺麗だった。鮮やかだった。髪が、頬が、服が赤く染まるのが見えた。気が遠のいていく気がした。夢に落ちていく感覚がした。視界が白くなっていく気がした。力が抜けていく気がした。

リーネの腕の動きがぎくりと止まる。冷たいものが背中を伝う。手の平にじとりと汗が滲む。はあ、はあ、と息が荒くなる。

実際は、白い肌に、たたりと、赤い筋が描かれたただけなのに。

い、痛い、怖い、怖い、怖い……こ、怖い？ な、なぜ？ なぜ？ 今まで、何度も命がけで戦ってきたじゃないか？ 死ぬ気で戦ってきたじゃないか？ 大怪我をしたことだって何度もあったじゃないか。なのに、なのに、なぜ、なぜ、今さら怖い、怖がる？ 戸惑う？ 躊躇する？

リーネは再度、その振動を必死に食い止めるかのように、強く柄を握りしめた。

そしてぎゅつと目を閉じる。

もう少し、もう少し手を動かせば、それで終わる。それだけで、終わる。

そう思い、そう自分に言い聞かせ、奥歯をぎりりと噛みしめる。

その時 リーネの頬に、一つ、滴が垂れた。

「……あ、あれ？」

リーネはその冷たい感触に驚き、再度上ずった声を上げる。

今度の声は、震えていた。

その滴は目尻から伝っている。

涙だった。

兄と父に精霊使いになることを真っ向から反対された日以来の涙だった。兄に最初で最後、殴られた日以来の涙だった。リーネにとつて五年三ヶ月十八日ぶりの涙だった。その日の夜に立てた、精霊使いとして生きていく限りは決して泣くまいという誓いが破れた涙だった。

戸惑いの涙だった。

悲しみの涙だった。

恐怖の涙だった。

嬉し涙では、なかった。

ああ、そうか。このことだったのか。兄が父が、ワタシを殴

つてでも止めようとした理由はこれなのか。こういう結末だったのか。今さらながら理解した。いくら命がけだと何度も叫んでいても、やはり……やはり、思ってしまう。なぜ、ワタシはここで、こんな場所で、この心と体を放棄しなければならないのか、と。必死に生きてきた十七年を終わらせなければならないのかと。血にまみれた、こんな汚い死体を晒さなければならないのかと。アキオともつと遊びたかった。スズランさんに勝ちたかった。小林さんと藤沢先輩にお礼も言いたかった。兄さんにもパパにもありがとうを言いたかった。のに、のに、のに、それはもう、叶わないのか。こんなすぐに、こんなあっさりと、諦めなければならないのか……。あるいは母も、同じような涙を流したのだろうか……。

残すところ、あと、十秒。

しかし、これは、人を守るということ。これが、これこそが、人を守るということ。お母さんがワタシたちを守ってくれたのと同じこと。ワタシも、家族を、アキオ達を守る。そのための行為。そのための手段。だから、これは正しい、これは正しい、これは正しい、これは正しい、これは正しい、これは正しい、これは正しい、これは正しい、これは正しい、のだ……

怖い、けれど

リーネは大きく息を飲む。

痛い、けれど

そして、大きく息を吐いた。

十七年しか、生きられなかったけれど。

リーネは全身全霊の力を込めてナイフを握りしめ、
思い残すことは、あるけれど。

十数センチ上に振り上げ、

さようなら。

そして勢いよく、自身の首元へと

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！

轟音が、空から降ってきた。

天井を破り、床を叩き、砂ぼこりを高く巻きあげる。

その風圧で、如月ジェックの体が吹き飛ばされたのが、かろうじて見えた。

しかし、もはやそれ以外は見えない。

灰色の煙で、リーネの視界は完全に閉ざされている。

もうもつとする空気の中、数秒待って、しだいに視界が晴れてきた。

少しずつ前方が見えてきて、その中心に立っていたのは、リーネの高校の女子の制服。リーネより少し低い上背。小麦色の散切り頭。その女子がくると首を振り返り、その顔が見える。まるで人形のような、整いすぎた顔立ち。神々しいほどに白い肌。そして心持ち不本意そうな表情の

「『死の精霊』が、鞘河スズラン。主の命により、馳せ参じ候……」

第二十二話「そして、振り下ろした」

「す、スズラン、さん？ な、何で、ここへ？」

まるで夢か幻でも見ているがごとく、床にへたり込んだリーネは呆けた声で尋ねた。

「……だから、言いましたでしょう？ 主の命であると」

スズランは渋面を作りながら、渋々答えた。

「あなたを助けるなど、私の本意であるはずもないでしょう。主に言われたので、仕方なく来たのです。あなたの所在を調べ、探し回り、こんな遠方まで、ね。……それにあなたは、我が主について三つほど理解していません」

「……………アキオの、こと？」

リーネはぽかんとした表情のまま、半ば反射的に尋ね返す。

「そうです」

スズランは大きく頷き、

「まず一つ。亜紀雄様は、あなたが思っているより聡い方です。あなたのこのところの挙動不審。思いつめたような表情。何かを隠しているような言動。そこから、あなたが現在並々ならぬ状況にいることに感づいておられました」

スズランは指で二を示し、

「そして二つ。亜紀雄様は、あなたが思っているより決断力のある方です。あなたが追い込まれているというのは、それは推測でしかなく、確証などありはしないのに、それでも私にあなたのサポートをするよう命じられました」

そして最後、スズランは薬指を立て、

「そして三つ目。亜紀雄様はあなたが思っているより、ずっとずっとお優しい方です。三か月前、我々の敵として現れたあなたのことを、亜紀雄様はもう責めませんでした。敵対視しておりませんでした。クラスメイトとして、あなたの身の安全を考えておられました。

よって、私がここに参じたのです。私にここに向かうよう、命を下したのです」

スズランはさも自分自身の自慢話でもしているかのように、誇らしげに、胸を張りながら、それらの説明を終える。

リーネはただただぼかんと口を開け、言葉が続けられなくなった。

と、

「な、何なんだ、お前は……」

先刻の風圧で吹き飛ばされた如月ジェットが、二人を見上げながら、忌々しげな声を上げる。今の衝突でも右ふくらはぎの札は剥がれておらず、相変わらず行動は制限されていた。

「あ、東の、者。な、何なんだ、お前、は……………潰しても、潰しても、潰しても、俺に、食らいついて、くる。しかも、何だ、お前を、取り巻く、そいつら、は？ その、メンツ、は？ 藁人形、切れる情報屋、わけのわからない案内人、そして……………死の精霊？ 何なんだ？ 何なんだ？ 一体、どんな、コネを、持ってやがるん、だ、お前、は？」

コネ

その言葉に、リーネは違和感を覚えた。

確かに、彼ら彼女らとリーネは繋がっていた。その繋がりが発展し、この如月ジェット討伐において、助力してくれた。助けてくれた。コネといわれるなら、それはそうなのだろう。

けれど、

確かにリーネが望み頼った部分もあったが、それだけではなかった。自分が望む以前に、彼ら彼女らが助けてくれた部分も少なからず……………いや、だいぶあった。彼ら彼女らに頼るまでもなく、彼ら彼女らはリーネを助けてくれたのだ。

これは、『コネ』という無機質なものとは少し違う。

他力本願のそれとは少し違う。

つまるところ、これは

「選択、なのでしょう」

リーネはこつこつとジェックの方へ歩み進みながら、独り言のように呟く。

「ワタシを助けても、助けなくてもいい。どちらを選んだとしても、当人としては正しい判断になる。そんな状況の中で、皆さんはワタシを助けてくれた。助けるという選択をしてくれた」

ジェックの五歩手前、四歩手前へと至る。

「これは、嬉しいことです。幸せなことです。ワタシを肯定してくれた皆さん。皆さんの判断。皆さんの選択。コネなんていうものより、ずっと、ずっと……嬉しいものです」

リーネはジェックの眼前に至り、右手に握った短刀を振り上げた。そして左手で印を切り、術を施し始める。精霊封印の術を。

図らずもそれを一度受けたことがあるスズランは、リーネの後方からそれを見て、悪夢を思い出したかのように、眉をひそめた。しかし、何も言わない。

リーネは印を切り終え、短刀に術をかけ終え、そしてそれを左肩の上に振り上げる。

目の前の少年に視線を移したが、彼はただただ唇をかみ締め、忌々しげな表情でこちらを睨んでいるのみ。言葉は発しない。

リーネは無表情でそれを見下ろし、心の中にそつと言葉を浮かべる。

（お母さん。申し訳ありませんが、まだそちらには逝きません。まだ時期が早すぎたようです。あなたに守っていただいたこの命、もうしばらく大切にさせていただきます）

そしてふうと息を吐き　　短刀を、振り下ろした。

「　東本家が長姉、東リーネ

神の理の名の元に

あなたの存在を排除します」

エピソードその一「居場所」

小林雑音は疲れていた。

腰を丸め、頭をだらりと落とし、デパートに備え付けられているベンチに座っている。ゴールデンウィーク真っ只中ということで、家族連れで活気づいている周囲の売り場と比較すれば、なんとも不釣り合いな情景だった。

おもちゃを抱えた子供が、嬉しそうな声を上げながら雑音の目の前を走り抜けていった。しかし、もはや彼はその子供を視界に入れることすらしない。このまま数分待てば眠りこけてしまうのではないかと思われるほどの虚脱状態だった。

ふと、彼の隣にとすりと腰をかける女性があった。

黒のタートルネックにジーンズ、そして　　青白い長髪、と
　　いういでたち。髪の色とほとんど変わらないその白い顔には、緩やかな微笑が浮かんでいる。

彼女　　草の精霊、ナガツキは、頭を垂れた雑音の顔を覗き込み、

「小林様、お疲れですか？」

雑音はふっと顔を上げ、ナガツキの顔を見返し、

「まあ、ね。……というか、今日一日の僕の行動を見てれば、わかるだろう？」

声音からすら疲れているのがわかるほど、弱く低い声で雑音は答えた。

「朝の八時から駅前に集合、服にバッグに靴にアクセサリーに雑貨に本屋、そして昼はフレンチレストラン、さらに午後も引き続きショッピング。ほとんど歩き通しだ。おまけに、七割方は僕のおごりだ。肉体的にも、精神的にも、本当に疲れた……」

雑音は恨めしげな声で言う。

「お買い物、楽しくないですか？　てっきり、小林様も楽しんでら

つしゃると……」

「限度つてもものがあるだろう。スケジュールにも、金額的にも……」
雑音はふうとため息をこぼした。

「それに、君には話しただろう？ あいつ が君を降ろせるよう、内密にコーチを頼んだのは僕だ。ようは、こういう状況を解決するために、僕はわざわざそんなことをしたんだ。……それなのに、君がちゃんと帰ってきたのに、状況がまったくもって変わらない。……本当、どうなってるんだ？ あいつ の思考回路は……」

と、雑音が吐露したところで、

「おーい！」

その あいつ の呼び声が聞こえてくる。

雑音とナガツキが顔を上げたその先、陳列された洋服類の上から、東香々美が顔をのぞかせている。その丸い瞳で二人を見つめ、ひらひらと手を振り、

「ちよつと、こっちによさげなパーカーがあるんだけど！ ちよつと、試着してみようよ！ ナガツキちゃん！」

「はい、今行きます、主」

ナガツキはふわりと立ち上がり、慌てて香々美の方へと駆けていく。

香々美はなおも雑音の方へ視線を向けて、

「ほら、あんたも来なさい、にもつもち小林君！」

頼むから変なあだ名をつけないでくれ、と思いながら、雑音もしぶしぶその重い腰を持ち上げた。

二人並び、香々美の方へ向かいながら、ふと、ナガツキは首を回して雑音に視線を向けた。そしてたどたどしくも、

「……小林様。本当は、わかっているのでしょうか？」

「わかってる？ って、何が？」

「私が精霊界にいる間、主とあなたがどのような時間を過ごしたのかは、私は存じません。しかし、私がここにいるのも、それでも主があなたを連れ立つ理由。一緒にいる意味。つまりは、あなたもまた

主の隣にいて然るべき、ということ。主の傍は、あなたの居場所でもある、ということですよ」

ナガツキは柔和に笑った。

「言っただけでしょう？ あなたは、あなたが思う以上に魅力的な方です。主もそこを理解しているのです。もちろん、僭越ながら、私も

ふふ、さあ、参りましょう？ 主の元へ」

ナガツキはその青白い髪を揺らしながら幾分おかしそうに、あるいは照れたように笑うと、香々美の方へと駆けだした。

雑音もその後続き、そしてその後姿を眺めながら、人知れず思う。

本当は、わかっているのでしょうか？

確かに、そうかもしれない。

本当に香々美の振る舞いに嫌気がさしていたなら、嫌悪していたなら、もっと別な方策をとれたはずだ。例えば他の頭がいい友人を探し出すとか、あるいは自分の力で頑張るという道もあったかもしれない。……そうだ。リーネに頼んだ交換条件を、『香々美に精霊降ろしをコーチする』ではなく、『自分に勉強を教えてもらう』にしてもよかったのだ。

そうしなかったのは、やはり、そういうことなのだろう。

香々美の傍らが自分の居場所であるということを、自覚していたということなのだろう。

小林雑音はため息をつきながら、苦笑いを浮かべる。

そしてすたすたと、自分のいるべき場所へ歩き出したのだった。

エピソードその二「記憶喪失」

鞘河亜紀雄は、夕飯の買い物の帰りだった。

右手には布製の買い物袋（スズランお手製のもの）を下げている。その中にはパック詰めの豚肉や卵、ネギやペットボトルのお茶などが入っていた。それらは皆スズランから渡されたメモ通りに亜紀雄が買ってきたものだが、その内容から今晚の献立は薄々予想がついており、すなわち餃子だろうと当たりがついていた。

特にペットボトルがやたらに重く、右腕がそろそろ痺れてきた。

亜紀雄は「よいしょ」と持ち手を右から左に変え、そして公園の前を通りがかったところで

ベンチに座る、一人の少年が目にとまった。

黒いパーカーにジーンズ、そして赤いキャップという服装。それらはいかにも今時の中高生のような出で立ちであり、亜紀雄をしても注視するほどではなかった。しかし、その体勢は、少しばかり違和感を覚えるものだった。

両膝の上に両肘を置き、頭を抱え、まるで思い悩むような所作だったのである。

思わずその場に立ち止まり、その様をまじまじと眺めてしまった亜紀雄だったが、その体格や顔の輪郭（もちろんその顔は手の影に隠れていてあまりよく見えなかったが）を見て、亜紀雄は見覚えがあるような気がした。そして古い知り合いを一人一人思い出しては整合させてということを繰り返し、ある一人のところではたと思い至る。そして思わず言葉をこぼした。

「木原儀君？」

そう思えば、もはや間違いないように思えてきた。その少年の方へと駆けより、その顔を覗き込むようにして、

「……あ、あの、君、木原儀君、だよな？」

少年ははっと顔を上げた。そして、声をかけてきた相手に対し、

戸惑いを隠せないような声で、

「あ、あなたは？」

「鞘河亜紀雄。望の兄貴だよ」

「望の、お兄さん？」

動揺をにじませながら尋ね返す少年。

亜紀雄はできる限り人懐っこい笑みを作って、

「そう、そうだよ。ほら、小学一、二年の頃、よくうちに遊びに来てたじゃない？ まあ、一緒に遊びはしなかったけど、何回か見かけてサ。覚えてる？」

「あ、はい。覚えてます。そこは覚えてます。お、お久しぶりです」

「本当、久しぶり。九年ぶりくらいかな？ はははは」

亜紀雄は旧知の再開を喜ぶように というより、半ば無理

矢理に明るく話しかける。この少年が思いのほかローテンションなので、無理やりテンションを上げる他なかったのだった。

「……ええと、望に聞いた話だと、確か、君ってアメリカに行ったんじゃないかったっけ？ 帰ってきたんだ？ こんなところで、何してるノ？」

「え、あ、はい。そうなんですが……その」
少年は下を向き、言いにくそうにして

「よく、わからないんです」

「……わからない？ って、何が？」

「何もかも、です。なぜ自分がここにいいのか、あるいは今まで自分が何をしていたのか、それらすべてのことが……」

「……へ？ え、と、それは、その………記憶喪失、みたいな？」

「………はい、そんな感じです」

少年は息を吐きながら答えた。

「……いえ、うつすらとは覚えてるんです。自分がアメリカにいた

ことも。ただ、自分が具体的にどんな行動をとっていたのか、そこが思い出せない」

「な、何で？」

「それもわからないんです。……気付いたら、俺、うちの別宅にいたんです。そのベッドで寝てたんです。何でそこに自分がいたのか、まったくわからない」

少年はさらに顔を俯け、

「それに、うちの家族が見当たらないんです。その別宅ももぬけの殻。思いつく限りの場所に電話をかけてみたんですが、どこにも繋がらない。誰にも繋がらない。……それで、本宅があるこっちに來てみたんです」

「ど、どうだった？」

「誰もいませんでした」

少年はふるふると首を横に振る。

「本当に、もう、どうなってるのか、何なのか、わからない、わかりません。もう、本当、どうすればいいのか、どう、どうすればいいのか……」

今にも泣き出しそうな少年の声に、亜紀雄も慌ててしまう。記憶喪失の彼がこれからどうすればいいのか、本人にもわからないのに、九年ぶりに会った人間には余計にわかるはずもない。どんなアドバイスをすればいいのかもわからない。掛ける言葉も見つからず、亜紀雄は口をばくばくとさせる他なかった。

ここで、亜紀雄は苦肉の策で、

「そ、そうだ、じゃあ、とりあえず望に確認をとってみようか？」

「……望に？」

「うん。僕なんかより君といった時間は永いわけだし。あいつも今アメリカににいるからね。もしかしたらその時、君と連絡を取ってたかもしれない。それを確認してみるのも、一つの手だよ。……じゃあ、とりあえずうちに来なよ、木原儀君。さあ」

座り込んでいる少年に手を差しのべながら、亜紀雄は呼びかける

その、間違っ覚えていた名前を。

前述の通り、二人はそれほど接点はなく、お互いの名前も望を介して知っていただけなのである。もちろん、その字面を見たことすらない。かようにして、この誤解を正す機会は今まで一度もなく、亜紀雄はこの間違えた名前をずっと覚えていたのである。もし、名前をきちんと覚えていたのなら、この東リーネと時の精霊の戦いも、もう少し違ったものになったかもしれない。などという可能性を考慮する存在は、ここには誰もいなかった。

亜紀雄が如月ジェックを家に連れ帰った後、この少年とスズランの間に一悶着あったことは言うまでもない。

そしてまた、その結果として如月ジェックが自身の現状を理解することになったのも、話すまでもない話である。

こうして鞘河亜紀雄は、この物語における自身の最後の役割を果たしたのだった。

エピソードその三「東リーネ」

カリフォルニアのとある喫茶店の奥の席。

そこで、一人の少年がコーヒーをすすっていた。

四人がけの席に座っているが、向かい側には誰もいない。ある程度の広さのあるボックス席を、一人で占有しているのである。彼

鞘河望　は、別段誰と会話するということもなく、手持無沙汰なのを紛らわせるかのように、カップを口に運んでは戻してという動作を繰り返していた。

時間は、午後二時になるうかというところ。

周囲の席はいくつか埋まっている。混雑しているというほどでもないが、ガラガラというまでもない。他の客の会話が耳に入りながらも、望は黙ってそこに座っていた。

そんな時、入り口の自動ドアが開く音がした。

次いで、こつりこつりと、まるで誰かを探しながら歩いているかのようなゆっくりとした足音が聞こえてくる。望は何ともしないでその音を聞きながらコーヒーを飲んでいたが、しばらくしてその足音が望の脇まで近づき、そこでぴたりと止んだ。

望が顔を上げ、通路に立っている人物に目をやると　その人は、Ｔシャツにジーンズをまとった、ブロンドのロングヘアの女性だった。

その外見自体は、この付近では大して珍しくはないものだ。窓の外を通りにも、同じような服装の女性が数人歩いている。

しかし、望はその女性に対し、少しばかり親近感のようなものを覚えた　何となく、彼女の物腰が、日本的なそれに近いような気がしたのである。

なおもぼかんと望がその女性を見上げていると、彼女は微笑を浮かべ、そして日本語を発した。

「……ええと、すいません。アナタが、鞘河望、さん？」

「……………え？ あ、はい。そ、そうですが……………」

「やっぱり。フフ。初めまして。ワタシが東リーネです。アキオから紹介預かっているでしょう？」

「え？ ……ええ、ええ。聞いてます、聞いてます。……………けど、兄の日本での知り合いだという話だったので、日本人だと思ってました。確かに、『いいね』って名前は珍しいと思ってましたが……………」

「ワタシ、イギリスから日本に留学してるんです あ、ワタシも座らせてもらいますね」

そう言つて、リーネは望の向かい側に座る。そして、カウンターにいたウェイトレスにカフェオレを一つ頼んだ。

一分足らずで届いたカフェオレを口に含み、ふっと落ち着いたため息をこぼすと、リーネはまじまじと望の顔を見ながら、

「……………しかし、兄弟だというのに、アナタ、アキオとはあまり似ていませんね？」

「そうですか？」

「ええ。……………まあ、顔立ちはもちろん似ていますが、雰囲気というか、その辺りが……………」

「そうですね。まあ、境遇、みたいなところがだいぶ違いますからね……………」

望は苦笑とも自嘲とも取れる笑みをこぼした。

「……………ところで、リーネさんは兄の知り合いだということですが、その……………僕なんかにどんなご用件ですか？ わざわざ僕に会いにくるなんて？」

「ええ。ちよつと、血の繋がった弟さんに、アキオのことを聞いてみようと思ひまして」

「兄さんのこと？」

「はい。兄弟ですからね。ワタシの知らないことも沢山知っているでしょう？ 小学生の頃どうだったとか、中学生の頃どうだったとか。そういうお話を聞ければと思ひまして」

「……………はあ、そうなんですか」

望はわかったかのような返事をした。が、内実、リーネの意図はまったく理解できていなかった。兄から聞いたところ、この人は兄のクラスメイトだという話だ。兄のことを知りたければ本人に聞けばいいだけのはずだ。いくらアメリカに来る用事があったとはいえ、この人の目的地はワシントンだと聞いている。それを、こんな寄り道をしてまで自分に話を聞きに来るなんて、効率が悪いにもほどがあるだろう。一体この人は、その労力に見合うだけの話を自分から得られると思っているのだろうか？ その辺りが、望には到底理解できなかった。もちろん、リーネの真の意図が『外堀から埋めていく』という戦略の一環であることに、まったく気付いていない。

しかし望は、如月ジェックに対してもそうだったように、兄について語ることが決して嫌いではない。むしろ、頭が回りすぎるために氣を使いすぎる彼にとっては珍しく、氣遣いというものを忘れるほどに舌が回る話題なのである。なので

「まあ、兄は小さい頃からあいつた性格でしたよ。あまり表立とうという性質ではないですが、しかしそれはやっぱりその優しさから来てるんだと思いますね。実の弟だからこそわかるというか、実感できるというか。どんな友人よりも一緒にいた時間は長いですからね。僕にしかわからないということも、いくらでもあるでしょう。特に幼稚園や小学生の時はよく遊んでもらいましたよ。屋内でも屋外でも。ゲームを買うときなんて、二人でお金を出し合って買ったものです。兄の方がお年玉少なかったのに、それでも七割くらいは出してくれたんですよ。お陰で僕は」

この自慢話のような望の説明は、この後一時間半に渡って続いた。亜紀雄の小さい頃の性格や細かな好き嫌い、趣味嗜好、さらに本人が忘れてしまいたいと思っているような恥ずかしい思い出話まで、望はリーネに事細かに語って聞かせたのだった（同時刻、日本にいた亜紀雄は寒気を覚え、くしゃみを連発しており、スズランに病院に行っってはどうかと本気で心配されていた）。

いつの間にかリーネはそれらの話をメモに取り始めており、この二人のやり取りはさながらインタビュのような体になっていた。望の話が全て終わった頃には、このメモ帳の九割が文字で埋め尽くされていた。

最後に、望は話をこう締めくくった。

「まあね、他人には軽んじられやすい兄ですけど、僕にとっては世界で一番大事な人です。二つの選択肢の中で、迷いながらも、それでも僕を選んでくれる。そういう人です。そういうことができる人です。皆はそこをわかっていないんです。そこそが人間の本質だというのに。皆は一体兄さんの何を見てるのか。そこが一番人として大切な部分なんです。僕の兄の、一番尊敬に値するところなんですよ」

そのセリフを聞いた途端、リーネは今までにないほどの輝かしい笑顔を浮かべ、

「そ、そうそうっ。そうですよねっ」

無意識に声を大きくしながら深く頷いた。

「そうです。そこがアキオの一番いいところ、他の人達とは一線を画しているところです。……フッフ。よかった。やっぱり、アキオはワタシが思っていた通りの人でした」

至極満足げに言いながら、リーネはメモ帳をぱたんと閉じた。そして、腕時計を見て、

「……あ、いつの間にかこんな時間ですか。まだまだ聞き足りないですが、そろそろ出ないと飛行機に間に合いませんね。これに乗り遅れると、仕事に間に合わなくなってしまう」

そう言っ、リーネはわたたとメモをカバンにしまいながら立ち上がる。

高校生の身で仕事で単身アメリカに来るなんて、この人は世界的なモデルか何かなのだろーかと思ひながら、望はイスから腰を浮かせ、

「そうですか。それじゃあ、他のお話はまたの機会に」

「はい。ワタシもあと二週間はアメリカにいますので、また電話なりなんなりしますね。すいません、バタバタしてしまつて。では、ごきげんよう」

テーブルの上に十ドル札を置くと、リーネは小走りで店を出て行くとする　と、

「あ、あの、リーネさん」

望がリーネを呼び止めた。

リーネはドアの手前で立ち止まり、望の方を振り返つてきて、

「はい、何です？」

「あの、すいません。僕つてこういうのに疎いもので。……あの、もしかして、リーネさんつて、兄の恋人さんですか？」

望のたどたどしい質問。

それに対し、リーネは首を横に振り、

「フフフ。残念ながら、違います。残念ながら、ね」

そしてそのブロンドの髪を軽く撫で、満面の笑みを浮かべて

「　　ワタシの名前は東リーネ　　鞘河アキオの　愛人　です」

東リーネの精霊奇譚　　E N D

エピソードその三「東リーネ」（後書き）

ということで、『東リーネの精霊奇譚』でした。お読み頂き、誠にありがとうございました。

このお話は『殺し屋殺しの藁人形』および『スズランとマイナス』を完結させるものとなっていますが、実際のところ、式織がこれを書こうと決めたのは、『スズランとマイナス』を書き終える直前のことでした。

元々、『殺し屋殺しの藁人形』は三人称視点小説へのチャレンジ、『スズランとマイナス』は三人称でこれまでのキャラを使いつつ普通のお話を書こうとしたもので、それぞれそれだけで完結したものでした。

しかし、『スズランとマイナス』の最後から何番目かの話を書いている時に、『殺し屋殺しの藁人形』を読み返してみても、ふっと気付いてしまったのです。

「……あ、あれ？　そういえば、ナガツキのこと、解決してなくね？」と……。

そんなわけで、ナガツキが帰ってくるために雑音に頑張ってもらい、さらにリーネを主人公にするという思いつきで、このお話を書いてみました。

最初のプロットの段階では十話で終わる予定だったのですが、結果としてなぜか倍以上の長さに……。途中何回も間が空いてしまい、結局一年と半年以上かかってしまいました。

ようやく完結にこぎつけ、ほっとしております。一応『つくみフエイズ移動論』も書き始めており、こちらも間があいてしまつかもしれませんが、長い目でお付き合いくださればと思います。

ともかくも、本当にありがとうございました！

式
織
檻

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1265e/>

東リーネの精霊奇譚

2010年10月8日14時35分発行